嘘つき魔王

氷純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
嘘つき魔王

【Ｎコード】
Ｎ３２７３Ｗ

【作者名】
氷純

【あらすじ】
「人の痛みを思い出せ」と役立たずの神に言われた少女は異世界に転生する。
世界を滅ぼす魔王として追われる彼女は何に出会い何を思うのか。
ダークファンタジーの予定です。残酷な結末しかないと思って下さい。

一話　プロローグ

自分でも感心するくらい冷静だった。
私を制止する声も確かに聞こえていた。しかし、誰の声か判別出来ない。自己保身に必死な教師や罵声と暴力の結果に怯える同級生、いずれかが声の主だと思うけれど、あるいは私に残された良心の欠片が断末魔を上げたのかもしれない。
「どうでもいいや」
呟いて私は振り上げていた椅子を力の限り叩きつけた。

気が付くと不快な空間に漂っていた。輝きに満ちたその場所は底の浅い幸せをまとめて煮詰めたような酷く甘ったるい臭いに満ちていた。
「何をしたか分かっているのか？」
響く声が私に訊ねる。神様でも気取っているのか、堂々とした物言いに虫酸が走る。
「気取っているのではない。我は神だ」
ふざけた台詞を私は鼻で笑い飛ばした。神？　そんなゴミが今更私に何のようだ。何をしたか分かっているのか、と言ったな。私は丁重にお返ししただけだ。イジメなんて下らない事をした同級生を片端から殴っただけ。何人か死んでいるかもしれないが自業自得だ。
「残念だったな。皆生かしてある」
「……ふざけるな」
この後に及んで奴らの肩を持つのか。神が聞いて呆れる不平等振りだ。あんな代物は生かしておいても人に危害を加えるだけ、被害者が増えない内に全部殺しておけばいいんだ。
「あの者達にはしかるべき罰を与える。しかし、問う。お前は何故自殺したのだ？」

「幸せなんて手に入ることがないと確信したからよ。何人か道連れにしたかったけど邪魔してくれてありがとう」
「嘘だな。暴行事件がもみ消されないよう自身の命で世間の注目を集めた。違うか？」
流石神様だ何でもお見通し。けど何もしない。私の方がよほど上等じゃないか。
「貴様は浅慮に過ぎる」
神がため息と共に吐き出した言葉。それに私は嘲笑で返した。
「お前がやれば良かったのにね」
目の前に姿を現せば指さしてあざ笑ってやるのに厚顔無恥で役立たずの神は隠れて声だけを降らせてくる。
「……貴様は人の痛みが分かるか？」
半ば唐突に神はそんなことを言い出した。
「とっくの昔に忘れたわ」
「では思い出させてやろう」
背筋に走った悪寒に顔をしかめる間もなく視界が暗転した。気力で意識を手放すまいとするが抵抗むなしく私の意識は闇に沈み込んだ。

二話　魔王

足下がふらつく。酷い吐き気に胸を押さえながら周囲を見渡すと人の手が入っていない鬱蒼とした森だと分かった。枝葉を広げた広葉樹が太陽光を遮っている。

『では思い出させてやろう』

神の声を思い出す。何のつもりか知らないけど、こんなところに送り込まれるとは思わなかった。

水場を求めて歩き出す。顔を洗って水を飲めば吐き気も治まるだろう。

目当ての水場はすぐに見つかった。青く透き通った水を豊富に湛えた湖だ。水中を泳ぐ魚すらはっきりと見える。ただどう見ても有り得ない形状の魚で背びれが二枚あったりするのが気になった。

ここは一体どこだ？　改めて近くの木を観察するとこれまたおかしな事に気が付いた。木に張り付いていた虫が小さな火を噴いたのだ。驚いて小さく悲鳴を上げてしまった。私としたことが……。少し顔が火照ったのは単純に驚いたからだ。虫が噴いた火は幸い火の粉に毛が生えた程度なので火傷せずに済んだ。

夢だと思いたいけれどこの吐き気は本物だ。一度は自殺して捨てたとはいえ、見返りも無しに粗末に扱うほど私の命は安くない。

不用意に虫に近づかないよう注意して観察する。そして一つの法則性を見いだした。虫全体に赤い光の粒子が集まり、その光を発散するようにして火を噴く。

「魔法、とか？」

バカバカしい。自殺した時に頭でも打ったか。そこそこ使える頭だったのに勿体無い。

水で口を濯いだ私はひとまず木陰で休むことにした。妙な魚を見

るとどうしても飲む気にならなかったので喉が渇いている。野生動物でも来て水を飲んでいけば安全を確かめられるのに……。

そんなことを考えながら嫌味に晴れ渡った青空を睨んでいると視線を感じた。反応を伺うようにジロジロと無遠慮な視線の主を耳を澄まして探る。猛獣の類なら下手に動いて刺激したくない。けれど、木の葉が擦れる音に混じって聞こえてきたのは押し殺した話し声。紛れもない人の声。

私が声のする方向に目を向けて立ち上がると同時、木々の裏に隠れていた男達が出てくる。西洋甲冑に身を包んだ男達が三人、それぞれが剣と槍、そして色ガラスがはめられた杖を握りしめて私に敵意をむき出しにしている。

私が暴れて死ぬ前日まで教室はこんな空気だったな。

「黒髪に黒目、女というのは予想外だったがこれが魔王と見て間違いあるまい」

聞こえてくるのは日本語だった。酷く場違いな印象だけど、神が何等かの対処をした可能性もある。言葉が通じなければ『人の痛みを思い出す』どころじゃないだろうから。

ふいに杖の男を赤い粒子が包んだ。火を噴く虫と同じ、けれど遥かに量が多い。

警戒する私を見ることもせず杖を頭上高く掲げた男が何か呟くと彼の足下に赤い円が広がった。

私は思わず息を飲む。男の足下に広がった円は複雑な模様をしていて、魔法陣にしか見えなかった。赤い粒子の過多で火の大きさが変わるなら、あの男が放つ火を受けた私は火傷じゃ済まない。

湖に走り込むタイミングを計っていると男が持つ杖が赤く輝き、空に向けて人間大の火の玉を放った。

何故？　とっさに考えて理由が分かった。

「すでに森中に我ら騎士団が散らばっている。すぐに増援が駆けつけるぞ。魔王よ、大人しく死ね！」

酷薄な笑みでそう言い渡された。

三話　逃亡

仲間を呼ばれた。それに思い当たると同時に私は男達に背を向けて走り出していた。背後から追ってくる金属の擦れる音は騎士と名乗った連中だろう、あまり軽い装備に見えなかったけれど私を見失うことなく追いかけてきている。

敵意や悪意には慣れているつもりだった。私にそれらを向けなかったのは関わりのない赤の他人だけ。常に曝されていれば感覚も麻痺する。けれど、背後から迫る明確な殺気に私は正直怯えていた。

あんまりだ。小娘一人に大の男が三人がかり、手に手に武器を持って鬼ごっこですか？　子ども心を忘れない素敵な男性アピールなんて余所でやれ。

「こっちだ、しとめろ！」

嫌な予感、木の幹かけた手を軸にして強引に方向を転換する。首の後ろを何かが横切った。音からして矢の類。ここからは射線に入らないようジグザグに動くしかなさそう。

隙を見て振り返ると追っ手が増えていた。剣が二人に杖槍弓が一人づつ。鬱蒼としたこの森であの数は動きにくいと思うけど、しっかりと列を成している。練度の高さが伺えた。

闇雲に走り続けても直に追いつかれる。私はあまり体育の授業に出なかったから体力もない。状況の打開には頭を使うべきなんだろう。

追いつめられたネズミよろしく逆襲するのは、無理か。甲冑を着込んであの身のこなし、私が素手で挑んでも即座に返り討ちにされるに決まってる。説得も望み薄。何せ時折放たれる矢は明らかに殺意が込められている。私の言葉に耳を貸すとは思えない。

「っ！？」

左足が何かに引っかかり、転ぶ。あれこれ考えていたのが裏目に出た。すぐに身を起こして駆け出すと蜘蛛の巣が顔にかかった。泣

きそうになりながら払いのける。
踏んだり蹴ったりだ。けれど、転んでもただでは起きない。私は走りながら右手で木の枝を折る。枝とはいえ生木を走りながら手折るのは難しい。数度試してようやく手に入った二股の枝をしっかりと握り込む。
間隔の狭い木と木の間を選びながら走って蜘蛛の巣を枝に巻き付ける。出来たのは即席の網。次に木を曲がる度に目に付いた虫を適当に網に張り付ける。それで地面を、正確に言えばそこに積もった針葉樹の落ち葉を掬い取ればーー
「詠唱も無しに火の魔法だと！？」
後ろで騎士が驚いている。私の右手には松明のようになった枝がある。落ち葉が湿っていたようだけど燃え上がればこっちのもの。派手な煙を上げて後ろに続く騎士の視界を奪う。余り長くは保たないけれど十分な効果を発揮した。先頭の騎士が驚きに足を止め、後続の騎士達がそこに次々とぶつかり折り重なって倒れたからだ。
体勢を立て直そうとしている騎士達は甲冑の重みと木々の狭さで身動きが取り難いらしく、四苦八苦している。
「これ、あげる。私の代わりだと思って大事にしてね」
笑顔で騎士達に近付いて、火がついたままの松明を投げてあげた。鎧を熱せられてさぞかし暖かいだろうからそんな風に押し倉饅頭しなくてすむよ。悲鳴を背後に私はその場を走り去った。
ざまあみろだ。

火を噴く虫を種火にして針葉樹の葉を燃やすこの即席松明を私はいくつか作ってあちこちに放置して逃げてきた。
「あれはきっと火事になってるなぁ」
山一つ向こうから立ち上る煙は結構な太さ。灰色の龍が空に昇っていると表現したくなるほどに立派な煙だった。
あの山にいる騎士達は散らばった仲間を集めるべく頑張っているだろう。その後に消火活動もしてくれると時間稼ぎになって助かる。

「さて、いきますか」
どこに行けばいいのかは分からないけど。

四話　死が住み着く街

この街に着いたのは多分幸運とはいえない。
そんな私の考えなど知る由もない目の前の少女は雲で隠された星を確認しようと空を見上げていた。
その姿は魅惑的で美しい。焚き火に照らされた白い肌は一目で滑らかな肌触りと分かる。燃え盛る火と見比べても遜色ない見事な赤毛が覆う後ろ姿は華奢だけれど立ち居振る舞いは力強い。
「この広場を守りたいんだ」
少女がそう言って私を振り返った。
「残って手伝え、と？」
問いかけると少女は首を横に振った。そして、強い意志を秘めた微笑みを私に向ける。
「単なる決意表明。昔この街に来た吟遊詩人が言ってたの。言葉は記憶に強く残るって」
「そしてあなたを縛りつける、と」
私の皮肉に彼女は「続きは知らなかったわ」と肩を落とした。
今考えたんだから当たり前だ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

騎士達に追われてから五日が経ち、野草で飢えを凌ぐのに限界を感じ始めた頃、私はこの街に着いた。
街というよりも廃墟に近い。
視界には必ず何かの死体が入る。血が滴るような新しい物から腐臭をまき散らす物、骨が風雨にバラけて元の形が分からない物まで、雑多な死が住み着く街。
追われる身だから暖かい食事は期待していなかったけど、この様子だとまともな食べ物はなさそう。

せめて地図や武器になりそうなナイフくらいは手に入れたいと煉瓦作りの家を覗いていると、どこからか独特の足音が聞こえてきた。
音がする街の入り口へと顔を向ける。
石畳に転がる死体を見向きもせずに歩いてくるのは足がゼリー状の二足歩行するサイだった。肩に担いだ大きな斧を時折振るっては家を破壊している。
森でも何度か見たこいつは多分、魔物。
サイの化け物と一瞬目が合ったけれど、まるで私の存在を認めないかのように無視される。
森にいた魔物達と同じ反応。
私が魔王と呼ばれることに関係しているのかも。
とはいえ、本来なら圧倒的な脅威であろう魔物が向かってこないのは非常に助かる。中には襲ってくる魔物がいないとも限らないけど新種にだけ注意しておけばいい。
比較的原形を保っている家を見つけて中を物色する。壷を割ったりすれば勇者の気分が味わえそう。
魔王にだって遊び心はあるんだよ。
「……重い」
水瓶はかなりの重量だった。諦めて放置する。
台所から包丁を入手し棚から幾ばくかのお金を頂く。
予想はしていたけどやはり見たことのない銅貨や銀貨だった。どちらもむさ苦しい髭のおじさまが刻印されている。
価値が分からないので今後のためにも意地汚くお金を集めるとしよう。
あらかた物色した後で玄関に歩き、外れかけた蝶番に手をかけて押し開ける。
「わっ！？」
眼前を巨大な火球が横切った。散らばっていた死体が焼ける嫌な臭いが漂い始める。
……危なかった。一歩間違えれば黒こげになっていた。小麦色の

肌なら健康的だけど炭色の肌は不健康すぎる。
火球が来た方向を見ると先ほど見たサイの魔物が死骸となって転がっていた。焼け爛れた皮膚から煙が立ち上りゼリー状の足が沸騰して泡だっている。
その向こうに一人の赤毛の少女がいた。
少女はサイの魔物を冷ややかに見下ろしていたと思うといきなり口を開いた。
「人、か？」
一拍遅れて上げられた少女の顔は美しく整っていた。
「人以外に見える？」
魔王に見えると言われたらどうしよう。そんな私の心配は杞憂に終わった。
「見えない。でも普通の人間が来るとも思えないんだ」
少女がゆっくり近づいてくる。私を見据える瞳が日の光に輝いた。
魔王です。なんて名乗ったら消し炭だろうなぁ。
「とりあえずーー」
待ったをかけようと私が手の平を突き出すと、少女は弾かれたように身構える。それに苦笑を返しながら私はお腹を押さえて切り出した。
「食べるものない？」

五話　守人（前書き）

今回から台詞の前後に一行開けてみます。
読み難ければ戻します。

五話　守人

少女はベリンダと名乗った。
頻繁に魔物に襲われるこの街を一人で守っているそうだ。

「本当に守りたいのはさっき言った通りこの広場なんだ」

そう言って見渡すベリンダに釣られて私も広場を眺める。
街の中央に位置するこの広場は噴水などの飾りもなく円形に切り取られた殺風景な空間で三本の通りが繋がっている。
ここだけ人や魔物の死体がないのはベリンダが片付けているからとのこと。
開けているので見晴らしも良く守りやすいとは思う。
けれど、一人でも守りたいと思うほどの魅力を感じない。私が部外者だからか、それとも感受性の問題か。どうにも嫌な予感がする。

「どうかした？」

不思議そうにベリンダが私の顔をのぞき込む。少し広いその額を押し返して私は広場を守る理由を素直に訊いた。

「守る理由か。なんか恥ずかしいな」

ベリンダが困ったように首を傾げて考え込む。
この街は魔物の群れに襲撃されたのを期に人々が逃げ出して廃墟となり、今はベリンダしか住んでいないと彼女自身から聞いている。
他人が捨てたくらいだ、大した価値があるとも考えられない。
ベリンダは腕を組んで言葉を選んでいた。
焚き火の薪がはぜる音が沈黙に滑り込む。

「ちょっと退屈な話になる」

そう前置きしてからベリンダは語り出した。

「あたしが魔法を使えるのは知ってるね？」

サイの丸焼きを作ったあの火球はやはりこの子の魔法なのか。

分かってはいたけど物騒な世界だ、本当に。この子に比べたらイスやハサミで暴れてたあの日の私が可愛く見えるね。

「あの魔法が関係してるの？」

「そう。あたしは生まれつき魔法が使えたんだ。八歳くらいまではまともに制御できなかったけどね」

魔物を姿焼きにする威力の魔法を制御できなかった？

暴走戦車か、あんたは……。

「暴発に巻き込まれたくないから誰もあたしに近づかない。民家に被害を出さないようにあたしは広場の中央に住むことを強要された」

街としては当然の処置だろう。今と違って彼女一人が住んでいる訳じゃないし、追い出そうとした住人も居たのは想像に難くない。もしかすると広場に住めただけマシとも言える。

ただそれはあくまで街の言い分であって、広場に押し込まれた彼女は遠巻きに見つめる住人たちに何を思ったか。それを想像しかけて、気付く。

あの腐れ神め。私をこの街に誘導したな。

「制御できるようになっても何かの拍子で暴発するんじゃないかっ

て疑われてね。広場暮らしは変わらなかった。必死に制御出来てるとアピールしたもんだよ」

ベリンダが両手の平を上に向ける。その手に赤い粒子が集まったと思うと拳大の火の玉が現れた。彼女はその火の玉でお手玉を始める。

いくら何でも器用すぎだ。

「こんなことやって居るうちに旅の芸人や吟遊詩人と仲良くなってね。彼らも昼間の仕事場はここだから芸を見せ合ったり教え合ったりしたもんさ」

五つの火の玉でお手玉を続けながらベリンダは笑う。見ているこっちは気が気じゃないけれど彼女の手つきは乱れない。

「この広場はさ。あたしの家で遊び場なんだ。壊されたくない」

ベリンダが手を下に向けると火の玉が一斉に消えた。それを見届けて私は口を開く。

「思い出があるから離れたくないって事？」

「分かんないかもな」

肩を竦めたベリンダは苦笑した。

馬鹿にされたように感じるのは被害妄想だろう。どの道、心温まる思い出の持ち合わせがない私には分からない感情だ。

「ベリンダが自分を広場に縛り付けてるのは分かった」

苦し紛れに混ぜっ返した私に対して、彼女は物騒な笑みを浮かべ

て見せた。

「言ってくれるね」

喧嘩腰の口調とは裏腹に彼女は楽しげだった。

少なくとも、彼女は見境無く人を嫌うようにはならなかったらしい。境遇を考えれば奇跡的だと思うのは彼女に失礼だろうか……。

私は嫉妬すべきか尊敬すべきかを思案しつつ、焚き火で炙っていた肉の焼き具合を検分する。

「ところで、このお肉は何？」

「魔物の肉だよ。知らないで食べてたのかい？」

「いいえ、認めたくなかっただけ」

だって美味しいんだもの。我ながら飢えてるなぁ。

六話　魔法

「とんでもない上達だな」

呆れたようにベリンダが言う。

「必死だからね」

私の前にはバレーボールくらいの火球が三つ浮かんでいる。

ベリンダと出会って早一週間、彼女が魔法を使うのを見ている内に何となく魔法の原理が理解出来ていた。

空気中に漂う赤い粒子は火属性の魔力でこれを選択的に集めて軽い衝撃を与えると燃え上がる。　維持するためには燃えている状態を常に頭に想像し続ければいい。

他属性の魔法は魔力の色が違うだけで全部これの応用だ。

ただし、これは初歩の初歩。

例えば今私の前にある火球はその場で燃えるだけで動くことはない。動かすには火属性の魔力でレールを敷いてやり、その上を火球が進むイメージをしなくてはならない。

この世界の住人は魔力が必ず見えるのでこの単純な魔法を戦闘に使う人はまず居ないそうだ。

レールの先にいなければ当たらないのだから避けるのは簡単、したがって戦闘時にはレールを隠蔽する技術が必要になる。その技術を持っている人が魔法使いと呼ばれる。

「独学でここまで扱えるようになるとは……。どんな観察眼だ。この化け物」

失敬な。私は魔王だ。内緒だけど。

寝食を共にする内ベリンダはよく憎まれ口を叩くようになった。
これが素なんだと思う。
ちなみに、本当に化け物なのはベリンダの方。
魔力の隠蔽技術を持たない彼女は厳密には魔法使いじゃない。
彼女が魔物を葬り去る方法は完璧な力技だ。
道を走ってくる魔物に対して道幅ギリギリの大きさで火球を作れば隠蔽の必要は無い。
避けられなければどうという事はない、とは彼女の言葉。ドヤ顔がまぶしかったよ。
今の私は半径四メートル程の範囲でしか魔力を集められない。レールを作れるのもやはり四メートルが限度。けれどベリンダは百メートルを軽く越える。
ベリンダ曰わく、一般的な魔法使いは五メートルがせいぜいで、それ以上の範囲を掌握するために呪文や魔法陣、魔法具を使う。
ベリンダは何も使わずに百メートルを掌握するんだから完璧に化け物だ。
そんな思いを視線に込めるとベリンダは気まずそうに目を逸らした。

「睨むなよ。あたしも確かに化け物だけどあんたも一週間でこの範囲を掌握するのは化け物染みてんだ。普通は十年かかるといわれてる」

化け物としての自覚はあるらしい。

「空間把握に自信があるだけよ」

前世では死ぬ直前まで悪意や害意に囲まれていた。油断してるとシャーペンとか飛んでくるし、階段から突き落とされた事もある。
周囲の状況を常に把握することは一番の自衛手段、当然の如く磨

かれる。
そんなことは露とも知らないベリンダは私が火球をラグビーボールのように歪めたりするのを見て真似している。
頭で思い浮かべればどんな図形でも再現できるので私なりの練習のつもりだったんだけど……。

「平気な顔で正二十面体とか作らないでよ」

よくそんなの想像できるな。この子の頭はどうなってんの。
私は隣で笑いながら炎を変形させているベリンダにため息を吐いた。
けれど、こんなやり取りが出来るのは少し嬉しい。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

夕食を食べているとベリンダが突然立ち上がった。

「また南からだ」

眉を顰めたベリンダに続いて私も腰を上げる。
街の南から魔物が入って来たのだろう。

「最近多いな」

走り出しながらベリンダが呟いた。
私が街に来てからのこの一週間で魔物の襲撃は九回、その内の六回が南から侵入されている。
ベリンダが走りながら私に向けた視線が少し気になった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

魔物は街の入り口に近い場所にたむろしていた。
数は十匹でサイの魔物と八本の足の内四本が鎌になっている赤い蜘蛛が五匹づつ。
民家を壊したり、糸で巣を作っていたり、彼らなりに生を謳歌していた。
彼らの生態に興味が出るのはきっと私だけ？

「団体さんか」

ベリンダは角から盗み見て露骨に嫌そうな顔をする。

「どうするの？」

私が訊くとしばらく考えた後、彼女は口を開いた。

「あたしが正面から潰す。何匹か仕留め損なうだろうから処理を頼む」
「分かった。裏通りに隠れるから、開始前に合図をちょうだい」

裏通りへと駆ける私は背中にベリンダの視線を感じていた。

七話　魔物と知性

空に合図の火球が打ち上がる。
魔物達が一斉に空を見上げるのを私は裏通りから見ていた。
瞬時に逃げる体勢に入った蜘蛛型の一匹を除いて、魔物達は空を見上げる体勢のまま続けて放たれた巨大な火球に飲み込まれた。生き残りは後ろにいた六匹。その六匹も体に火傷を負っている。
通りに現れたベリンダに生き残りが反応して殺到する。
そんな彼らの後ろに回り込んだ私はバレーボール大の火球を魔物の後頭部に叩き込み二匹倒した。
挟み撃ちにされた魔物達が混乱している間にベリンダが土属性の魔法で岩の杭を生み出し魔物の周りを囲んだ。
後はベリンダが始末する方が手っ取り早い。

「私は逃げた魔物を倒す」
「任せた！」

生き残りに打ち込む特大の火球を準備するベリンダを置いて私は蜘蛛型の魔物を追った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

蜘蛛型が街の中央に向かって行くのを見つけた私は別の道から奴の側面に先回りする。
背後からの奇襲を警戒しているらしく、頭を下げて移動していたからだ。

「学習してるのか」

魔物も生きているのだからある程度の学習能力があってもおかしくない。しかし、ベリンダの合図を見て即座に逃げた事といい、学習能力以上のものを感じた。

私は民家の窓越しに魔物を追い越した事を確認して路地裏で待ち伏せる。

私の射程は四メートル、正直な所かなりギリギリだ。通りの端を歩いていたら距離を詰める必要がある。

火属性の魔力を集めて準備する。他に比べて殺傷力があるため集められる魔力の量が少ない私には火魔法しか攻撃手段がない。

レールを敷くと奇襲を気付かれるので頭に描くだけに留める。その体勢でしばらく待っていたけれど。

来ない……？

「ーー妙なのがいやがるな」

頭上から降ってきたしわがれ声の正体を確認する前に火球を放つ。しかし、当たる前にそいつが吐き出した糸により私の火球は相殺された。

「おぃおぃ、可愛い顔して物騒だなぁ」

屋根の上から私を見下ろすのは蜘蛛型の魔物だった。

喋る魔物なんているのか。それだけの知性があるなら今までの行動にも頷ける。

「女を見た目で選ぶと痛い目見るよ」

魔物が立つ家の中に魔力を集める。私に注意が向いている間に屋

根もろとも吹き飛ばしてやる。

「ハッハ。違いねえなぁ。だが勝ち気な女は好きだぜ」

うわぁ、気持ち悪っ！

余りにおぞましくて身震いする私を魔物は観察するようにして無遠慮な視線を投げてくる。

「場慣れしてねぇなぁ。足下から攻撃するなら素早くやんねぇと意味ねぇだろ」

足下に魔力を集めている事に気が付いてる？

試しに屋根を突き破って火球をぶつけようとすると難なく避けられた。

「どうして？」

私が思わず首を傾げると魔物は馬鹿にしたように笑った。

「隠蔽もしてない初歩の魔法なんざ魔力の流れに注意すりゃ良いだけだ」

もしかして、魔力を掌握した範囲内なら不自然な魔力の動きを感じ取って攻撃を予測できるという事か。

「それって、私より広い範囲の魔力を掌握してないと無理だよね？」

「俺の範囲はお前の三倍くらいだな」

十二メートルですか。単純計算で戦闘力は三倍。これだけの知性があるなら呪文や魔法陣も使えるかもしれない。もしそうなら攻撃

を予測するのは絶望的。
ピンチだったりする？
私の焦りを気にした風もなく魔物が嫌な質問をしてくる。

「お前、俺達と同類だよなぁ？」

そうですとも、何を隠そう魔王です。秘密だけど。

「これでも人間だよ。失礼な仲間意識を持たないでくれるかな」
「そうかい。だが、どうもお前は殺したくねぇ、見逃してやるから失せな」

それが魔物の共通認識なのか。理由はこいつ自身にも分からないみたい。
複雑な気分だけどメリットではあるかな。

「あなたが町から出て行くのなら構わないよ」
「自分の立場が分かってないなら殺すぜ？」

魔物の視線に殺気が混じる。肌が泡立つような恐ろしい感覚。

「私は友人と認めた者は死んでも裏切らないよ」

私なんかを信じた人へのそれが最低限の誠意だから。

「やっぱ気が強い女だ。好きだぜ、そういうの」

さて、啖呵切ったのは良いけど勝てる気がしないなぁ。
どうしよ？

八話　不意打ち

一言で表せば強すぎ。
魔王扱いされている私より遙かに強い。

「魔法は無駄だって言ってんだろ」

私が逃げながら肩越しに放った火球をあっさり避けた蜘蛛型の魔物が怒鳴った。

「ちっ」

こちらの攻撃が一切当たらない。
隠蔽技術があれば状況も変わるけど私にそんな技術はない。
四本の前足が鎌になっているせいでバランスが悪いのか魔物の足は遅い。それが唯一の幸運だった。
広場から遠ざかるように逃げているものの私の体力が何時まで保つのか。

「ガキのケツ追っかけても楽しくねぇんだよっ！」
「こんな可愛い十六歳になんて事言うんだ馬鹿！！」

不毛な言い争いをしつつ道を曲がる。
三件先に玄関扉が朽ちている家を見つけて駆け込む。
遅れて道を曲がった魔物は私を見失ったようで、警戒するように足を止めた。

「どこ隠れやがったぁ」

面倒くさそうに辺りを見回す魔物。私が明確に敵対しているので放置できないのだろう。
魔物が私の射程に入った瞬間、道を歩くあいつの周りを囲むように魔力を集める。
これで避けられまい。
「仕留めた！」
自然と弾む声と共に起爆した……筈だったのだけど。
「爆発しない……？」
「残念だったなぁ！」
私の声を聞きつけた魔物が前足の鎌を振るって家をなぎ倒した。
私が潜んでいた石造りの家も拍子抜けするほど容易く崩される。
慌てて道に転がり出た私の退路を断つように魔物の鎌が背後に突き立てられた。
間を置かず私の首に鎌が突きつけられる。
「魔力は乗っ取らせて貰ったぜ」
……なるほど、そんな事も出来るのか。
魔物が鎌を振りかぶる。
チェックメイト。やるなら、今。
私は鎌が振り下ろされる直前に魔物の顔めがけて包丁を投げつける。
「な！？　何処からこんなもん」
魔法以外の攻撃は予想していなかった魔物は振り上げていた鎌で

弾き落とす。
私はその隙をついて緑色をした風の魔力で周囲に散らばる瓦礫を包んだ。注意を逸らしておけば乗っ取られる心配はないだろう。
単なる石つぶても殺傷力があるんだよ。私の経験が保証する。
「石つぶてガトリング、発射！」
風魔法で吹き飛ばした瓦礫が魔物に次々と命中する。
適当に発生させた風が石の軌道を無秩序に変えているから魔力の流れやレールが見えても関係ない。
術者の私でも屈んでいないと危ない石の乱舞だ。体が大きい魔物に避ける術はなく、その体のあちこちに石がめり込む。
「ぐがぁっ！」
魔物が頭を守ろうとして交差させた二本の鎌に亀裂が入った。続けざまにぶつかった煉瓦が関節から鎌を吹き飛ばす。
私も頭を上げたらさぞかしスプラッタな結末になるだろうね……。
魔物の体から力が抜けた。既に鎌は千切れ飛び、顔も体も石がめり込んでいる。足もおかしな方向に曲がっていたり関節が増えているから満足に動けないと思う。
私は魔物が抵抗できないと見て魔法を解除した。
甲高い風切り音を伴った瓦礫は民家の壁に激突して、瓦礫ガトリングは終了する。
「こ、小娘、刃物はどっから……？」
息も絶え絶えな様子で魔物が聞いてくる。
冥土の土産にしては欲がない。

「包丁は魔物の解体に使うから何時も持ってるの。それで家に隠れた時に抜いた」

武器としては魔法の方が汎用性は高いので、普段は解体まで鞘に入れていた。

そのせいで今回とっさに武器として使えずにいたけど、おかげで暗器として活用できた。

何がどう転ぶか分からないものだよ。

魔物が絶命したのを確認して、私は地面に腰を下ろした。

流石に死ぬかと思った。

まぁ、ベリンダの役には立てたから良しとしよう。

九話　信頼はたやすく崩れる

魔物が叩き落とした包丁を拾う。正確には包丁だった物、かな。
刃の部分が砕かれて原形を止めてない。
それで魔物の鎌を叩いてみれば金属質の音が返ってきた。
風魔法で加速した瓦礫は鉄をも砕くって認識でいいみたい。
魔王は風魔法瓦礫ガトリングを覚えた！　ファンファーレはまだ？
馬鹿な事を考えている内に息一つ切らさずベリンダが曲がり角から走ってきた。

「もう片づけたんだな」

魔物の惨状を見て怪訝な顔を作るベリンダに私は頷く。

「何とか倒せた。瓦礫が混じっていても良ければ解体するよ？」
「そいつは毒があって食えない」

……苦労して倒したのにすごく損した気分。
サイの魔物は食べられるので今日はただ働きじゃないけど。
私は思考を前向きに切り替えて立ち上がる。

「それにしても、ベリンダにしては来るのが遅かったね。魔物に反撃でもされた？」

土埃を払いながら訊く。
ベリンダは魔物が死んでいるか常よりも丹念に調べている。心配しなくても死んだ振りじゃないよ。

「お前があちこち逃げ回るからだ。探すのに苦労した」

……そうですか。
ようやく気が済んだらしいベリンダが魔物の死骸に一つ蹴りを入れて歩き出したので私もそれに続いた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

もう心理的な抵抗も無くなっちゃったな。
サイの足を切り取りながら思う。
魚を捌くのとは違うから最初の頃は抵抗があったのに。
環境に飼い慣らされている感が否めない。
それでも食べないと餓死するし食べ物があるなら食べないともったいない。
あぁ、食材として見ているから抵抗無くなったのかな？

「結局のところ、お前は何者なんだ？」

ずっと無言で作業していたベリンダが唐突に訊いてくる。
元々は女子高生で元暴行犯、今は魔王やってます。我ながら波乱万丈で笑えてくるよ。
口が裂けても言えないけど。
だから、お茶を濁す。それがこの一週間のやり取りの全て。

「今日はいつもと口調が違うね。何かあった？」

手を動かしながら私は聞き返した。

「はぐらかすな。気になるのは当たり前だ」

ベリンダが私を睨む。

「魔法も剣も使えず魔物のいる森を抜けてやってきた。驚異的な早さで魔法を修得し、魔物と一人で戦う事を恐れない。機転が利き、人並み以上の知識があるにも関わらず一般常識はまるで知らない」

既にベリンダの手は止まっている。

私も手を拭いて彼女に向き直った。

「お前は怪しすぎるんだ」

「それだけ？」

間髪入れずに問い返す。

ベリンダは一瞬だけ目を伏せたけどすぐに険しい顔を私に向ける。

彼女の無言に先を促されて私は再び口を開く。

「前に言った通り、空間把握には自信があるの。人の視線にも敏感よ」

私の言葉の意味に思い当たったベリンダが視線を逸らした。おそらく無意識だと思うけど、私にとっては十分すぎる証拠になった。

「流石に誰の視線かなんて分からないけど、この街には私とあなたしかいない。それに、あなたは現れた時に息が乱れていなかった。探し回ったにしては随分と余裕があったね。そもそも、かなりの範囲を索敵可能なあなたが私をただ探すだけに時間をかけ過ぎよ」

広場に居れば街の何処から魔物が入ったのかを感知できるベリンダ。

今なら分かる。彼女は街全体の魔力の流れを感じ取る事ができるのだ。

魔力は酸素と同じで大気中に散らばっている。物が動くだけで風が起きるように魔力にも多少の変化が起こる。

それを感じ取れるからベリンダは迷わず魔物にたどり着ける。

「後は魔物の死亡確認にかなりの時間をかけていたのもおかしい。どう見ても死んでるし、普通の魔物は生きてたら暴れてる。ベリンダはあの魔物が知性を持っていると知っていたから念を入れて調べた。……まだ聞く？」

私が訊ねるとベリンダは盛大なため息を吐いた。

「覗いていることに何時から気付いてた？」

「友人を裏切らないと宣言する直前」

「ほぼ初めからか。確かにあの台詞は微妙に違和感があったな」

やれやれ、と彼女は空を仰ぐ。暫くそのまま雲を眺めていた。

「そこまでバレてるなら率直に訊く。お前は魔王、なのか？」

「違う。でも信じ切れないでしょうね。」

感情が急速に冷めていくのが分かる。

共に過ごした一週間は魔物の言葉であっさりと崩れ去る程に薄っぺらい交流だったのか。

実に私らしいね。胸も感情も薄っぺらいよ。厚いのは面の皮だけ。

……もう、どうでもよくなってきちゃったな。

「街から消えることにする。悪いけどこの包丁とナイフは貰っていくよ」

食料は森でとればいいかな。今は魔法も使えるし。
包丁を鞘に収めながら立ち去ろうとした私は周囲の魔力がベリンダに集まって行くのに気が付いた。

「お前には街に残ってもらう」

振り返った私に、ベリンダは大量の魔力で私を威嚇しながらそう言った。

十話　殻

所詮、人と人との関係なんて個人がどう思うかで決まる。
だからこの事態も予想しておくべきだった。
たった一週間で私はとても愚かになったみたい。

「なに笑ってんだ」

あらら。私笑ってる？

「嫌なことがあるとテンション上がるのよ」

例えば、絶対絶命の私を覗いている友人が助けに入らない時とかね。

「一応、理由を聞いてもいいかな？」

私を街に置いておくメリットは見あたらないし、仮に合ったとしてもこんなモノのために残る義理はないけど。
色とりどりの魔力を身に纏うベリンダ。魔力の量から見て、街全体の魔力を感じることは出来ても制御は出来ないらしい。それでも彼女の優勢を示すには充分な魔力の量だ。
戦って勝つのはおろか逃げることすら出来るかどうか……。

「魔物はお前を殺したがらない。人質に使えるはずだ」

何それ？
バカめが、と指さして笑いたい。嘲笑ってやりたい。
魔王らしさが増すのでとりあえず自重する。

「人質、ね。魔物の口振りからして、邪魔なら殺すくらいの気持ちよ」

人質はどんな状況においても邪魔だ。魔物なら見捨てるに決まっている。

私の指摘にベリンダは少しの間だけ押し黙った。やがて、反論を見つけたのか口を開く。

「一瞬でも魔物が怯めば良い。その時間がどれだけ重要か、お前も学んだろ」

蜘蛛型の魔物に包丁を投げたことを言っているのか。

ベリンダの言い分にもある程度は納得がいく。理論武装としては及第点といったところ。口喧嘩に使う武器としては貧弱だ。

どうせ暴力で勝てないなら使わせなければ良いと思って理由を言わせたけど、こんなに貧弱とはね。

呆れる私はそれでも彼女に微笑んであげた。

可愛らしいくらいにバカ。

「一つ見落としてるね」

人差し指を立てて軽く振ってみせる。

「何のことだ？」

「私が街に来てから魔物の襲撃は増えたでしょ」

首を傾げてまずは事実だけを告げる。

すると、与えられた情報で考える事もせずにベリンダが殺気立った。

「まさか、お前の差しがねか！？」
「私は何もしてないし、魔物たちも自覚は無いみたいだね。けど、本能的に私を目指して来る」

嘘だけど。
魔物の襲撃が増加した事について、私はある仮説を立てている。
それは騎士団が私を捜索しつつ、この街に向かっていて、追い払われた魔物がこの街に流れ着いているのではないかというもの。
魔物が私を目指しているとするより現実的な仮説だと思っている。
けれど、ベリンダはここに向かう騎士団の存在を知らない。
そこにつけ込み、私を人質にするメリットを消すための嘘。

「本当に広場を守りたいならリスクは可能な限り排除すべきよ」

容赦はしてやらない。優しさなんてドブに捨ててきた私はあなたがそんな風に俯いたところで同情なんかしないよ。
そういえば、この世界に放り込まれた理由は『人の痛みを思い出せ』だっけ？
頭わいてんじゃないの？

「お前は街を出ても生きていけるのか？」

話の流れを無視した質問に私は頭を掻きむしりたくなった。
やっぱりそうか。あのドブ神め。優しさと甘さの違いも分からないんだ。
ベリンダが唇を噛みながら返答を待っている。
何で私がこんなくだらない事しなくてはいけないのか。

「私とあなたは根本的に違うんだよ」

永遠にこんな場所に閉じ篭もる気ならそれで構わない。
けれど、私まで巻き込まれてたまるものか。
私はベリンダを指差し、怒鳴りつける。

「淋しいならさっさと街を出ろ！」

突きつけられた言葉にベリンダが怯むのを無視して私は背を向ける。
どうせ、彼女は何も出来ない。必死に目を背けて広場に閉じ篭もっていた事実は彼女に考える事を強要する。
魔王と疑われている私に彼女の淋しさは埋められない。
それを知っている彼女が追ってくるはずはない。
これで満足だろう？　ドブ神め。

十一話　ドブ腐れ外道神

……甘かった。

私は街の北に広がる森の入り口から空を見上げていた。

街を出た瞬間から猛烈な頭痛と吐き気が私を苛み、森に入った時には神経が焼き切れるかと思うほどの痛みが全身を突き抜けた。

街に体を向けると痛みも吐き気も嘘みたいに消え去った。

どうやら、あのドブ腐れ神の仕業らしい。

あれだけでは何一つ解決してないから神の目的が達成されていないのだろう。私に解決しろと命じているわけだ。

「独善的で甘ちゃんで、素敵に最悪な神様ね」

褒めてあげてるんだから姿現せよ。召還の呪文が違いましたか？

右手で太陽の光を遮る。

解決、するしかないのだろう。

ベリンダが思い出片手に街を出て、人と関わる。神が望むそんな結末に導くしかないのだろう。

「私には関係ないのに……。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

騎士団が現れるまで待つことにした。

気が狂いそうな痛みの中でひたすら魔力の制御を身につけ、魔物を傷つける。

五日もすれば魔物たちは私を見るだけで逃げ出すようになった。

騎士団は南の森にいることが分かった。逃げてきた知性体の魔物から聞いたのだ。

「いい迷惑だぜ。あいつら魔物と見れば片端から殺しやがる」

「人を食べてるんだから殺されても文句は言えないよ」

「……てめえはどっちの味方だ？」

さぁ、どっちだろうね。

「自分の味方かな」

私は肩を竦めて答えた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

……私は何もしていない。

教室で教師や同級生が睨んでいる。

私は何もしていない。

信じる者はいないけど、私は繰り返す。

財布なんか盗んでいない。

煙草なんか吸っていない。

援交なんかやっていない。

でも誰も信じない。

教師も同級生も友人も家族も、互いの証言を鵜呑みにするだけ。

決して私の証言を聞かない。

みんなが言っているから間違いないって、それが噂でしかなくても間違いないの？

そんなに私は疑わしいのか。信じるに値しない存在なのか。嫌悪

の視線を向ける相手なのか。無視してもいいのか蔑ろにしていいのか罵って嘲って殴って蹴って突き落として切って奪って愉しんでーーふざけんな。

「……あの外道神」

五日も連続で同じ夢見せるとは……。

どれだけキツいか分かってない。多分、わざとやっているんだろうけど。

発破をかけているつもりなら逆効果だ。

私は上半身を起こして手近な木にもたれ掛かった。

寝転がっていたら半日は虚脱感で動けなくなる。下手したら火魔法使って自分を骨まで焼き尽くしかねない。

あの外道神め。

「いつか本気で召還してやる」

やられたこと全部やり返すからね。覚悟しておきなさい。

暗い笑みを浮かべていると近くの茂みが揺れた。

間もなく現れたのは牛の頭を複数実らせた樹木だった。当然の如く魔物。

「見るたびに思うけどグロすぎて感覚が麻痺するね」

熟れた？　牛頭からは赤い果汁？　が滴っているし。

イワシの頭程度の御利益があるかもね。

「騎士、来た」

この牛頭、何を隠そう知性体だったりする。

余り複雑なことは考えられないみたいだけど、牛頭を穫ってしまえば一見そこらに生えている木と変わらないので騎士団の様子を探らせるのに使っていた。

「ご苦労様。もう逃げて良いよ」

右手をひらひら振って別れの挨拶。
牛頭の目が一斉に私を見る。

「街、危ない」

魔物に心配されました。
順調に人から遠ざかってるなぁ。

「大丈夫。死ぬ前に終わらせて逃げるから」

そのための準備もした。
私の命は私の物だ。ドブ腐れ外道神の好きにさせるものか。
絶対に解決して生き残ってやる。

十二話　攻防

適当に見繕った魔物十五匹を森から街のあちこちに風魔法で吹き飛ばし、私は広場に降り立った。

「酔った……。」

もう風魔法で空を飛びたくない。後一度はやらないといけないのが非常に嫌だ。

飛ぶだけで魔力の制御にかなり神経を使うし、頻繁に体制を崩す。紙飛行機を団扇の風で飛ばしている気分だった。

よく落ちないで済んだよ。

深呼吸しながら広場を見回す。

予想した通りベリンダの姿はない。

彼女の性格なら街に現れた騎士団の様子を見に行くだろうし、私が放り込んだ魔物も無視できまい。

「さて、壊しましょうか」

精々、魔王らしく。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ベリンダと幾人かの騎士が現れたのは広場の破壊が終わる頃だった。

「流石は人間。ノロマだね」

手を叩いて歓迎する私に騎士は早くも武器を構えている。
その横でベリンダは呆然と立ち尽くしていた。
無理もない。広場は原形を留めていないから。
さっきから頭痛がするのは神の望む形がこれではないからだろう。
私の知ったことか。

「ーー何で」

ベリンダの顔が怒りで赤くなる。その体が集まった魔力で輝いて見えた。

「何でこんな事をした!?」

ベリンダの叫びが木霊する。
彼女が放った火球を私は水の壁で防ぐも、威力を殺しきれずに体を捻ることで辛うじて避けた。
ベリンダは明らかに全力じゃないのに火を水で相殺できないって……。
本当にとんでもない魔力量。分かってたけどさ。
ベリンダの隣にいた杖を持った騎士も驚きに目を見張っている。

「理由を言えっ!!」

この広場が殻であなたが無様に膝抱えて閉じ篭もっているからだよ。
私は彼女を鼻で笑う。

「魔王が人の気持ちを踏みにじるのは当然でしょう?」

さぁ、怒れ。殺すつもりで戦え。
広場という殻を壊した。私という敵を殺す理由と目的、目的を共有する騎士団という仲間まで用意した。
これだけお膳立てを整えたんだ。魔王を追い払うくらいの実力を見せてさっさと騎士団に入れてもらえ。
そうしたら、淋しくないよ？

「絶対に許さない。殺してやる」

最初から許して貰うつもりはない。
人を一人敵に回すんだ、こちらは文字通り人生を捨てる覚悟でやってる。

「殺してみなよ」

私は舌を出して挑発すると同時に瓦礫ガトリングを打ち込む。
見た目も威力もすごいけどベリンダ達は魔力の掌握範囲からだいぶ離れているので瓦礫を突風で吹き飛ばしているだけだ。当たることは期待していない。

「邪魔だ！」

ベリンダがそう言った瞬間、細かな水球が瓦礫ガトリングを全て撃ち落とした。
……煉瓦が砂になるってどんな威力ですか？
しかも魔力のタメもせず一瞬で放ったし。

「騎士さんは退いて！」

ベリンダの一喝に騎士が驚いて下がる。

「女の子一人に魔王を任せちゃうのかな？　騎士様はフヌケだね」

高笑いしながら周囲の魔力に気を配る。

ベリンダが本気になった以上、気を抜いたら魔力を乗っ取られる。

近づいても影響力が増すから基本的に魔法の撃ち合いが良い。

私にとってはだけどね。

「やっぱりそう来たか」

ベリンダが土魔法で岩の壁を作って私の攻撃を防ぎつつ、一気に距離を詰めてきた。

一定以上に近づけば私の魔力を乗っ取り、無力化できると践んでのことだろう。

頭の良いこと。でも予想の範疇だよ。

彼女はもう目の前まで来ている。岩壁の向こうに魔力が集まっているから火球か何かでぶち抜いて攻撃するつもりだ。

「本当に力技が好きだね」

距離は十メートル前後。魔力は一切乗っ取られていない。

「焼け死ね」

怒りに赤黒く染まった声が私に死刑を宣告する。

直後、視界を焼き尽くす火球が岩壁を溶かして迫ってきた。

まともには避けられないか。私は覚悟を決めると風魔法で思い切り自分を横に吹き飛ばす。

猛烈な突風が体を打ち息が詰まる、足が浮くも民家にぶつかる前に何とか着地。

完全に避けきったと安堵したのも束の間、私を魔力のレールが囲んでいた。
息を飲む暇もない。
血走った目のベリンダが凄絶な笑みを浮かべるのが見えた。

「死ねって言っただろ」

絶対やだね！
私は再び風魔法を発動し移動する。
軌道を先読みしたベリンダが幾つものレールを走らせ私の行く手を阻もうとする。
そのレールの色は赤、火の魔力だ。
私は風に飛ばされながら水の魔力を片っ端から集める。
移動先の魔力も掌握できるので一時的に密度は増すものの、魔力個々への制御力が極端に落ちるからやりたくなかった方法だ。乗っ取られたら終わりだし。
しかし、ベリンダはケリがつくと思ったのか、私の魔力を乗っ取ろうとはせずに全力の火球を放った。
それを見届けた私はレールの軌道から火球の進路を予測し、懐から出した皮袋を一つ投げ込む。
足で地面を削って速度を殺し、集めた魔力で分厚い水の壁を形成、ベリンダの攻撃をギリギリで耐えきった。
水が蒸発して発生した霧が辺りを覆いかけるがベリンダの生み出した突風で消え去った。半分炭になった皮袋も一緒になって飛ばされる。

「何をした？」

無事な私の姿を見て嫌悪感も露わに彼女が問いかける。

「水の壁に当たる寸前、火球の威力が激減した。さっきの皮袋にどんな小細工をしたか、答えろ！」

言うわけ無いじゃん。

「あなたとは根本的に違うのよ」

私は五日前の台詞を繰り返し、自分の頭を人差し指で示す。

歯を食いしばるベリンダを無視して広場の周りを盗み見ると、すでに大量の騎士がこの広場に到着し、包囲網を形成していた。

ベリンダを感心したように見ている者もいる。

魔力の感知と掌握に関しては化け物だもんね、ベリンダは。さぞかし面白い見せ物だろう。

もう十分にアピール出来たでしょ。ベリンダの入団は決まりということで、無理なら無理でご愁傷様だ。

これ以上は私の身が保たない。

私が逃げの一手を打つ瞬間、広場の向こうから突然の歓声が上がったかと思うと、少し高めのテノールが広場に響いた。

「そこの娘、邪魔だ！」

え、私？

そんなわけないか。

ベリンダは背中から掛けられた声に反応して私から距離を取る。

おかげで彼女の後ろにいた声の主を見ることが出来た。

黒毛の馬に乗り黒いランスを構える金髪の青年だ。

私に向けられたランスの先に言いしれぬ恐怖を感じる。

「神の力の体現リンド・クライツェン、参る！」

頬がひきつるのを感じる。
……言ってて恥ずかしくないですか？

十三話　攻防2

とても恥ずかしい名乗りだったはずなのに、黒ランスの青年は眉一つ動かさない。
そして、私は萎えた気力を奮い起こさざるを得なくなった。
周りの騎士達の士気が目に見えて揚がったのだ。
四方八方から黒ランスに賛辞が送られ、負けじと他の騎士が新たな賛辞の声を張り上げる。
熱狂的だ。

「ずいぶんな人気者ね。リンなんとかさん」

衝撃的すぎてむしろ名前が記憶に残らない。残したくもないし。

「神の力も知らぬとは愚か者め」
「天魔を唯一倒した御仁ぞ！」

外野うるさい。自意識過剰で名誉欲全開の筋肉バカが。
頭のネジが緩むと口のネジも弛むんですか？

「そこの娘、見事な腕前だ。私怨があるようだが後は私に任せて貰う」

黒ランスがベリンダに「今から良いとこ取りします」と告げる。
穿ちすぎか？　周りの熱狂を含めるとあながち外れでもないと思うんだけど。人気取りしたいだけだよ、きっと。
今すぐ逃げ出したい、でもチャンスは一回しか作れない。
失敗しないためにも黒ランスがどんな力を持っているか冷静に見極めてからの方が良さそうだ。

天魔を唯一倒した、あの言葉から考えてこの熱狂的な人気を支えているのは力だろう。
天魔が何を意味しているかは分からない。ただ一目置かれているのは確かだ。
黒ランスが私に向き直る。あまり筋肉があるように見えないのに身の丈を越える黒ランスを片手で握っている。
その黒いランスの雰囲気がひどく不吉に感じた。向けられた途端にピリピリと威圧される。

「覚悟！」

気合いを込めた一声、走り出した馬、周囲の喧噪。
ー一全てを塗りつぶす黒い死の予感。
黒いランスがこちらを向いて走ってくる。ただそれだけが酷く恐ろしい。
強烈な威圧感が私を飲む。

「神の慈悲を受けて死ね！」

馬上から黒いランスを突き出した青年が叫ぶ。
神の慈悲？

「ーーそんな物ないよ」

あったら私はここにいない。
土の魔力を帯びた拳に岩のグローブを形作り、間近に迫った黒いランスを迎え撃つ。
横から殴りつけて黒いランスを逸らそうとした瞬間になぜか背筋がぞっとした。反射的に風魔法を発動し黒ランスから距離を取る。
いまの悪寒は何？

その正体を見極めようと黒ランスに目を凝らす。
それが間違いだった。

「うぐっ」

突然の衝撃と痛みに声が漏れる。
脇腹を貫く青い魔力のレール。滲む赤と広がる痛み。
振り返る時間も惜しい。次がくる前に逃げないと。
私は広場の中心へ自分を吹き飛ばす。急激な加速に傷が広がり私の動きに合わせて血の軌跡を描いた。

「ベリンダ……。」

後ろから水魔法で撃ち抜かれたのを理解する。
私を睨む目は見慣れた色をしている。
私を苦しませることを愉しむ目。
彼女の唇が形を変えて意味のある音を出す。やった、と。
私が傷を負ったことを喜ぶ騎士達。渦巻く下品な笑顔と下劣な喚声。
どいつもこいつも憎悪と殺意を正義で包んでる。
あんなモノを生かしておく必要があるの？
こんな醜悪な正義の味方、死んで当然なのに。

「騎士ども、群れてれば強いと思うなよ！！」

血を吐いてのたうち回って神の慈悲に縋って裏切られてろ屑ども。
ありったけの風の魔力で正義なんて汚い御旗を吹き飛ばしてやるよ。
その汚い誇りを埃に変えてまみれて腐って死んでいけ！
懐からすべての皮袋を取り出して空中に放り投げる。魔法の風が

皮袋を裂き、中身をぶちまける。
ー頭を貫いて掻き回すような痛みを私は感じていた。

十三話　攻防2（後書き）

次でベリンダ編は終了予定。
次編との間に外伝的なものを挟むかもしれません。

十四話　奥の手

「騎士さん伏せて！」

私が投げた袋の中身にいち早く気付いたベリンダが余計なことを叫ぶ。

怪訝な顔をする騎士達に黒ランスが重ねて怒鳴る。

「毒だ伏せろぉおぉぉ！」

意外と察しが良いらしい。

でも伏せた程度で防げると思うな。

私は風魔法を操って袋から出た赤い針状の毛を騎士達へ飛ばす。

ベリンダが言っていた毒がある蜘蛛型の魔物、その毛だ。毛に毒があるのは森で会った知性体に裏を取った。

死に到らないが麻痺性の神経毒を内包した赤い毛が横殴りの雨のように騎士たちに迫る。

私を包囲したばっかりにベリンダや騎士は風魔法で吹き返す事はできない。それをすれば反対側にいる味方も巻き込んでしまうのだから。

故に防ぐ手だては二つしかない。

「火だ！　焼き尽くせ！！」

騎士の誰かが思いつきを口にする。

毒があるとはいえ毛でしかない。となれば燃やして無効化できるのではないかと考える。

仕掛けた私が見落とすわけないでしょ。

「魔力が集まらない！？」

火の魔力を集めるのは無理だよ。

別の皮袋からばらまいた火種虫が魔法の風に危機感を覚えて火の魔力を集めているからね。

森で魔物を脅してかき集めたから皮袋の中身がビジュアル的に酷い有様だったけど、我慢した甲斐があった。

ベリンダが土魔法で岩の壁を乱立させる。それにならって魔法を使える騎士達も慌てて岩壁を出現させる。

黒ランスも上手く岩壁の陰に隠れた。

「作戦成功っと」

予定通りに進んだ。

わざわざ死角を作ってくれてありがとう。

私は魔法の風を纏い空に浮く。

魔法の射程圏を如何にして出るかが課題だったのだ。特にベリンダは上空に対しても百メートルの射程がある。

しかし、今は毒の毛を防ぐための高い岩壁が視界を塞いでいる。

逃げる姿を見られなければ追撃も何もない。

風の威力を増し、空高く飛び上がる。

何人かの騎士が目を見開いて私を見上げている。別に上空から岩の杭を落とすとかしないから安心しなさい。

苦笑した私は北の森を目指した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「痛っ」

脇腹の痛みに堪えながら何とか森の上空に到着したものの、緊張が解けて魔力の制御を誤ってしまい落下した。
枝がクッションになって目立った傷はない。かすり傷はあちこちにあるけど。
服の裾をめくってベリンダに攻撃された時の傷を確かめる。

「貫通はしていない、と」

おそらく、黒ランスと私が激突する寸前に攻撃するつもりだったのだろう。
私が悪寒を感じてランスを避けたけれど、ベリンダの射線である魔力レールの中間点に着地したせいで背後から攻撃されたのだ。
経緯はともかく脇腹の傷はかなり痛むので余っていた皮袋で押さえる。

「何でも手元に置いておく癖が役に立ったな」

生前いじめられていた私は私物を壊されないように肌身離さず持ち歩く癖があった。
この世界に来ても癖は治らず、有用と見れば拾ってしまうので保存や携帯に便利な皮袋もついつい集めてしまっていた。
皮袋を入れるための皮袋も三つあって全部が容量オーバーという筋金入りだ。
紐を取って腰に巻き、傷に当てた皮袋が外れないように調整する。

「騎士も動き出している頃かな」

街を振り返って呟く。
追っ手に見つかる前により遠くへ逃げる必要がある。

私は痛みを頭から無理に追い出して早足で歩き出す。
森には逃げ遅れた魔物がいるから騎士は慎重に動くしかない。これは唯一のアドバンテージだ。

「それにしても、どうやって私を見つけたんだ?」

ここしばらく何度も頭をよぎった疑問。
逃走してから今日まで二週間とちょっと。つまりはそれだけ距離があったことになる。
魔物を無視できる私と魔物を警戒しつつ行進する騎士団では速度にも大きく違いがある。

「だけど、神の力なんて大層な人がピンポイントで現れた……。」

偶然かもしれない。私の動きを予想したのかもしれない。
でも、この世界に来た日に私は包囲されていた。
私の位置を正確に把握していたことになる。
……GPS的な魔法で特定されてたら怖いな。
まだ魔法にどれだけの可能性があるのか分からない。
新たな街にでも行って調べるしかない。
人と関わればベリンダの事情に巻き込まれたように何か厄介事を抱える可能性もある。
それでも魔法を知るのと知らないのとでは生存率が段違いになる。
戦術的にも戦略的にも、自分の潜在能力的にも。

「己を知り……なんだったかな」

有名な言葉だったはずだけど。とりあえず、覚えているのはー

「三十六計逃げるに如かず」

地の果てまで逃げ切ってやる。
私は神を殴りつけるように空へ拳を突き上げた。

外伝　ベリンダと騎士団（前書き）

魔王のやった事とその影響です。

外伝　ベリンダと騎士団

まさか飛ぶとは思わなかった。
リンド・クライツェンは魔王の去っていった空を見上げてため息を吐いた。
風の魔力で空を飛ぶ。昔から試みられてはきたが実際にそれをする者は殆どいない。
微細な魔力の制御と何よりも度胸がいる。空を飛ぶ魔物は強力なものが多く、風の魔力を維持しながら戦闘するのは至難の業だし、魔力を乗っ取られれば墜落死は免れない。
魔力掌握と制御への絶対的な自信がなければやらない技術だ。

「さすがは魔王だな」

すぐに追撃すべきだったが、騎士の何人かは毒毛が刺さり動けない、街に送り込まれた魔物も気に掛かる。
少数精鋭の弱点が出た。

「リンドの大将」

肩を叩かれて振り向くとすらりと背の高い男が立っていた。

「将ではない隊長だ」
「細かいこと言うなよ。討伐軍は実質あんたが指揮してんだし」

人好きのする笑顔を浮かべるこの男は討伐軍に参加している傭兵だ。
トンボの名で売れている、世界でも指折りの槍の使い手。

「俺と相棒で魔王を追っかけても良いか？」
親指で魔王の逃げた先を示しながら聞いてくる。
「いや、トンボには残って貰いたい。……あの娘のこともある」
少し声を落としてリンドが目をやったのは魔王に手傷を負わせた赤毛の娘だ。
今は周りを騎士に囲まれているが、彼女が本気で突破しようと思えば簡単に崩されるだろう。
「あれか、俺は直前に来たから知らないがあの小娘はなんだ？」
「分からん。魔王に恨みがあるようだ。それに魔力の掌握範囲が我が軍の魔法使いよりも広い」
「はぁ！？　あの小娘が魔王なんじゃねえの？」
「気持ちは分かるが静かにしてもらいたい」
低い声で窘めるとトンボは素直に謝った。
「とにかく、あの娘の処遇を決めないことには身動きがとれん。暴れられたら俺かトンボかカマキリくらいでしか止められんからな」
「うへぇ、魔王だけで手一杯だってのに」
げんなりした様子でトンボが言うのに苦笑しながら、リンドは問題の娘へと足を向けた。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ベリンダは広場に敷かれていた煉瓦を拾い上げた。
元は直方体であったはずの煉瓦は砕けて歪な欠片となりそこかしこに散らばっている。

「何でーー」

自分は涙を流さないのか、そう言いかけた口をむりやり閉じる。
言葉にすれば記憶に残る。たとえ答えを知っていようとも言葉にしたくはない。
さっきまで怒りに満ちていたのに、涙一つ流していない自分に気づいた今は怒りがそのまま自分に向いていた。
今となっては、どうして怒りが湧いたのかすら理解できるが故に自分を許せない。

「お嬢ちゃん」

軽薄な男の声に顔を上げると二人組の男がこちらに向かっていた。
一人は先ほど神の力を名乗った黒いランスの青年騎士、もう一人はすらりと伸びた細い体の若い男で背中に背負った二本の槍のせいでトンボのように見えた。

「怪我はないか？」

青年騎士が訊ねる。身長差があるため見下ろす形になるがベリンダは不思議と威圧感を感じなかった。

「ない」

ついぶっきらぼうに答えてしまい内心焦ったが、青年騎士は特に気にする素振りもなく頷いた。

「そうか。色々と聞きたいことがある。まず、歳は？」
「……18だ」
相手が不快でないなら構わないだろうと口調を変えずに返す。そんなベリンダを見て若い男が笑いを堪えていた。
その後もいくつかの質疑応答を繰り返し青年騎士は腕を組んで考え込む。
しばらくして考えがまとまったのか青年騎士は腕を解いた。
「つまり、一週間この街で魔王と共に過ごしていたがその正体を知らず、近くの村から焼き出された孤児だと思いこんでいた。それで間違いないね？」
「そうだ。実際、初めて会った時に奴は魔力を扱うことすら出来なかった」
ありのままを証言するベリンダに青年騎士は難しい顔をする。
そこに今まで黙っていた若い男が口を挟んだ。
「魔力を扱えなかったってのは無理があるだろ。魔王は空を飛んで逃げたんだぜ？　俺は空中戦みたいな事もできるが本当に飛び回るのは無理だ。一週間か二週間でやれる事じゃねぇよ」
空への憧れは誰でも少なからず持っているが高所に免疫がある人間がそもそも少ないため、体が浮くだけで恐怖を感じてしまう場合が殆どだ。必然的に時間をかけて慣れる必要がある。
二週間で技術と度胸をつけるなど夢物語だ。
「実は魔法が使えたんじゃねぇのか？」
「否定はしない。実力を隠していたとしてもおかしくはないし奴は

秘密主義な面もあった」

個人的な事を何も教えてくれない、かと思えば不思議な旋律の歌を披露してくれたりと一貫しない秘密主義だった。

それを伝えると歌ってくれと頼まれたので聞かせる。

「聞いたことないな。どこの歌だ?」

民謡であれば育った土地が分かるかと思ったが男たちは首を傾げている。

「あたしも聞いてない。いつもはぐらかされたからな」

ベリンダは様々な吟遊詩人との交流で芸能の知識が豊富だったが魔王の歌に近いものすら心当たりがない。

「魔物だけの歌かもしれん」

「いいじゃねぇか。やることは変わんねぇし」

青年騎士が残念そうに肩を落とす。その背中を若い男が笑いながらバンバンと叩いている。

ベリンダにはこの二人の関係がいまいち分からない。とりあえず、仲が悪くはないらしい。

「そんなことより、この嬢ちゃんはどうすんだ?」

若い男が食事の献立でも聞くような気安さで青年騎士に訊ねる。

「……近くの街まで送るしかあるまい。兵たちの手前、置き去りにはできん」

青年騎士がため息混じりに答えた。

「教会兵は色々と大変だなぁ」

若い男は同情するような口振りだが、唇の端がピクピクと動いている。

「笑いを堪えながら心にもないことを言うな。余計に気が滅入る」

魔王討伐軍は国を跨いで追跡する可能性から教会の騎士と一部の傭兵で成り立っている。

人々の為に魔王を倒すというので正義感に燃えて士気が高い反面、正義に反すると士気が下がりやすくなる。

魔王が少女の姿をしていたことで少なからず士気が落ちている現状でベリンダを見捨てる選択肢は採れなかった。

「騎士さん、その事で頼みがある」

改まって姿勢を正したベリンダに青年騎士が怪訝な顔をする。

「あたしも討伐軍に参加したい」

広場でしか人と交流した事がないベリンダは街を出てやっていけるか不安だった。

だが縋るべき広場が無くなった以上、街に残れば今まで目を背けていた臆病な自分をいつまでも突きつけられる。

立ち向かうにしろ逃げるにしろ、街を出なくてはならなかった。

何よりも、魔王に堂々と対峙して見返してやりたかった。

見返すためには仲間がいる。上手くやっていける仲間がいてこそ、

魔王に勝ったことになるのだ。

「あたしは魔王に勝つ」

外伝　ベリンダと騎士団（後書き）

次話から新章に入ります。
話の最終チェックをするので3日くらい休むかも。
それ以上休むことは絶対ない。

十五話　病

白い樹皮の広葉樹に囲まれた池の縁にしゃがみ込む。風に立つ波紋の下に白い水底がのぞいていた。

「この場所はある魔法がかかっているのさ。俺はそれが発動するのを待つつもりだ」

そう言って男は岩に腰を落ち着けた。

水面に映る彼の姿を僅かな波が揺らすのを見つめながら私は訊ねる。

「どんな魔法？」

「大したものではないさ。俺の自己満足を満たす程度が精一杯のつまらん魔法だよ」

答える気はない、か。

周りを眺めても魔法陣や魔法具の類は見あたらない。

どんな成分によるものか、暗緑色の草の合間に見える土は灰白色。

この世界にくる直前の白い空間を思い出して気分が悪くなった。

「おい、また顔色が悪いぞ」

男が心配そうに言うのに私はさも具合が悪い風を装って弱々しく微笑んだ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ベリンダの街を出てから四日が経った頃、私は熱を出してまともに動けなくなった。

泥水の中を進むように体の動きが鈍く、視界が濁る。熱に浮かされた頭が考えることを放棄している。

街を後にしてから騎士団を引き離すために夜通しで二日も歩き続けて、休息を取ろうとしたところで狼の群に出くわした。

雨に打たれながら狼の群と命のやり取りをして体が冷えたのが体調を崩した原因だろう。

私の計画通りならベリンダは騎士団に入っている。

彼女の策敵範囲に引っかかったら正義の仮面を被った死に神がお迎えにくる。

だからどんなに体が上手く動かなくとも立ち止まれない。見つかったら容赦なく殺されるだろう。

もしこのまま死んだらとふと思う。

地獄はこの世界よりきっと上等で素晴らしい場所だ。

疑われる事が当然で信頼が成立し得ない場所。この世界も同じなのに、こうも住み心地が悪いのは中途半端に誰かを求める輩がいるせいだ。

木にもたれ掛かって息を整える。力が抜けそうな膝を叱咤してみてもズルズルと地面にへたり込む。

なんという事でしょう。魔王の天敵は病魔だったのです。

……なんて笑えない一人ナレーション。

咳に邪魔されて息が続かない、本格的に臨終の日は近い。

そんな有様だからか、周囲への警戒が大分緩んでいたらしい。

「ーー逃げろ！」

声と共に飛び出してきたのは無精ひげを生やした壮年の男性だった。

逃げろというからには追いかけている者がいるのだろうと男性の後ろに目を凝らす。

「うわぁ……。」

見なかったことにしたい。

男性を追いかけて木々の合間を縫ってくるのは、ヌメヌメした二胴一首のナメクジだった。しかも桃色に緑の縦線が入った刺激的な色合い。

どこのおばさんの頭ですか？

「何してる!?　君も早く逃げろ!!」

そんなこと言われても身動きできる状態じゃないし、魔物なら私に害はない。

とはいえ、魔物と私の関係を知るはずもなく、焦った男性は動こうとしない私の腕を掴んで走り出そうとする。

走ったら体調が悪化すること請け合いなので魔物を殺すことに決め、火の魔力をナメクジに集める。

軟体動物にあるまじき力強さで迫るナメクジを赤い魔力が包んだのを見届けて着火、近くにあった木の表面が一瞬で灰になるほどの強烈な火で炙る。

軟体動物なら水分を飛ばせば倒せるだろうと遠慮無くやってしまったのだけど、水分以前の問題で焼け死んだようだ。ナメクジの表面が水膨れのようになっている。

山火事になって騎士団に居場所がバレるのは嫌なので水の魔法で消化する。

まったく、今にも行き倒れそうなのに酷いとばっちり。

「はぁ」

咳の合間を見計らって深呼吸する。

「だ、大丈夫か？」

小動物のようにナメクジを警戒しながらおじさんが訊いてくる。

「主語を入れなよ。ナメクジは死んでる。私は死にかけ」

「えっ？　お、おい怪我をしてるのか！？　それとも病か！？」

「うるさい」

狼狽えるおじさんを睨みつける。私に触れようとした手をはねのけるとおじさんは輪を掛けて騒がしくなる。

「その様子は尋常じゃない！　何か変なものでも食べたのか？　それともーーひっ！！」

あまりにも騒がしいおじさんを火の輪で囲むと短い悲鳴をあげて押し黙った。

「うるさいって言ったの。耳が飾りか頭が飾りか知らないけど次騒いだらそのご立派な飾りごと吹き飛ばしーーげほっ」

咳き込む私に右往左往するおじさん、どちらも格好悪い事この上ない。

自嘲して木に覆われた空を見上げる。

小鳥が私達に笑い声を残してどこかへ飛び立っていった。

十六話　男の名

男性は助けてくれたお礼だと言って薬草を差し出してきた。

「いらない」

「なんで！？」

毒草ではないと誰が断言できるのか、と差し出された手を押し返しながら答える。

「これは本物の薬草だ」

男性が身を乗り出してくるので、その気持ち悪い髭面を足蹴にして遠ざける。

おぉ、クリーンヒット。予想外すぎて反応が遅れたのかな。

「……助けられた手前、確かに強気ではいられないさ。しかし、いくら何でも扱いがひどくないか？」

泥の付いた顔を袖で拭いながら落ち込む男。

「得体の知れない男が近づいてきたら誰でもこうする」

それに今の私はかなり弱っている。

睡眠不足と疲労と病の三重奏が子守歌だか鎮魂歌だかを延々と演じている状態だ。

どうでもいい他人に猫を被って接する体力は残ってない。

「早く行きなよ。その髭面はうっとうしい」

手で虫を払う仕草をして消えろと伝える。
これだけ邪険に扱えばどこかへ行くと思っていた私は男が胡座をかいて座り込んだのを見てもう一度蹴ってやろうと足を持ち上げる。

「ちょっ、ちょっと待った」

両手をあげて制止されたくらいで私が止まるはずもない。
迫る私の足に恐れをなして男は座ったまま後退し足が届かない距離まで逃げた。

「目障りなんだけど」
「魔物がうじゃうじゃと徘徊している森に病人の女の子を一人で置いていけるものか」

その『病人の女の子』に命を救われた癖にどの口がほざく。
言い返すのも億劫だから無視して、私は喉の渇きを癒やすべく水を取り出した。
木を魔法でくり抜いて成形した水筒から冷たい水が喉に流れ込む。
以前、魔法で出した水を飲んだこともあったけど、集中が切れると水の魔力に戻ってしまうので意味がなかった。それ以来、持ち歩いている水筒だ。
ほっと一息。
長くは居られないけど少し休もう。さっきまでの私はどうかしていた。
気が急くばかりに体にむち打って状況を悪化させるなんてらしくない。
追いつかれるのが怖いなら準備しておけばいい。
そうと決まれば策を練ろうと私はまぶたを閉じた。
ところが髭面が両手を打ち合わせて静寂をぶち破る。

「そうだ！　自己紹介がまだだったな。俺はオイゲンってんだ」

……何それ、トリビア？

人がのんびりと木の葉のざわめきに耳を傾けて頭を使おうとしているのに空気読みなよ。

「君は？」

会話の糸口をつかもうと躍起なのがよく分かる。

けれど、私は口を開かなかった。

この世界からすれば私の名前はあまりにも異国情緒に溢れている。

魔王と即座にバレる事はないにしろ、違和感は覚えるだろう。

危ない橋は渡らない方がいい。

李下に冠を正さず、瓜田に沓を履かずとも言うし。

そんな訳で私は名乗らない。偽名も考えたけれど、ベリンダしか参考資料がないので却下。

「……君の名前は？」

私が沈黙を守るので不安になったらしく、オイゲンの声は震えている。

私が長い沈黙と冷ややかな視線を返し続けると、オイゲンの動揺が大きくなっていく。

「す、すみませんでした」

ついに耐えられなくなったオイゲンが頭を下げる。

「別に悪い事してないのに謝るなんて変な人」

「君がそれを言うのか！？」

オイゲンが地面を叩いて怒鳴る。

感情の起伏が激しい男だ。

「ところで、オイゲンはこんな森で何してるの？」

強引に話を変えると、不貞腐れたオイゲンが黙りを決め込んだ。

意趣返しのつもりだろうけど、静かにしてくれるならそれに越した事はない。

私は不意に出た欠伸をかみ殺して伸びをする。

頭上を仰いで木の葉の緑に太陽光を透かし見る。風に揺れる緑一色の万華鏡。

腹が立つくらい綺麗な世界だ。

「錯覚って残酷だね」

オイゲンが首を傾げる気配に笑いをこらえて立ち上がる。

まだ熱もあるし体の動きも鈍いけど、錯覚を楽しむ余裕があるなら大丈夫だ。

歩き出した私の右にオイゲンが並ぶ。

この胡散臭い男を連れて歩くのは気が進まないけど、私の姿を見られた以上は放置するより近くにおいた方がいい。

私を護衛にしようという思惑が手に取るように分かるのでかなり不愉快だけど、我慢しよう。

ちゃんと使い道も考えてある。

「オイゲン」

「なんだ？」

「魔物に会ったら囮にするから」

大の男一人を差し出せば魔物の背に乗せて貰えるかもしれない。
我ながら良い案だ。
横目に様子を窺うとオイゲンの頬が引き吊っていた。

十七話　古い神殿

遠くで鳴り始めた雷に空を見上げる。
灰色の雲に覆われた空は今にも泣き出しそうな風情で私たちを見下ろしていた。

「もうじき降るな」

オイゲンがぽつりと漏らす。
深い森とはいえ雨が降れば濡れてしまう。
私の体調を考えるとあまり歓迎できないことだ。
手近に雨宿りできる場所があればいいけど、こんな森では期待できないだろう。
仮に建物があってもきっと魔物が壊している。
雨をやり過ごす方法を思案していると肩を叩かれた。
振り返るとオイゲンが森の奥を指さしている。

「向こうに古びた神殿がある。そこで雨を凌ごう」
「なんで神殿があるって知ってるの？」
「俺の目的地の一つだからさ」

何らかの罠ではないかと訝る私にオイゲンは頭を掻いて恥ずかしそうにそう言った。

「案内して」

オイゲンを先に歩かせ、何かあれば対処できるように私はかなり後ろを付いていく。武器である魔力を集めるのも忘れない。
そんな私をオイゲンは肩越しに振り返る。

「可愛げないな」
「しっかり者だからね」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

石造りの神殿はあちこちに苔が生えていたりして居心地が悪そうだった。神には似合いの場所だ。
不思議な事に魔物による破壊の痕は見られない。
神殿に入る前、地面に膝を突いて祈るオイゲンを蹴飛ばす。

「な、何すんだ!?」
「ムカつくから」
「悪びれずに言うことかよ」

オイゲンが立ち上がって土埃を払う。
だらしなく開いた扉が私たちを待っていた。
中は凝った意匠の柱が並んだ広間で奥には筋肉質の男を象った石の彫刻が安置されていた。
芸術的な価値は分からないけどそれなりに優れた作品だと思う。

「結界は生きてるみたいだな」

オイゲンが彫刻の台座を撫でながら言う。
彼の手元には白い魔力が集まる魔法陣が描かれていた。光の魔力で動いているのだろうと見当をつける。

「結界って何?」

想像はつくけど後学のために詳しく訊きたい。

「知らないのか。特定の魔物が入れないようにする魔法のことだ。対象にする種類の魔物の血が大量に必要だから金持ちの貴族様でもまず作れないけどな」

この魔法陣を利用すれば私が魔物ではないと証明できると思ったのに……。

結界の中に魔王がいても対象ではないからって無視される訳だ。

もっと汎用性を確保しておきなよ。

諦めて魔法陣を観察する。八角形と四角形で構成された複雑な図形と文字らしきものが書かれていた。

羊皮紙を取り出して複写しておく。

「器用だな」

私の手元を覗いたオイゲンが褒めるくらいには綺麗に書き写して羊皮紙をしまう。

「水魔法で炭を流し込んで図を書くとは……。魔法使いはみんなそうなのか？」

……誰でもやると思ってました。器用って魔力の制御技術を褒めてたのか。

「こっちの方が楽だからね」

適当に笑って誤魔化しつつオイゲンに向き直る。

「それより、オイゲンはここに何の目的で来たの？　美術品泥棒とか？」

彫刻を目で示して茶化すとオイゲンは青い顔をした。

「そんな罰当たりなこと出来るものか！」

崇拝する相手は選んだ方が良いと思うけどね。信じる者は足下をすくわれるよ？

経験中の私が言うんだから間違いない。

「それなら目的は？」

台座に腰掛けて問う私にオイゲンは渋い顔をした。これ見よがしに足をぶらつかせてやる。

「俺の目的はこの神殿にある魔法の鏡だ」

魔法の鏡、ね。

神殿の内部をざっと見渡した限りそれらしい物はない。

無駄に手の込んだこの広間の他に部屋も無い。

「盗まれた後かもね」

「そんなはずはない」

オイゲンが腰に手を当てて偉そうに断言する。どうだと言わんばかりに口髭がピクピク動いていて毟ってやりたくなった。というか、何でこの人こんなに偉そうなの。

「魔法の鏡に金銭的な価値はない。手間をかけて持ち出す輩はいな

いさ」

魔法の鏡なのに価値がないのか。

どんな魔法がかかってるのか分からないけど、宝探しにはちょうど良い。雨が止むまでの暇潰しにもなりそうだ。

「隠し場所に心当たりは？」

「ない」

……一瞬で白けた。

でも、騎士団から逃げ続けて観光もしてないからこんな遊びもいいだろうと気を取り直す。

何より冒険っぽいし、楽しめそうだ。

私は雨漏りに合わせて台座をかかとで叩きながら隠し場所を考え始めた。

十八話　地下室の見つけ方

鏡を見つける簡単な方法を思いついた。
周囲の魔力に注意して神殿の中を歩き回る。
今の私は半径七メートルほどの魔力を掌握でき、その範囲内なら魔力の感知も可能だ。

「みっけ」

足下に魔力を感じる。それは床下に魔力が溜まる空間があるのを示唆していた。
早い話、地下室があるのだ。

「姫さん、手際が良いな」

妙な事を言いながらオイゲンが拍手する。

「姫さんって何？」
「名前を教えてくんないからさ」

あだ名か。センスのない。嫌がれば名前を教えろと言われるだけだから放置に決定。
というか騎士団が曰く姫ではなく王らしいよ。魔がつくけど。
私は床を観察して入る方法を調べる。
いっそ魔法で穴を開けようかと思ったけど、古い建物なので崩れたら困る。

「雨が激しくなってきたな」

声に振り向けば、オイゲンが天井を見上げて、雨と雷が奏でる荘厳な調べを聴いていた。

「手伝ってよ」

彼の服を掴んで軽く引くと謝りながら私の隣に座り込んだ。

「って、姫さんは休むのかよ」

入れ替わりに立ち上がって、壁に向かう私へ不満げな声で言うオイゲン。

「疲れたのよ」

魔力制御は神経を使うとても繊細な作業だ。隣で悠々と音楽観賞していたオイゲンには分からないのだろう。

私は壁に背を預けて座り込む。熱で火照った体に石の冷たさが心地良い。

膝を引き寄せて抱え込み、顎を乗せる。

今晩はここで休むしかない。

夜闇で視界が閉ざされた森の中、雨で足音を消した狼に近づかれたら反応する前に餌になってしまう。

油断すると手放してしまいそうな意識を弄んでいるとオイゲンが声をかけてきた。

寝むたい眼を擦りつつ返事をした私にオイゲンは床石を調べながら言う。

「姫さんは寂しくないのか？」

唐突に何を言うのか。

首を傾げる私にオイゲンが続けるには、一人旅の途中に倒れるほどの病にかかれば独り言で気を紛らわせたり、石や木を人に見立てて話しかけるのが旅人の定番らしい。

けれど、私はせっかく知り合ったオイゲンに話しかけたりせず独り言も口にしない。

不思議というより不気味に感じるそうだ。

「……で？」

だからどうしたのか。

私の寝ぼけ声にオイゲンが横目で見てくる。

友達や親は恋しくならないか、とオイゲンの声が聞こえる。

「あなたは生ゴミが腐る過程を最後まで見届けるの？」

そう欠伸をかみ殺して問い返す。

眠気に霞む風景の中で髭の男が情けない顔をした。

彼が何か言ったので聞き返す。

親は例え死んでも子を心配する。そんな事を言ったらしい。

親が私を心配する？

同級生に階段から突き落とされて入院した私を見舞いに来なかった。

腰まで伸ばしていた髪を無理やり切られた私を見て何も言わなかった。

あれは心配していたの？

食事が私の分だけなかったり、満点の答案を破ってゴミ箱に捨てていたけど心配していたの？

変なの……。

親である前に人間なのだから、利己的で打算的に子供が利益になるかを考えてるはず。

子供に対する態度は親という立場ではなく、個人の資質に左右される。
人として成長しているのが条件であって、親である事は関係がない。
私の親はそういう意味で未熟だった。それだけ。

「オイゲンには子供がいたの？」

私が訊ねると、オイゲンは一瞬だけ沈黙した。

「いる。だが、恨んでるだろうな」

すっかり暗くなった神殿の中にオイゲンの情けない声が落ちる。
『いた』ではなく『いる』と言うからには存命か。
この男は本当に何故こんな森にいるのか。生きているなら森をさまよい歩くより建設的なことがあるでしょうに。

「謝ってやり直せば？」

「無理だ」

私の助言をぞんざいに扱って、オイゲンはそれきり喋らなくなった。
恨んでるだろうな、か。
嫌な予感を喚起する言葉だ。
どうやらこの出会いもお優しい神の仕業らしい。
またお腹を撃たれないと良いけど。
うっすらとそう考えながら私は浅い眠りについた。

十九話　地下室

三メートルほど先で私が掌握した魔力が押し退けられた事に気付いて飛び起きる。
身構えた私の前には目を丸くしたオイゲンがいた。右手には蝋燭が握られている。

「起こすつもりはなかったんだが」

すまなそうに言うオイゲンに拍子抜けして私は肩の力を抜いた。

「それ何処にあったの？」

握られた蝋燭を指差して訊ねる。

「元から俺のさ。鏡が隠されていた場合を考えて明かりを持って来てたんだ」

オイゲンが自慢するように蝋燭を振る度に臭いが漂ってくる。

「魚臭い」
「当たり前だ」

当たり前なのか。
すぐに慣れるとオイゲンは言うけど、慣れるまで我慢するより自分で明かりを作った方が良い。
そう思って光の魔力を集めようとしたらオイゲンに止められた。

「何？」

「あのな。結界に使う魔力を姫さんが消費してどうする」

言われてみればその通りだ。

結界が無くなって魔物が入っても私は困らないけど、口論するのは時間の無駄なので光の代わりに火の魔力を集めて灯す。

「俺の立つ瀬がないんだがな」

「溺れてれば？」

頭を掻いてぼやくオイゲンに冷たく返して、体をほぐすために伸びをする。

まだ少し咳が出るものの、かなり楽になった。

久しぶりに休めたのも大きい。

神殿の中は暗く、雨も激しさを増していた。まだ夜中らしい。

そういえば、夕食も食べてない。

最後に食べたのは何時だっけ？　昨日の記憶があやふやで思い出せないけどお昼も食べなかったはずだ。

意識しだした途端に空腹を感じたので夜食を採ることに決め、皮袋から魔物の肉と野草を取り出す。

硬めの草を軽く揉んで柔らかくしつつ、土魔法で作り出した土鍋に水を入れる。火魔法で豪快に熱すればすぐに沸騰した。

「姫さん、さらりととんでもない事するな」

「話かけないで。気が散る」

土鍋と火を同時に頭に思い描いている必要があるので集中していないと土鍋に穴が開いたり火が弱まったりする。

こう見えて高等技術なのだ。挙げ句に話せと言うのか。

「俺も食っていいか？」

「だめ」

一蹴するとオイゲンは肩を落とした。

「俺からも食材を出すから頼む。しばらく温かい物を食ってないんだ」

オイゲンが頭を下げて干し肉と野菜を出してくる。

肉はともかく野菜は欲しい。ビタミンの不足を補うチャンスだ。

最近は夜目が聞かなくなってきていたから大いに助かる。

「わかった。いいよ。ただし、それ入れて」

人参にしては葉っぱの形がおかしいけど背に腹は代えられない。

話している内に火が強くなってしまった。落ち着いて対処する。

いつもなら焚き火の上に土鍋を作るだけでいいのに。

雨のバカ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

食事を終えて白湯を飲みながら一息つく。

「そういえば、オイゲン。地下への入り口は見つかった?」

土魔法製の岩コップを片手に訊くとオイゲンは背後の闇を顎で示した。

火の魔法で照らして見ると床にぽっかりと穴が開いている。

「床石の一つが外れるようになっていた。坂が下に続いていてな。一緒に来るんだろう？」

オイゲンが背後の穴を見つめながら訊いてくる。

何故か浮かない彼の表情に首を傾げながら探検隊に参加を表明する。

行かないと性悪神にどんな酷い目に遭わされるか分からないもの。

それに情報を集めないと性悪神の裏をかけない。

にやつく私を怖がるオイゲンには悪いけど利用させてもらうよ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

オイゲンを先頭に地下へ進む。

道は緩やかな下り坂で湿った土が剥き出しになっていた。

一酸化炭素中毒はお断りなので事前に風魔法で換気してあるものの陰鬱な空気まではなくならなかったようだ。

狭い坂を下りきると今度は少し幅が広い通路に出た。まだ歩かないといけないらしい。

「隠し通路を見つけておいて何だけど、本当に魔法の鏡はこの先にあるの？」

そもそも隠す必要がある物なのか。

かかっている魔法が原因かもしれないけど。

オイゲンも不安なのか答えを返さずに足を動かす。

数分は歩いたように感じた。

試しに地上の魔力を探ってみたけど感知できない。かなり深く潜ったようだ。

「見えたぞ」

オイゲンの弾む声に促されて正面に目を凝らすと開けた空間があるのがわかった。

オイゲンの足が速まる。

急速に遠ざかる彼の背中に苦笑しながら後に続いて広間に入る。

「これはまた、手が込んでるね」

学校の教室四つ分くらいの広間の壁は綺麗に削り取られている。

磨いた玉のような質感だった。

造った人は凝り性の暇人だったのだろう。その職人魂は素直に尊敬する。

「それが鏡？」

広間の中央に鎮座していたのは手のひら大の丸い鏡だった。

オイゲンは鏡の周りを歩きながら光の魔力を集めている。

魔力の掌握範囲がかなり狭いらしく、苦戦しているようだ。

「……手伝おうか？」

見かねて申し出ると首を横に振られた。

「俺がやらないと魔法が発動しないんだ。壁際で見学しててくれ」

指示通りに壁際で作業の完了を待つ。

さて、一体どんな魔法なのか。

遅々として進まない作業に欠伸をしながら私は楽しみに待つのだ

った。

二十話　魔法の鏡

オイゲンがようやく鏡に魔力を注ぎ始めた。

「よし、終わりだ」

彼が腰に手を当てて眺める鏡は淡く光を放っている。光の魔力が影響しているのだろう。

「早く始めてよ」

魔王が待ちくたびれてますよ。

オイゲンがわざと時間をかけていたのには気付いてるけど、そんなに見せたくない物なのか。

「慌てんなって、今から発動させるさ。俺の番が終わるまで近づくなよ」

何故か、叱るようにオイゲンが言う。

理不尽だ。

「いいから早くしてよ」

「はいはい。お待ち下さい、お姫様」

いい加減な返事をして、オイゲンが鏡を手に取る。

それから数秒の間、ナルシストみたいに鏡を覗き込んでいた。そのまま飛び込んで溺れてしまえ。

私の心の声が聞こえたわけでもないだろうけど、オイゲンは顔を上げると鏡を台に戻した。

すると、次第に鏡の輝きが強まり始める。
広い地下室の隅々まで照らす白い光が目に刺さり、思わず私はまぶたを閉じた。
しばらくして明るさに慣れたのを見計らって目を開ける。
鏡が懐中電灯のように私へ光を浴びせていた。目を閉じている間に光に指向性が加わったらしく、鏡の後ろにはもう光が届いていない。
オイゲンが鏡の後ろに立って手招きしている。

「姫さん。こっちに来てくれ」

頷いて鏡の後ろに回り込む。
鏡の光が照らす壁にはどこか暗い森で焚き火をしている青年の姿が映されていた。

「この鏡って、もしかして映写機？」

私の呟きにオイゲンが怪訝な顔をする。この世界には無いだろうから当然か。
鏡自体は何の変哲もない普通の物に見える。魔法でこの状況を作り出しているのだろう。
壁が丁寧に研磨されていたのはスクリーンの代わりだから、地下室なのは暗室にする必要があるため。

「理にかなってる」

納得する私にオイゲンは更に怪訝な顔をした。

「姫さんが何を考えてるか分からないが、満足してくれたようでなによりだ」

オイゲンが困惑を声に滲ませつつ言う。
その声に別の響きが混じっているのを私は聞き逃さなかった。
明確に言葉にはできない違和感だったけど、何かを皮肉ったように感じたのだ。
壁に映された青年を見ているオイゲン。その表情からは何も読み取れない。
いや、読み取れないように無表情を貫いているのか。
追及すべきか。
隠したがっているのに？
他人の隠し事なんて泥で出来ていて、迂闊に踏み込むと足を捕られるのだ。
この髭面にそこまで深入りする義理も義務もない。
けれど聞いておかないと神からの嫌がらせに悩まされるだろう。
自分の為だけに他人の隠し事を暴く、傲慢かつ一方的で惚れ惚れするね。
私の視線に気付いたオイゲンが首を傾げる。

「どうかしたか？」
「いいえ、何でもない」

視線を部屋の隅へと逃がす。
その時、風の魔力が妙な動きをしているのに気付いた。
さり気なく魔力が向かう先を辿ると、部屋の入り口に少しずつ引き寄せられているのが分かった。
見なかった振りを装ってオイゲンに向き直りつつ、素早く部屋に目を凝らす。
明らかに風の魔力が減っていた。
間違いなく魔力を集めている誰かがいる。それも、広範囲の魔力掌握が出来る相手だ。

灯りにする光や火ではなく風の魔力である事から考えて、攻撃を仕掛けるつもりだろう。

「……オイゲン」

私は入り口にいる何者かに聞こえないよう小声で話しかける。

しかし、私はこの男を買いかぶっていた。彼は何も考えずに「どうした？」とはっきり返事をする。

きっと、入り口の何者かにも聞こえているだろう。

空を仰いで嘆息するか海に向かって叫びたい衝動に駆られたけれど、生憎とどちらもこの場にはない。

そして、そんな暇もなかった。

私はオイゲンの声を聞くと同時に土魔法で岩の壁を生み出し、入り口を塞ぐ。

間髪を入れずに激しい衝突音が地下室に轟いた。

「な、なんだ！？」

「伏せて」

キョロキョロと部屋を見渡す間抜けなオイゲンの膝の裏に回し蹴りを入れて彼の体勢を崩す。

衝突音からしてかなりの質量と速度だ。即席の岩壁なんて何時まで保つか分からない。

予想は当たり、私が屈んだ直後に人の頭ほどもある石が魔法で作った壁を突き破る。

飛来した石にかすった鏡が落ちて砕ける音とオイゲンがあげる短い悲鳴。

私は衝撃を受け流せるように湾曲した分厚い岩の壁を自分の正面に生み出す。

反撃しようにも襲撃者が複数いた場合、周囲の魔力を飛ばす火魔

法は弾切れが怖くて使えない。
風の魔力を取られている時点で不利なのに、攻撃手段が限定されている。
強力な魔法は地下室が埋まる可能性もあって使えないので防御に回るしかなかった。

「出てきなさい！」

入り口に向かって叫ぶ。
襲撃者の数さえ分かれば対策を練りやすくなる。相手もそれが分かっているのか姿を見せない。
石を飛ばす攻撃も止んでいた。
こちらが痺れを切らして攻勢に転じるのを待つつもりだろう。

「オイゲン、長くなりそうだから寝てていいよ」
「……囮にするんだろ？」

こんな時だけ回転の早い頭だね。
襲撃者に増援が来ないとも限らない。騎士団だったら尚更だ。
急いで逃げる必要がある。
様々な案が頭に浮かんでは消えていく。数々の取捨選択を繰り返す。
やがて、とある案を採用した私は鏡の破片を集めるようオイゲンに指示した。

二十一話　襲撃者

オイゲンが集めた鏡の破片はまだ輝きを失っていなかった。
半分ほどを皮袋に詰めた私は残りの破片を粉になるまで砕くようオイゲンに命令する。

「目眩ましに使うんだろ？」

オイゲンが首をひねる。
わざわざ砕く意味が分からないと言いたげだ。

「つべこべ言わずにやりなさい」
「だがな」
「さっさとやれって言ってるの。使わない頭なら割って皿の代わりにするよ？」

目眩ましに使うなんて誰が言った。バカじゃないの。
目眩ましは一瞬で強烈な光を当ててこそ成立するもので、少しずつ光を強めるこの鏡では役不足だ。
仮に使うとしても相手に聞こえるように言ってどうするのか。
まぁ、オイゲンがそう言うのも計算済みだけど。
ぶつぶつと不平を並べながらオイゲンが鏡を砕く。
私は破片の一つを取って岩壁から入り口を写す。
緑色をした風の魔力が大量に漂っている通路に襲撃者の姿は見えない。魔力の粒子として見えるから風に変換していないのだろう。
私は腰の皮袋を手に取る。
鏡の光で確かめた中身は大量の黒い粉、結界の魔法陣を書き写すのに使った粉炭だ。

「まだ練習中だったのに」

やるしかないか。

「こんなもんだろ」

オイゲンが鏡を砕き終わった。

光を放つ粉となった破片たち、その全てを皮袋に入れる。

光源だった鏡が無くなったために地下室全体が暗闇に閉ざされる。

だいたいの準備は整った。

私は皮袋から炭を取り出して魔法で作った水の小人に混ぜる。

鏡の破片を取り出して照らすと一体の真っ黒な一寸法師が立っていた。

「名付けて殺し屋黒子、一寸法師バージョン」

一寸法師の昔話ってエグいところが好きなのよ。針でちまちま刺して苦しめるなんて発想からしてゾクゾクする。

だから真似しよう、蜘蛛型魔物の毒針で。

「ふふふ」

オイゲンの視線なんて気にしない。

毒針を持たせた黒子を二十体つくって入り口付近へと進める。

魔力レールは見えていても黒子自体は水になっているので見えていないはずだ。

それにしても黒い僕たちを操ってると悪の親玉みたいね。

魔王ではあるけど。

「おい」

オイゲンが私の肩を叩く。
「なんで鏡を粉にしたんだ？」
そんな事は決まってる。
「こうする為よ」
私は鏡の粉が入った皮袋をペットボトルに括り付ける。
この皮袋には小さな穴が幾つか開いている。激しく振れば中身をバラまくようになっている。
それを岩壁の陰から入り口に向けて固定。
「意味が分からん」
「あなたの頭ではね」
水筒に魔法で水を充填する。
限界を超えてもまだ入れる。魔法だからこそ出来る無茶だ。
普通は空気を送り込むんだけどね。
「偽ペットボトルロケット、発射します」
人に向けて打ち上げはいけません。
悪人は人ではないから知った事じゃない。
打ち上がった偽ペットボトルロケットは驚異的な速度で入り口に突入した。襲撃者は迎撃しようと魔法で風を生み出してはねのける。
穴の開いた皮袋から光の粉がばらまかれて襲撃者の姿を照らした。
その姿に一瞬、目を疑ったがすぐに岩壁から出て走り出す。
一拍遅れて石が飛んで来るけれど、私の目論見どおり慌てている

のか見当違いの方向へ飛んでいく。
迎撃に風を使っていたから反応も攻撃も遅れたのだ。
私の動かす殺し屋黒子たちが闇を駆け抜けて入り口へ殺到する。
黒子を動かすための魔力レールを悟らせないよう、破片のままの鏡を魔法で作った水に乗せて通路に打ち込み、空中で制止させる。
それらが即席の照明となり通路にいた襲撃者を浮かび上がらせた。
……やっぱり魔物か。
現れたのは翼の生えた猫の骨、毛や皮はおろか筋肉さえも見あたらない。光の反射から見て透明な膜に全体が覆われているようだ。
生々しい眼球がドロリと動いて私を見つめる。
沸き上がる生理的な嫌悪感を押さえつけ、土魔法で岩のナイフを生み出して斬りつける。
骨猫の背後に岩の壁を出現させ退路を絶つ。
心臓は見あたらないけど首をはねれば死ぬだろう。
岩のナイフが届く寸前、骨猫が突風を纏って私に体当たりしてきた。
とっさに体ごと右に倒れ込んでかわす。
あの骨猫、自棄になってる。衝突したらお互いに頭潰れてお陀仏だ。

「逃げて！」

骨猫が飛び込んだ先にいるオイゲンに叫ぶ。
黒子たちが骨猫に飛びかかるものの、風に弾かれて毒針が届かない。
耳障りな悲鳴をあげるオイゲンが骨猫から必死に逃げ回りつつ私へ向かってくる。
彼を追いかける骨猫は私の掌握範囲に近づいた所で追うのを止め、風魔法で石を飛ばしてくる。
岩の壁で辛うじて防ぐものの即席だから長くは保たない。

骨猫が私の手を先読みして土の魔力を集めているのも手痛い。

「やっぱり知性体か！」

獲物が地下室という逃げ場のない場所に入ったのを狙い、奇襲をかけて仕留めるやり口、オイゲンの声で躊躇わずに攻撃を仕掛けた事など、狡猾で状況の変化に強い奴だ。

爪の垢を煎じてオイゲンに飲ませてあげたいね。

「ひ、姫さん、俺はどうしたら？」

頭を手で庇ってビクついてる男に出来ることはないよ。邪魔にならないように死んだ振りしてろ。

いっそ死んだら？

手間が省けて骨猫は喜ぶし、損得に賢い奴だから満足して私を追う事もしないだろう。

……すごく良い案な気がしてきた。

「姫さん？」

「……逃げるよ」

見捨てたら性悪の神が何しでかすか分からないもの。

私は次々に岩の壁を出しては骨猫の足止めにしつつ地上を目指した。

二十二話　殺す条件

地下から神殿にたどり着いた私はまず結界が壊れていないかを確認した。

「姫さんが台に座ったりするから罰が当たったんだ！」

オイゲンが涙を浮かべて喚く。

罰ならとっくの昔に当たった後よ。むしろ今でも謂われのない罰を受けている。

好きこのんで聞かせる話でもないので黙っておいた。

「結界は作動してる。あの魔物は始めから対象に含まれてなかったのよ」

知性体が同種の魔物とは別枠の可能性もあるけど、今は無視する。

重要なのは大半の魔物が神殿に入れないという一点のみ。

きちんと説明したというのにオイゲンは神殿の出口へと走っていき、振り向きざま叫んだ。

「何してる。早く逃げるんだ！」

呆れた。パニックになっているらしい。

私は肩を竦めて冷静に返す。

「神殿の方が安全よ。結界が動いている以上、対象の魔物は入ってこれないからね」

問題は骨猫だ。あいつさえ倒せば安全になる。

もっとも、骨猫が攻めてくるかは分からない。
あれは知性体で迂闊な事をしない狡猾で用意周到な性格だ。失敗したのだから深追いはせずに次の獲物を待つか、何らかの対策を練ってから現れるだろう。
確かに気は抜けないけど不確定要素が少ない分、神殿は安全で備えもできる。
理路整然と説明する私にオイゲンも熱が冷めたのか落ち着きを取り戻した。

「姫さんの言うことも分かる。だが外なら魔物に出会わないかもしれないんだ。やはり逃げるべきだ」
「そんな賭には出られない。夜が明けるまでかなり時間があるから暗い外に出ると奇襲を受ける可能性があるし私の体調も悪い」

さっきまで緊張を高めて魔力制御に気を使って、挙げ句の果てに全力疾走した。
胸の中がぐらぐらして吐きそうなのよ。
一応は殿方の前だから明言はしない。私は奥ゆかしいのだ。
兎に角、下手に動きたくはない。
これ以上緊張の糸を張ったら切れてしまう。
森があるから魔物がいるのよ。焼き払ってしまえば、とか考え出すのは避けたい。実行しかねないくらいに私も自棄になっている。
オイゲンが私に近づいてくる。その顔は険しい。

「さっきの魔物が来たらどうするんだ？」

私の瞳を見据えてオイゲンが問いかける。

「殺すに決まってーー」

言いかけた私の耳元で乾いた音がした。一歩遅れてジワリと広がる痛み。
何が起きたのか分からず視界が揺れ、理由を探す。
地下への入り口は閉まったままだ。骨猫の仕業ではない。
なら、誰がやった？
痛む左頬を押さえる。

「オイゲン……？」

この男が殴ったの？
あまりにも不可思議で理由が想像すら出来ない。
オイゲンが大きく深呼吸する。私はそれを首を傾げて見ていた。

「魔物だって生きてる。俺たちが出ていけば殺さずに済むんだから逃げるべきだ」

オイゲンが一語一句を区切るようにしてはっきりと言う。
こいつは何をほざいてるの？
彼の手が伸びて私が頬に当てていた左手を取ろうとする。

「……汚い手で触るな！」

オイゲンの手を思い切り払いのけた。
博愛主義でも気取ってるの？
命を守るなんて格好いいって言われたいの？
はいはい、惚れちゃうね。格好いいよ。男前だよっ。
虫酸が走る……！

「生きてるから殺すなって？　それは全ての生き物がその考えを遵守している場合にだけ合致するのよ」

私の勢いにたじろぐオイゲンに詰め寄る。反射的にか、後退るオイゲンの胸ぐらを掴んで引き寄せ、渾身の力を込めて突き飛ばす。

「そいつが生きている事で死ぬより大きな損失があるなら、殺すべき」

言葉を尖らせて叩きつける。

死んだ方がいい奴なんてたくさんいる。今回は骨猫だっただけだ。

それに私は積極的に殺すつもりはない。向こうが襲ってきたらと言う前提がある。

私の放つ圧力に飲まれていたオイゲンはゴクリと唾を飲み、やがて口を開いた。

「理由をつけてるだけの殺し屋じゃないか」

「違う。殺し屋を殺す人よ」

「……なら、あの魔物より君に価値がある根拠は何だ」

「あなたを助けた。それとも、オイゲンは生きているだけで私の価値すら無にするゴミなの？」

再び一歩詰め寄る。オイゲンは下がらなかった。

そして、彼は私に問い返す。情けなく震えた声で。

「そうだと言ったら？」

決まってる。あなたの想像通りだよ。

「殺す」

オイゲンを囲むように火の魔力を集める。

彼は歯を何度も噛み合わせてガタガタ震えている。

「バイバイ、オイゲーー」

突如、私を激痛が襲った。

覚えがある。これは、

「……あの差別神！」

力が抜けて倒れ込む。集めた魔力が私の制御を離れて霧散した。

慌てた様子で駆け寄ってきたオイゲンを睨みつける。

体に力が入らない。入れ方も分からないほどの痛みを堪える。

私が何をした。人を気分一つで弄んで良いご身分だな。

あの骨猫はお咎め無しか？　オイゲンにも無しか？

また私だけ特別扱いとは感激だよ。

悲鳴なんかあげるものか。懇願なんかするものか。気絶なんかするものか。

絶対に……。

二十三話　仲違い

オイゲンが差し出したのは湯気の立つ椀だった。
いくつかの野草と干し肉が入っている。

「何それ。餌？」

侮蔑を込めた私の言葉でオイゲンが取り繕っていた笑顔が一瞬崩れたが、彼は再びぎこちない笑みを浮かべた。

「こう見えても朝飯さ」
「勝手に食べなよ」

差し出すな。見たくもない。
私はため息を吐いて空を見上げる。
痛みに倒れた私では知性体との戦闘をこなせるはずもなく、神殿をかなり離れたこの森まで逃げざるを得なくなった。
オイゲンが肩を貸そうとするのを振り切って風や水の魔力で移動した。無茶が祟って全身がダルい。
しかも神殿を出て魔物や熊に襲われてもオイゲンに殺すなと叫ばれ、逆らおうとすれば神の横やりが入る始末。
例外は自らの命を守るため仕方ない時だけらしい。逃げられるなら殺してはならないとオイゲンが言っていた。
逃げた事で状況が悪くなり、結果的に死ぬ可能性を彼らの貧相な頭では考えられないらしい。
巻き添えになるのは御免だ。何とかして逃げないと。

「姫さん、ちゃんと食わないと治るもんも直らないだろ」

誰のせいだと思ってるのよ。
オイゲンがしつこく食べさせようとしてくる。

「どうせ毒でも入ってるんでしょう」

彼が作った物を口にするなんて想像するだけで総毛立つ。

「そんなことあるわけないだろ」

そう言って彼は少し食べて見せた。
害がないと示したつもりか。

「どうだ。これで姫さんも安心だろ？」
「……椀の反対側に毒がある。指先に予め毒を塗っておき渡す際にその指を椀に突き入れる。遅効性の毒で解毒薬を持っているから躊躇わず飲める。特定の具材が毒または毒を混入した物でそれを食べなければ害はない。口の中に毒を中和する物を仕込んであった。椀と一緒に食べる事で効果がある毒物を後で渡す。私が食べるのに使う木匙に毒が塗ってある」

ぱっと考えつく限りの方法を並べ立てる。
オイゲンの顔が笑みのまま強張った。

「あなたは私を殴った。絶対に信用なんてしない」

一度でも暴力を振るった輩は平気で裏切る敵だ。協力関係は有り得ても、今その土壌はない。
オイゲンが私と行動を供にするのは森を一人で抜ける力がないからだ。
それにも関わらず、彼は私のやり方に文句をつけて足を引っ張っ

ている。
生死に直結している以上、明確な敵対行為と言えた。
「姫さんを叩いたのは悪かったと思ってる。すまなかった」
オイゲンはそう言って形だけの謝罪をする。
「中身のない謝罪なんかいらない。ただ音の羅列は耳障りなだけなの。無抵抗の相手をいきなり殴った事実は変わらない」
しかも理由が博愛主義とは皮肉がきいてる。
理想の実現は他者の迷惑にならないようにやれ。
「しかし、それは姫さんがーー」
「本音が出たね。言い訳するって事は殴った理由は正しかったと思っている証拠よ。私はあなたの理想が叶わないのを知ってるし、巻き込まれるのも納得いかない。しかもその理想を理由に殴られる謂われは全くない」
こいつは長い間ぬるま湯に浸かって頭がイカレてるのだろう。
治療法はない。死ねば治るそうだからこれ以上、他人に迷惑かけない内に死んでしまえ。
尚も食い下がろうとするオイゲンを魔力で威嚇して遠ざけ、私は少ない木の実を口にした。
油分が無く味の薄い食べ物でないと今は体が受けつけない。
「なぁ、姫さん」
おずおずと話しかけてくるオイゲンにウンザリしながら目を向ける。

「何？」
「神殿で俺のことを殺そうとしたが本気じゃないよな？」
「本気よ」
断言する。今でも心の大部分を占めているのは明確な殺意だ。
「命を理想のために使っていいのは持ち主だけだもの」
オイゲンが理想を貫いた結果で野垂れ死んだら褒め称えるだろうね。それは綺麗な生き方だから。
けれど、その理想に共感はしない。私の考えとは違うものだし尊敬も出来ない。
そんなゴミくずのために私の命は賭けられないし、賭けろと言われれば抵抗する。結果でオイゲンが死んでも彼の自己責任だ。
「姫さんは命の尊さってもんを知るべきだ」
オイゲンが下らないことを呟いていた。

二十四話　白い池

オイゲンが新しい目的地が近くにあると言い出した。

「護衛を頼まれてくれないか？」

私は喉まで上がってきた拒絶の言葉をなんとか飲み込む。
神が差別したのだから彼は神に愛されているのだろう。その頼みを断れば何をされるか想像に難くない。

「……分かった」
「本当か！？」

オイゲンが目を丸くする。
ダメもとで頼んだのか。どこまでも失礼な奴。
私の気が変わらない内に歩き出さないと目的地どころか終着点に向かうことになるよ。人生の、さ。

「な、なんだか寒気がするな」

私の前を歩くオイゲンが肩を震わせた。

ーーーーーーーーーーーーーーー

張り切って空回りする頭ポカポカ太陽が空高く昇りきった頃にオイゲンの言う目的地に着いた。
白い樹皮の広葉樹に囲まれた、水たまりのような浅く小さな池だ。

樹皮に触れると手が白く汚れた。どうやら白い粉状の物質が樹皮を覆っているらしい。
かぶれたりすると嫌なので水魔法で手を洗う。
地面に視線を落とすと暗緑色の草の合間に灰白色の土が見えた。
足の爪先で軽く払うと見慣れた茶色の土が顔を出したので、木から落ちた粉だろう。
地面に直接座るのはやめておいた方がよさそうだ。
池を覗くと此処にも白い物質が自己主張していた。飲み水にも出来ないとは役立たずな。

「この場所はある魔法がかかっているのさ。俺はそれが発動するのを待つつもりだ」

オイゲンが岩に腰を落ち着けた。
勿論、岩にも白い物質が付着していたけど気にしていないようだ。

「どんな魔法？」
「大したものではないさ。俺の自己満足を満たす程度が精一杯のつまらん魔法だよ」

答える気はない、か。
神殿で見たような魔法陣も鏡と同じ魔法具も見あたらない。
周囲を覆う白がこの世界に来る直前の白い空間を思い出させる。

「おい、また顔色が悪いぞ」

オイゲンが心配そうに言うのに私はさも具合が悪い風を装って弱々しく微笑んだ。
お前のせいだという当てつけだけど、きっと彼には分かるまい。
私は周囲を見渡してどんな魔法がかかっているのか想像する。

神殿の地下室はその造りと魔法の関係が理にかなっていた。
この場所も同じなら鍵になるのは、

「この粉かな」

白色であることか、粉であることか、樹皮に付いていることか。
どんな理由かは謎だけどその分、暇が潰せるだろう。魔法の勉強にもなる。

「魔法はいつ発動するの？」

時間によっても状況は変わるのだ。
もしかしたら、夜になると白い粉が光るのかもしれない。
私の問いにオイゲンは困ったように眉を寄せる。

「姫さん、立ち会うつもりか？」
「当たり前でしょう」

ここまで苦労させられたんだから、見なければ損だもの。
それに、神の件もある。
オイゲンの痛みとやらが未だに掴めていないので、離れる訳にはいかない。
ベリンダの時は街を出るしかなかったから森の中で一週間も激痛に耐える羽目になった。
あんな経験、二度としたくない。

「済まないが立ち去ってくれ」

……はい？
今、何か判決みたいのを聞いたのですけども。

「立ち去ってくれ」

オイゲンが私を見てもう一度、はっきりと言った。
また、森の中で激痛に苛まれて過ごす刑なの？
勘弁してよ……。
反論しようとしたら頭に一瞬だけ殴られたような痛みが走った。
神の仕業だ。
抵抗するだけ無駄なのか。
私は小石を思い切り蹴ってオイゲンの脚に当て、彼の悲鳴に背を向けた。
どいつもこいつも、痛みにのたうち回る私が見たくて仕方ないらしい。
目玉くり貫いてあいた空洞に塩を盛ってやろうか。
みんなドライアイになぁれ、みたいな。

「ばっかみたい」

空に叫んで、適当な木を力一杯に蹴る。
余計に痛かった。

二十五話　鏡に映るのは

オイゲンから離れすぎなければ痛みを与えられることもないだろうと高を括っていた。
結論から言って、全くそんなことはなかった。
全身を針で突き刺されている気分。
一切の遠慮仮借がない神の性悪で根性悪な差別を受けながら森を歩く。
耐えられるくらいの距離を模索していたらオイゲンの前に度々姿を現してしまい、不審な目を向けられた。

「そりゃあ、心配してくれるのは嬉しいさ。だが、邪魔だな」
「別に心配なんてしてない」

きびすを返した私はオイゲンが苦笑する気配を感じ取った。
あんな勘違いバカもう顔も見たくない。
そんな訳で距離を開けて痛みに堪えながら野宿する事になった。
群れて光る矮小な星を見上げて解決法を考える。
オイゲンの痛みとやらが原因なのは明白だけど、その痛み自体が分からない。
白い池にオイゲンが一人で居ることが関係しているとは思う。
そういえば魔法の鏡を使う時も私が居ることにオイゲンは乗り気ではないようだった。
鏡の破片を取り出して月に照らす。既に魔力切れで光が失われたそれは何の変哲もないガラスの破片。薄い金属板を中に挟んでいるのは鏡であった唯一の名残だ。
オイゲンはこれを使う際、苦労しながらも一人で光の魔力を集めていた。
……私の協力を拒んででも。

あの時、映し出された若い男にオイゲンが向けた表情の意味が気になる。
もう一度見てみれば意味が分かるかもしれない。

「試してみようか」

早速、私は光の魔力を集めた。
善は急げと言うもの、独善なら尚更だ。妨害が入る前に終わらせなくては。
あっという間に集まった光の魔力を鏡の破片に注ぎ込む。
破片でも発動するか不安ではあったけど、杞憂に終わった。

「ーーははっ。いい趣味してる」

無意識に唇が歪むほどに素晴らしい光景だね。
地下に隠されていたのも納得だよ。こんなものを他人に見せたいとは思わない。

「娯楽としては愉しめるけど」

こんな代物で笑えるのは私くらいだろうけどね。
森の木々をスクリーンにして現れた映像、それは騎士団やベリンダだった。
この鏡は使用者に恨みを抱く人間を映し出すのだろう。
もしくは殺意を向けた相手か。
それ以外に彼らとの繋がりがないのも笑える話。
暗い森で痛苦に喘ぎながら愉しむには最高の娯楽だ。
痛みも忘れて自らの敵を考えられる。

「次に会う日は殺し合いね」

何人を屠れるだろうか。けれど今はまだ無理。
逃げて、力をつけて、必ず殺す。
そのためにもオイゲン如きに足止めを喰ってたまるか。

「あの若い男はオイゲンを恨んでる」

オイゲンは命を奪うのを嫌悪していたから返り討ちにする事も出来ず逃げ回っているのだろう。
若い男とオイゲンの関係は理解できた。
鏡を使ったのは恨みを向けられているかの確認と、

「居場所の確認、か」

あの若い男は森にいた。旅をしているようでもあったからオイゲンの命を狙っての旅だろう。
どんな事情か知らないけど、それがオイゲンの痛みだとしたら。
そういえば息子に恨まれているだろうと言っていた。

「若い男がオイゲンの息子？」

今ある情報では決定打に欠ける。
彼の痛みそのものが不明では解決なんてできない。
私はオイゲンとのやり取りを詳細に思い出す。
息子に恨まれていて信心深く、生き物を殺せない甘ちゃんで情けなくて頭の足りない男。
いらない情報が多過ぎよ。
熱に浮かされていたとはいえ、油断しすぎだ私。
観察が甘くて思考をなぞることも出来ない。
敵に回ったらどうする気だったのか。

頭を振って思考を整える。無駄に積み上げた思考がガラガラと雪崩て意識の底に埋没した。
最優先で集めるべき情報は白い池について。
私がいなければオイゲンが森を抜けるのは無理だ。余りに弱すぎる。それでも私を遠ざけるのには理由があるはずだ。

「あの池で死ぬ気なのかな」

本人がこの場にいないので答えは返ってこないーーはずだった。

「そうなんじゃねぇの？」

突然、前方から欠けられた声に私は硬直する。
接近に気付かなかった……！
掌握していた魔力に変動がなかったから相手は範囲の外か。

「ちょいとお邪魔すんぜ」

臨戦態勢をとった私の前にそう言って現れたのは、神殿で襲ってきた骨猫だった。
警戒する私の前で無防備にくつろぎ始めた骨猫は不気味に笑う。

「お困りなら手を貸しますぜ、お姫様」

二十六話　骨猫の証言

「何を企んでるの？」

いきなり協力を申し出た骨猫に問いかける。

悪趣味に改造されたスフィンクスよろしく地面に腹ばいになった骨猫はクキャキャと妙な笑い声を上げた。

「疑われるたぁ、悲しいなぁ。好意ってのは素直に受け入れるもんだぜ？」

「好意というのはお金と一緒なのよ。買いたい物があるから押しつけてでも払うの」

「金と一緒、か」

私の切り返しを興味深そうに反芻する骨猫。

「人間らしい台詞だな。それも質が悪いタイプの人間だ」

それは誰を評しての言葉なのかな？

魔物のくせに。鏡を向けてあげようか。

「企みって程のもんじゃねぇよ。端的に言ってお前に興味があんだ。人間じゃない、魔物でもなさそうだ。お前は何者だ？」

骨猫の尻尾がユラユラと左右に振れている。

魔力を集めている素振りはないし、何か武器があるようにも見えない。

どうやら、本当に話をしたいだけらしい。

警戒は解かずに距離を調整して戦闘に備えつつ、私は骨猫の問い

に答える。

「世間様が言うところの魔王、らしいよ」

自嘲的な雰囲気の混じる私の自己紹介に骨猫がしばしの間呆けた。
そして、徐々にその口が開かれたと思うと耳障りな笑い声をあがった。

「なんだそりゃ、地下室じゃ殺しちまうとこだったんだぜ？　俺なんかにやられる魔王ってのはショボ過ぎんだろ？」

私に訊かれたって知らないよ。
どうせ、私が魔王でないと困る連中がいるのだろう。
騎士団とかベリンダそれに神。
みんなが私を思ってくれるなんて小躍りしちゃうね。

「自分でも理解できないよ。けど、今の私は世間様々が言うところの魔王なの」

そりゃあ、一方的に与えられたアイデンティティだけどね。
骨猫が面白がるように私を見ている。
それに対して愛想笑いを向けて私は口を開く。

「私もいくつか訊きたいことがあるの」
「教えねえよ」

このグロテスク猫もどき……！
聞くだけ聞いて、やっぱりとんずらする気か！！
身を翻した骨猫の逃げ道を土魔法で塞ぐ。

「クキャキャ。反応早いな。予想してたろ？」

骨猫が笑いを含んだ声で言う。

動揺していない所から見て、私が予想している事もお見通しだったのだろう。

「もう一度、言うね。いくつか訊きたいことがあるの」

「答えねえって言ってんだろ」

骨猫が憎たらしい笑みを返してくる。私は滅多に見せない最高の愛想笑いで迎え撃った。

そのまま睨み合いを続けると、骨猫が堪えきれないといった風に吹き出し豪快に笑いだした。

乙女の笑顔を嘲笑うとは失礼な。

「魔物に笑いかけるなんざ魔王らしいじゃねえか。……嘘吐いてもよけりゃあ答えてやるよ」

妥協点としては相応か。

あまりしつこくすると骨猫がへそを曲げるだろうから。

「この近くにある池にかかってる魔法について知りたい」

白い池の方向を指さす。

骨猫は再び地面に寝ころんで、そんな事か、と呟いた。

透明な膜に覆われた尻尾の骨が器用に池の方に曲がった。

「あの池の魔法を知った時は初めて人間が怖くなったな」

夜空を見上げた猫が懐かしむように言う。

感想はいらないから情報を寄越せ。
睨む私を焦らすつもりなのか、骨猫が鏡の破片と映し出されている騎士団に視線を移す。

「これ地下室の鏡だろ？　随分と大勢から殺意を向けられたもんだな」
「魔王の特権らしくてね」

苦笑すると「ご愁傷様」なんて不快な笑い混じりに返された。
それにしても、鏡に映るのは使用者に殺意を抱く者か。これは嘘ではなさそうだ。

「池の魔法は面白いぜ。鏡と対になってんだ。お、今のは美人だな」

骨猫が映像のベリンダと並んでいる、大鎌を持った女に野卑な歓声を上げる。
あんな目立つ女、騎士団にいただろうか……。
映像を見る限りベリンダと仲が良いみたいだけど。

「それで？」

大鎌の女から強面の騎士に映像が切り替わったのを見計らって、骨猫に話の先を促す。
というか、この骨猫は何で人間の女に色めき立った男みたいな視線を向けてるのよ。
骨猫が映像に興味を無くして私に向き直る。

「池の水面はその鏡と同じ働きをする。映すのは」

そこで骨猫は言葉を区切り、クキャキャと不協和音を響かせる。

「……映すのは？」
「説明は終わりだ。あばよ、お姫様」
そこで止めるのか。
食い下がったとしても、そんな私を笑い物にするだけだろう。
「最後まで説明をありがとう」
皮肉を込めた感謝を口にして見送る。
骨猫はクキャキャと笑いながら森の中へと消えていく。
「そうだ。ヒントをやるよ」
説明会はお開きだと思っていた私は唐突に振り返った骨猫に怪訝な視線を向ける。
そんな私の気を引くように十分な間を挟んだ後、骨猫はお気に入りの宝物を自慢する口調で言った。
「あの池は処刑場なんだよ」

二十七話　白い粉

「処刑場……。」

骨猫が去った森の奥を見つめながら私はヒントを繰り返した。
鏡と対になる魔法がかかっている魔法の池は処刑場の跡地。
対になる魔法というくらいだから、使用者が殺意を向ける相手が映るのだろうか。
何のために？

「執行人の選別、とか」

自問自答するけれど、納得がいかなかった。
オイゲンが池の魔法の発動を待つ意味が分からない。

「あの怠け神が出てきて教えてくれれば苦労もないのに」

人に何かをさせたいなら頭を下げて頼みなさいよ。
最低限の礼儀や説明もないなんて、職務怠慢もいいところだ。
まったく、あのヘリウム頭の神様め。頭が軽すぎて下げる事すら出来ないの？　だから天上にプカプカ浮かぶ羽目になるんだよ。
盛大にため息を吐いて、木の根本に腰を下ろす。

「鏡と対になる魔法ね」

いくつか思いつくけど、あり得そうなものとなると限られる。
池の周りの白い粉と関係する魔法となると更に分からない。

「……あれ？」

考えてみれば白い粉が魔法に必要だ、なんて思いこみ以外の何物でもない。
処刑場にありそうな白い物。
……いやいや、まさか。
明日にでも白い粉を観察しよう。
予定を決めながらも、頭の片隅にある想像が浮上してきて嫌な気分になった。
想像が当たっていたら、流石に触りたくないな。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「姫さん、まだいたのか」
「まだ発動してなかったんだ」

横目で睨んでくるオイゲンを軽くあしらって白い樹皮を観察する。
昨日、私が触って粉を落とした木だ。白い粉は一切浮かんでいない。
仮説が一つ立証された。
この木に白い粉を分泌する能力は恐らくない。
当初は樹液の類だと思っていたこれは地面から風などで巻き上げられて付いたのだろう。
樹皮をよく見ると毛羽立っていて粉を簡単に絡めとる。
とすれば、白い粉の正体が気になるところだけど。
オイゲンに向き直って声をかける。
あらら、迷惑そうな顔を作っちゃって……。
とても観れたものじゃない下手な演技。
これから、本当に迷惑な事するつもりだから先取り対応かな。

私は無邪気で無垢な女の子を装って口を開く。
我ながらギャップが酷い。

「神殿の地下室にあった鏡の魔法、あれ具体的には何なの？」

何も知らない風を装って問いかける。
オイゲンは迷惑そうな顔を崩さない。私は彼の顔を正面から見つめる。

「離れた知り合いの今が映る鏡だ」
「どんな知り合い？」

本人から直接きいてしまえば頭を捻らなくてもいいでしょ作戦、始動。
だって、オイゲンと若い男の関係なんて当人に聞くしかないもの。
オイゲンが一瞬だけ迷う素振りを見せた。

「……映るのは親しい相手だ」

やっぱり、嘘を吐くのね。

「オイゲン。人間ってね、嘘を吐くと鼻が膨らむのよ。知ってた？」

呆れましたと全身で表現し、オイゲンを馬鹿にするように見る。
彼の目は一瞬、自らの鼻の頭を見つめたと思うとすぐ池へと逸らされた。続いて彼は詰まっているわけでもない鼻で大きく深呼吸を一回。
なんとも分かりやすい。こんな単純な鎌掛けに動揺しすぎよ。

「あの若い男ってオイゲンの息子？」

彼が落ち着きを取り戻す前に決着をつけたいので、単刀直入に訊ねる。

オイゲンが沈黙した。

「なんだ、息子じゃないのね」

軽く見開かれた彼の目に驚きが透けている。

黙秘するならポーカーフェイスを貫かなきゃ意味ないよ。

この調子で情報収集を続けよう。嫌がらせも兼ねて。

神もこれが必要な手順だと分かっているらしく、痛みはない。

「どうせ、鏡の魔法は使用者に殺意を向けている相手を映すもので、あの若い男はオイゲンと親しかった人の息子ってところでしょう？」

鏡については確認済み、若い男はオイゲンと年代が違うので友人の息子と当たりを付けた。

彼が拳を握り込んでいるのが見える。少し妙だ。動揺を抑える仕草じゃない。

あれは怒りとか悔しさとか、外に向かいがちな感情を閉じこめる仕草に思える。

図星を指されて苛立つほど隠したい事だったのか。

それにしても息子じゃないなら後腐れ無く殺してしまえばいいのに。どこまで甘ちゃんなんだろ。

「この白い粉って骨みたいだよね？」

地面をつま先で軽く蹴る。

オイゲンの表情を見て確信した。

「骨、なんだね……？」

オイゲンが渋々うなづいた。

「姫さんの言うとおり、全部この場所で亡くなった人の骨だ。手荒に扱うな」

オイゲンが声を低くして言った。

……ここを作った人は悪趣味だね。私でも引くよ。

処刑した人間の骨を砕き絨毯のように敷き詰める。死んで尚、罪人に踏まれる罰を受け続けるように。ここはそういう場所なのだ。

発想をなぞれる私もきっと歪んでいる。

さて、彼はこんな場所で何をするつもりか。

「この池の魔法って、何？」

正直なところ知りたくもない。でも、知らないと解決しない。

「聞いたら、もう構わないでくれるか？」

「発動するのを見たかったけど時間がかかりそうだから、この際それでいいよ」

嘘は潤滑油だね。

オイゲンは頭の後ろを掻きながら言った。

「この場所で死んだ人間を悼む者が映るのさ」

「悼む者？」

殺意とか関係ないの？

骨猫が怖いとまで言った魔法。むしろ死者の心の救済にもなりそ

うなのに、処刑場だったのと矛盾さえ感じる。
意外に思った私はオイゲンが続けた言葉に息を飲んだ。

「ここは元処刑場でな、罪人の死を悼む者も処刑されたんだ」

……心の救済が目的じゃない。逆に突き落とすための魔法。
池に映れば家族や友人まで処刑される。しかし、映らないのは悼む気持ちがないのと同じ。
えげつないやり方。

「オイゲンはここで殺されるつもり？」

発動条件は人の死。ならば、ここでこの男が自殺か他殺かで死ぬしかない。
一晩が経っても生きているのはつまり、自殺しなかったという事。
オイゲンは「察しが良いな」と苦笑いしながら、私に向けて手を振った。

「じゃあな。止めないでくれよ」

二十八話　若い男

オイゲンに半ば追い出される形で池を後にした私は頭を抱えた。

「どうしろって言うのよ」

オイゲンはあの池で殺される事で目的を達するつもりだ。
天涯孤独と偽り、オイゲンを殺した者が仇討ちを恐れなくて済むように、あの池を死に場所に定めたのだろう。
そのために息子が自らを恨むようにし向けた節もある。
ぶっとんだ博愛主義だね。空の彼方まで飛んでいきそうだ。
既に空の彼方でとんでいる神の目的も分かった。
オイゲンが殺されないようにする事。そして、二度とこの事態を生まないようにする事。

「あぁ、もう！」

なんで私がこんな仕事を押し付けられてるのよ。
この状況をみすみす作った全知全能なる神様々の責任でしょうが。
それでも文句を聞いてくれるはずもない。
急いで対処に取りかからないとオイゲンが白い粉になってしまう。

「また、貧乏くじを引くしかないね」

魔王らしく振る舞うのが唯一の手か。
私の説得も無駄だったし。
鬱屈した気分で私は魔王の立場を使った説得を考えた。

ーーー

悲劇を気取ってるこの舞台を喜劇にしてあげるよ。
雲の上で笑い死ね、怠け神。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

森に人影を見つけた。
神殿の地下でみた若い男だ。

「子供が一人で何してる？」

私と目が合った若い男が不思議そうにしている。
近くでみるとそれなりに整った顔だ。青い目が違和感なくとけ込んでいる。

「オイゲンの居場所を知ってるの。案内するよ」

サラリと言った私にすぐさま剣を抜く若い男に背を向けて、白い池へと歩く。
肩越しに振り返ると若い男は疑心に駆られた視線を私に注ぎながらも付いて来た。
役者は揃えた。
後は手の上で転がすだけだ。
若い男の死角で薄く笑う私に怯えた木々がざわめいた。

「君はオイゲンとどんな関係だ？」

少しでも私から情報を引き出したいのだろう。若い男が訊いてくる。

「知り合い、今は他人」

容量を得ない私の返事に若い男は困った顔をする。

「あなたの名前は？」

今後、私が偽名を名乗る際の参考資料を提供しなさい。

「ハンネスだ。君は？」

「オイゲンを殺すなら即死は避けて苦しめなさい」

ハンネスの質問を完全に無視して釘を差す。

「せっかくの見せ物がすぐに終わったらつまらないからね」

魔王らしい理由を付け加えるとハンネスは眉根を寄せた。

本当の理由は私の出番がないと困るからだ。

「ハンネスの邪魔はしないよ。だから頑張ってね」

含み笑いを隠さずに応援する。

ハンネスが足を止めたのに合わせて私も立ち止まる。

「僕を罠にはめる気かい？」

背後に目をやると剣を構えたハンネスが周りを窺っていた。

「応援してるのに」

「黙れ。人殺しを応援する奴なんているか」

あなた、オイゲンを殺しに来たくせにそれを言いますか。

「オイゲンを殺す理由って何？」

「ベラベラ喋ることではない」

「仇討ち？」

喋らないなら喋らせるだけよ。

……こいつ、表情が変わらない。

失策だったか。

ハンネスは周囲の安全を確認し終えて私に集中し始めた。

「答えろ。オイゲンは何処だ？」

いたずら心が芽生えた私は無言で空を指さした。

ハンネスが初めて動揺した。すぐに立ち直った彼がゆっくりと口を開く。

「殺したのか？」

「ははっ。やーい、引っかかった」

うん。憎まれキャラが一番性に合ってる。

ハンネスのこめかみがピクリと動いた。

「あらら、怒った？　オイゲンを殺す理由を教えてくれたら、居場所を教えるよ」

「信用できるか。自分で探す」

ハンネスが剣を向けたまま後退る。

ずいぶんと警戒されているみたいだ。

彼が慎重に開けた数歩の距離を私は三歩で詰める。

「せっかくの舞台なのにストーリーが分からないと面白くないのよ」

「貴様の娯楽の為にオイゲンを殺すわけではない！」

ハンネスが叫ぶ。

「ならどうして殺すの？」

「しつこい奴だな」

「下らない事をする理由を聞きたいだけよ」

ハンネスのこめかみが再び動いた。

下らない事呼ばわりが気に障ったのだろう。

「まぁいいや。オイゲンはこの奥にある魔法の池にいるよ。仇討ちには良い場所だね」

「……付いて来るなよ」

ハンネスは私を横目で睨んでオイゲンの元へ向かった。

盛り上がっちゃって、ハードボイルドでも目指してるの？

見ているこっちが恥ずかしいね。

「今のうちに発声練習でもしておこうかな」

この劇は魔王の台詞が多いから。

私は場違いな明るい歌を口ずさみながら持ち場に移動した。

二十八話　若い男（後書き）

次の更新は１０月４日になります。

二十九話　理由

ハンネスが池に着く前に先回り出来た。
歌いながら登場した私にオイゲンが困惑する。
私は適当な木に登って枝に腰掛け、オイゲンに告げる。

「ハンネスが来たよ」

オイゲンは弾かれたように周囲に目を凝らした。

「まだ着いてないけどね。罠を警戒しながら進んでるはずだからもう少し待たされると思う」
「姫さん、なんで邪魔するんだ」

オイゲンが泣きそうな顔で私を見上げる。
池の魔法は私の存在に関わらずにオイゲンの死が引き金となって発動する。
だから、私が木の上に観客席を作っていても彼の計画を妨げはしないのだ。
それでも私が邪魔だと彼は言う。

「生き物を殺すなと言ったオイゲンが殺されるために綿密な計画を立てている矛盾、それが行き着く先に興味があるからよ」

薄く笑んで誠実に理由を答えた私にオイゲンが頭を横に振る。
どれだけ否定しようと矛盾しているの。私に殺すなと言いながら殺される計画を立て、私に命の尊さを語る一方で自らを死地に追いやる。挙げ句に私を遠ざけて矛盾を悟らせまいとした。
オイゲンは自分の命を不必要に軽く扱っている。

「ねぇ、オイゲンが追われているのはハンネスの父親を殺したから？」
「違う」
表情を悟らせないためか、俯いたオイゲンが短い答えを返した。
「それなら、結果的に殺したからだね」
自分の命に価値を見いだせないのは、その人の価値観に反した出来事があったからだろう。
価値観に対する無力感、成すことが出来ずに泡と消える努力の結晶、それがオイゲンの命だ。
果たして彼は沈黙した。
「……どうしようもなかったんだ」
ポツリとオイゲンが呟いた。
ゆっくりと私に向き直った彼は逡巡し、再び黙した。
「最後まで話しなよ。笑い飛ばしてあげるから」
私の言い様に苦い顔をしたオイゲンが口を開く。
「俺達の住む町に魔物の群れが襲ってきたんだ。常なら警備隊が始末していたんだが、その時は魔物の巣を潰すために出払っていた。残っていた警備隊がなんとか抵抗している間に逃げる必要があった」
その日を思い出したのか、オイゲンは身を震わせた。
ベリンダのいた街といい、魔物の群れが人の住処を飲み込むのは

よくあることなのか。
因みに魔物の数は五百匹だと言う。
それに勝つのは無理だ。遠征中の人達がいても結果は変わらないと思う。

「俺は薬師でさ。その日、足を悪くしたハンネスの親父に薬を飲ませに行った」

そこで魔物の襲撃に見舞われた、と。

「ハンネスの親父を抱えて逃げるのは無理だった。だから、俺はあいつを見捨てて逃げちまったんだ」

沈痛な面持ちでオイゲンが告白するのを聞いて、私は一つの疑問が浮かんだ。

「オイゲンの家族が生きているのをハンネスは知らないの？」
「あぁ。ハンネスは町の住人と逃げたが、俺の妻とは方角が違った。町に戻る訳にも行かないからその後は皆、親類を頼ってバラバラになったから知らないはずだ」

調べようと思えば簡単に分かりそう、と言いかけて気づく。

「調べようと思わせないためにこの池で死ぬのね」
「そうだ。あの日、俺が逃げた先にはハンネスがいた。詰られたよ。患者を見捨てて逃げたわけだからさ」

もとより情けない男だと思っていたから、私の抱くオイゲンへの評価は変わらない。
けれど、ハンネスは父親を見捨てられた事を恨み、復讐の旅まで

している。
それほど大事なら自分で助けに行けばよかったのに。

「ハンネス、あなたのそれって逆恨みよ」

唐突に私が森に視線を逸らし声をかけたことで、オイゲンもハンネスに気付いた。

「い、何時から？」

オイゲンが上擦った声を上げる。
到着したのはついさっきだからオイゲンとの会話は聞かれていないだろう。
森はさぞ風が強かっただろうから。
私は操っていた風の魔力を手元に戻してハンネスを煽る。

「事情は聞いたよ。さっさとオイゲンを殺しちゃえ」

さて、歪んで崩れた楽しい人生の終幕をオイゲンは飾る事が出来るでしょうか。
私が関わった時点で不可能だけど。
個人的にはこの観客席で見物していたいのに、生憎と私も演者らしいから。
特等席から観覧する私に構わず、ハンネスがオイゲンに剣を向けていた。

三十話　主役強奪

オイゲンがナイフを抜いた。
疑われない程度に抵抗するつもりだろう。
対するハンネスが持つのは腕くらいの長さの実用的な西洋剣。
すぐに決着が付いてしまいそう。
足をぶらつかせながら観戦する私を二人は気にしているけど、互いに相手の動きを警戒しているために私が居ることに異を唱えられない。
ジリジリとハンネスが距離を縮め、一拍の気合いと共に剣を横に薙ぐ。
オイゲンが辛うじて跳び退いて避けるもハンネスの追撃が首を狙う。
その即死の一撃は私の土魔法が防いだ。

「くっ」

全力で振った剣が岩の壁に当たりハンネスが苦悶の声を上げる。
衝撃で腕が痺れたのか、牽制に振った剣も遅い。

「言ったでしょ。即死はダメだって。首なんて跳ねたら血が勿体無いじゃない」
「邪魔をするな！」

人差し指を立てて指摘する私を忌々しそうに一睨みしたハンネスが声を張り上げる。
オイゲンも私を睨んでいたがやがてその視線に疑念が混ざり始めた。

「先に邪魔したのはハンネスなんだけど、まぁいいや。続けなさいよ」

オイゲンが死にそうになれば必ず妨害するけどね。
ハンネスは私が操る魔力に注意しながら戦い始めた。
それでいい。決着しないまま双方が疲れ果てた時、私の独壇場になるのだから。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「邪魔をするなと言っているだろう。叩き切られたいのか！？」

度重なる妨害に嫌気が差したらしいハンネスが怒鳴る。
私は肩をすくめて呆れた風に見せた。

「あらら。父の仇を討ちに来たのに関係ない女の子まで血祭りにするのならただの殺人者ね」

樹上から落ち着き払って言い返すと木を切り倒しかねない勢いでハンネスが罵声を浴びせてくる。

「うるさいよ。血を流さない殺し方なら文句はないの。例えば首を絞めるとか」
「……血なんて何に使うんだ？」

私に問い掛けたのはオイゲンだ。
その顔は何かの予想を否定したいと願っている。

「決まってるでしょ。結界を描くのよ」

さらりとした私の返答に困惑したのはハンネスだけだった。

「人が入れない結界なんて描けないだろう。そもそも意味がない」

「描けるよ。私は人じゃないから」

人でなしだから、と冗談は言わない。

代わりに続けるのは自己紹介を兼ねたなぞなぞ。

「黒髪黒目で騎士団に追われるモノってなぁんだ?」

困惑して私の顔を見つめた二人の顔が徐々に青ざめていくのは見物だった。

「さっきオイゲンの話を聞いて思ったのよ」

彼らと私を囲むように岩の壁が乱立する。無論、私の仕業だ。

「オイゲンはハンネスから逃げ回ってこの池に着いた、ハンネスは復讐の旅で人生を浪費した。二人共まともに友人も作ってない。死んでも、血を抜かれても、誰も気にしない」

彼らが顔を見合わせる。

混乱しているハンネスの剣先がオイゲンと私の間を行き来する。

哀れなその姿に大いに嗜虐心をそそられた。

「ハンネス、復讐するのって楽しい?」

呼びかけられたハンネスの肩が跳ねる。

「私は楽しくなかったよ。可能なら復讐するより無視を貫きたかったね。そんな私からすればあなたの復讐はみっともないのよ。あなたの場合、復讐にこだわる理由って完全に自分のためでしょ」

ハンネスは父親の安否を確認せずに町から逃げた自分を悪者にしたくないだけだ。

オイゲンにすべての責任を押しつけて、仇討ちの形を取って自分を正当化する。

そんなみっともない仇討ちでオイゲンが命を落としたら、あの世で父親がオイゲンに土下座するね。

「ハンネスの復讐ってオイゲンの息子の恨みを買ってまですることかな？」

息子という単語に男達が反応する。

互いに不味いと言いたげな顔だ。

当然だろう。

既にハンネスの復讐に大義はない。自分勝手な理由で人を殺せば殺人者だ。

オイゲンが人に危害を加える残虐性を持っているのなら兎も角、この男は真逆の性格をしている。

彼に息子がいると分かれば殺した瞬間、復讐に怯える悪役の完成。

ハンネスが復讐できる理由は潰した。それでもがむしゃらにオイゲンの命を奪えるくらいに屑だったとしても、がむしゃらになる理由がない。

目の前に怒りをぶつけて良い相手、父親の命を奪った魔物を統べる者、本質的な仇がいるのだから。

切りかかるなら魔王でしょう？

ハンネスが歯を食いしばって一度だけオイゲンを睨み、私へと向

き直った。
まずは一匹。とはいえ、まだ髭面の一匹が残ってるのよね。
「ハンネス君こわぁい！」
ぶりっ子ポーズでもじもじしてみる。
池の水面に映る私の姿に辟易したのですぐに止めた。
「私、オイゲンも嫌いなのよ。息子に嫌われるように生きて、復讐が連鎖しないように計画立てて死ぬ。息子が一方的に不利益を被ってる。そんな自分勝手さが嫌い」
「連鎖しないようにって……オイゲン、本当か？」
ハンネスが私に踊らされている。
彼としては聞かないわけにいかないだろう。
彼の事まで心配するほど、仇が予想以上のお人好しだったのだから。
自分勝手な復讐者さんはさぞかし惨めな気分だろうね。
オイゲンがハンネスから目を逸らす。やり場のない怒りをぶつける先はやはり、私だ。
計画を最後の最後で粉微塵にされ、人生を狂わした魔物を操る、云わば人生の仇。
「姫さん、いや魔王。なんでこんな説教してんだ？」
結界の材料を採取する目的からして、私は復讐劇が終わってから生き残った者を殺して血を取ればいい。
なら何故、この段階で言うのかと疑問に思ったのだろう。
「貴重な材料だから一滴も無駄にしない為よ」

私は枝から飛び降り、ふわりと地面に着地する。
なるべく威圧的かつ不気味に見せるべく魔力を纏いながら、手を後ろに組んで私は言う。

「絞め殺してあげる」

三十一話　殺陣

ハンネスがオイゲンに共闘を持ちかけている。
それを聞きながら、私は笑顔を作るのに必死だった。
体中が炎に包まれたように熱いのだ。
神の目的に限りなく近いはずなのに、何が不満なのか。
いやな汗が顎を伝う。
焼け付くような痛みに意識を持っていかれそうになる。この精神状態でまともに戦えるのか。感覚が麻痺した四肢が心許ない。
オイゲンはさして驚異ではないものの、問題はハンネスだ。
オイゲンとの戦いで彼の剣は急所を鋭く狙っていた。落ち着いていれば対処できるけれど、今の状態でそれが可能かどうか……。

「魔王なんて嘘だろ？」

馬鹿オイゲン、まだ言ってるのか。
まぁいいや。殺さない程度に痛みつけてー

「アホらしい」

思考をはき捨てる。
何が殺さない程度に、だ。神に飼い慣らされている。
ベリンダの時とは違って実力的にはこちらが上だ。
それに、仮説を考えついた。
今の私の思考を神は読めないのではないか？
白い空間を除いて私が致命的な行動をするまで妨害は入らず、何時だって私の発言や行動の後に痛みが襲ってきた。
事実、私が殺意を持っても焼け付く痛みは強くならない。
幸い、痛みを我慢するのには慣れている。

演技している振りをして、神を騙せば人を殺す機会もあるだろう。
オイゲンを殺せば神は私を許すまい。それで自由になれる。
二十個の水球を同時に生み出す。どれも人の頭くらいの大きさだ。
溺れ死ぬには十分な量。

「彼女は本気だ。オイゲン、戦わないなら見捨てる！」

ハンネスが最後とばかりに叱咤して、私に向かって走り出す。
速い。力強い動きは数日前の狼たちを思わせる。
彼らを同時に殺さないといけない。
ハンネスに集中していてはオイゲンを逃がしてしまう。
目前まで来たハンネスは腰だめに構えた剣で突きを放ってくる。
それを水球で受け速度を落としながら、水にうねりを加えて絡める。
剣を奪えればこちらのものだ。さっさと離せ。
だめ押しにハンネスの胸を蹴り飛ばそうとすると、彼は体を捻り、その勢いを利用して剣を横に振り抜いた。
すぐさま土魔法で防ぐ。彼は追い打ちをかけずに一歩引いて正眼に構え、私のお腹を狙ってくる。

「終わりだ！」

片足をあげた不安定な私には避けられないと見てハンネスが叫ぶ。

「せっかち、ね！」

勝手に終わらすな。
上げていた片足を曲げて引き戻しつつ、もう片足を跳ね上げる。
お尻が地面に落ちる軽い音と衝撃、頭上を過ぎ去る剣を巻く風を感じた。

追撃に振りおろされる剣を無視してハンネスに水球を打ちつける。

「ぐっ……！」

足に力を込めて堪える彼のふくらはぎに蹴りを入れて倒し、入れ替わりに立ち上がる。

「くそっ」

「はい、まずは一匹」

ハンネスを土魔法で地面に押さえつけオイゲンに視線を移す。

震えながらナイフを両手で持つ髭の男はお世辞にも強いと言えないから、実質的に私の勝ちだ。

こいつらを殺せば私は解放される。

……けれど、それは二人の犠牲の下に成り立つものだ。私の為だけに殺していいのか？

無様に転がるハンネスじゃあるまいし、自分の為だけに殺すのを私は許せるか？

許せるならハンネスにお説教なんてしていない。

「ねぇ、オイゲン。一つ質問を良いかな？」

断られてもするけどね。

「まだ、私を殺さないで事態を納めるつもりだったりするの？」

「も、勿論だ」

ちっ。

この甘ちゃんが、青汁で練ってあげようか？　苦味ばしった良い男になるかもよ。

この頭が軽い髭面を殺せる理由が無くなってしまった。

「やっぱり、あんたは嫌い」

ハンネスの手を踏みつけ、彼がしつこく握ったままだった剣を取り上げる。

「俺の剣を返せ」

威勢だけご立派なハンネスの顔を足場にしてオイゲンを見る。
自分の体を利用してオイゲンの死角を作り、皮袋から粉炭を取り出した。小さな水球に混ぜてハンネスの目隠しに利用する。

「どっちから始めてもいいんだけど、ハンネスも仇が血祭りにされるところが見たいでしょうから先にあんたを殺すよ」

本当は無期限延期だけど。
こいつらを殺して自由になっても自分に誇りを持てないなら死んだ方がましだ。
私には少し重たい剣を風の魔法で支える。
オイゲンは私がした事に気づいていない。早めに終わらせてしまおう。
持ち慣れない剣を腰の横に下げ持ち、オイゲンに迫る。

「ばいばい、オイゲン」

数日前に口にした決別の言葉を紡ぎながら逆袈裟に剣を振る。
オイゲンがたたらを踏んで後ろに下がった。

「逃げるな！」

手元が狂って殺しちゃうかもしれないでしょ。
言い返す余裕もない様子で後ろに下がり続ける彼の後ろに岩壁を生み出す。
背中に触れた感触に驚いたオイゲンが振り返り、青ざめた。

「じゃあね」

私が大げさに振りかぶるのを見て、オイゲンが祈るようにナイフを捧げ持つ。
ここまで追い込んでも彼の目に闘志はない。しまいには瞑る始末だ。
情けない男……。
ナイフを持つその手を魔法の風で押し、無理やり突き出させる。
事故を装って私の肩をえぐったナイフの感触にオイゲンが目を開く。

「くっ！」

肩を押さえて跳び退く。
最初からオイゲン達が逃げるか、私が怪我をする以外にこの戦闘を終わらせる方法がなかった。
この傷も計画時から覚悟の上だったけど加減し損なったらしい。

「痛いなぁ、もう！！」

ある意味では自業自得だけど。
オイゲンが血の気の引いた顔でナイフに付いた血を見ている。
私の背後でハンネスが体を起こした気配もした。オイゲンとのやり取りに夢中になったせいで土魔法が解けたらしい。

これが潮時だろう。

「ハンネスも武器を持ってるみたいだし、引くことにするよ」

左肩が動かせないとかわしにくいから、言い訳には妥当だろう。

「逃がすか！」

血気盛んなハンネス君が大きめのナイフで切りかかってくるのを突風で吹き飛ばして、私は森に駆ける。

「ま、待て！　待ってくれ！！」

オイゲンの声を無視して私は木々を縫って姿を眩ました。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

途中から風の魔力で飛んだのでかなりの距離を稼いだはずだ。

撒いたとみていいだろう。

「損な役ね」

背中から打たれたり、肩をえぐられたり、魔王の仕事に労災保険が無いから雇用条件を見直してほしいよ。

とりあえず、焼け付く痛みは収まっている所を見ると解決したのだろう。

肩に空の皮袋を当てて止血しながら空を仰ぐ。

「拍手はまだ？」

当然、答えはない。
私は鼻で笑って歩き出す。

「笑い死んだか」

外伝　オイゲンとハンネス

逃げる魔王を制止したものの追うことが出来なかった。
震える足に手をついて抑えながら森の奥に目を凝らす。
小柄な娘の背中が霞んでいく。

「オイゲン」

名を呼ばれて髭の男は顔を向けた。
そこには自らの剣を拾う若い男がいる。

「早くこの場を離れた方がいい」
「ハンネス……」

オイゲンは未練がましく魔王の逃げた森を振り返る。
もう背中も見えない。
警戒心が人一倍で冷静に攻撃的な、そんな不思議な少女だった。
魔王とは到底思えない。オイゲンには彼女が駄々をこねる子供に見えていた。

「本当に魔王だったのか……？」
「黒髪黒目なんてまずいない。あれほど見事に真っ黒なら尚更な」

呟いた独り言を拾ったハンネスが言うのに俯いた。

「お人好しも大概にしておけ」

ハンネスが複雑な面持ちで剣を鞘に収め、オイゲンを睨む。

「自分から言い出したんだ。冗談や酔狂で言えるものではない。近くの村も魔王が出たからと騎士団に注意を促されていた」

女だとは思わなかったがな、とハンネスが続けた。

確かにそうだ。魔王だと名乗れば袋叩きにあっても文句は言えない。

魔物に恨みを持つ人間は多く、オイゲンやハンネスもそうだ。

天魔など、人に危害を加えない一部の魔物を除いて共存は出来ないとオイゲン自身も分かっている。

あの少女は必要なら躊躇わずに人を殺すだろう。

人との共存が出来ない価値観を持っているのは間違いない。

けれど、神殿からはオイゲンの言った通りに殺すことを避けていた。

だから考えてしまうのだ。

もしかしたら、人と暮らす未来があるのではないかと。

夢物語は何時かくる未来だと言った詩人がいたらしい

だから、オイゲンは森を見ていた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

酷いものだと、ハンネスは嘆息した。

うっすらと考えていたし、目を背けていた事でもあった。

『あなたのそれって逆恨みよ』

些かの遠慮もなく切って捨てた少女の言葉を思い出す。

彼女の夜空のような黒い瞳に見据えられると反論も出来なかった。

木の上から蔑んだ視線が突き刺さり、父の仇を狙う刃が鈍り、遂

には己の醜さを暴かれた。
鞘に収めた剣の柄に手を置く。
これを振るう機会は失われてないが、最早かつての焦燥感がない。
あの焦燥は自分が正しいと思い込むのに必要だったのだ。
事実から目を背けるための自分勝手な焦燥感。
父の仇はお人好しを発揮して魔王の消えた森を見つめている。
ハンネスは一度強く剣の柄を握って、オイゲンに声をかけた。

「俺は魔王が人の血を集めていることを騎士団に伝えに行く」

急がなくてはならない。
騎士団が周囲の村や街に通達するのにも時間がかかるだろう。
魔王は強い。腕にそこそこの自信があったハンネスも地面を転がる羽目になったのだから。
動き出したハンネスの足はオイゲンの呼びかけに止まった。

「なんだ？」

ぶっきらぼうに返す。
早くオイゲンから離れてしまいたかった。
逆恨みと頭では理解していても、そう簡単に割り切れるものではない。
今でも殺したい気持ちはあるのだから。

「俺を殺さなくていいのか？」

なのに何故そんな質問をするのだろうかと、ハンネスは拳を握る。
それを突き出してもいい少女はこの場を去った。それが恨めしい。

「あんなことを言われた後で、殺せるはずが無いだろう」

殺せば、復讐を誓った架空の男と同じ場所に落ちてしまう。

「……オイゲン、早く帰って息子と遊んでやれ。寂しがってるはずだ」

その言葉はささやかな復讐だった。

それでも、オイゲンは涙混じりに言った。

ありがとう、と。

外伝　オイゲンとハンネス（後書き）

次回更新は１０月１１日の予定です。

三十二話　再会

夜の空気は随分と冷えていた。
私と娘は息を白くして遊びながら適当に切り出した丸太に座る。
彼女が木の杯に注いで差し出してくれたのは透明な液体。

「香料と水は自分で調整するといいわ」

水で三倍くらいに薄めて昼に採ってきた香りの強い花を浮かべる。
透明な水面に映る青い月と金木犀に似た花が風流だ。
杯を軽く回して花の匂いを楽しんでから液体を口に含む。

「暖まるね」

飲み過ぎると明日が辛いだろうけど、思ったより抵抗なく喉を流れていくので加減が分からなくなりそう。

「遠慮なく飲みなさい」

彼女が杯を傾けて言う。
雪色の頬に早くも朱が差していた。
絡み上戸じゃないでしょうね？

「鼻も目も口も楽しめる一級品。ただ、耳が寂しいわ」

娘が言外に催促するのに苦笑する。

「では、注文通りに一曲」

私は一口飲んで杯を置いた。

ーーー

それ何処よ。
誘われたところで地名なんて分からない私は首を傾げるしかない。

「天魔、いる、平原」

天魔という単語には聞き覚えがあった。
騎士団のリンなんちゃらさんが倒したとかいう奴だ。
複数いるのか。

「その天魔ってなに？」
「強い、魔物」

でしょうね。
倒したことがステータスになるくらい強い魔物なら保護を願うのにはうってつけ。
打算的にそう考えて、私は首を縦に振る。
一緒に行こうと誘ってくれるのだから牛頭が案内してくれるはず。

「牛頭、これからよろしくね」

ヴェベストロー平原までどれくらいかかるか分からないけど、牛頭とは長い付き合いになりそう。
枝と握手してこれから構築する友好関係の先駆けにする。

「魔王、乗る？」
「乗せてくれるなら甘えるよ」

一際丈夫な枝を選んで腰掛ける。
牛頭が動くのに合わせて景色が上下する。

皮袋を詰めた皮袋をクッションにしてみると乗り心地は抜群だった。

「獣が来たら追い払ってあげるよ」

同型の魔物が牛頭の実を狙われて肉食動物に襲われている所を見たことがあったので提案する。

快適な乗り物を獣に壊されるのは癪だもの。

牛頭が頼りにしてくれるらしいので、交渉は成立した。

暇になった私は結界魔法陣を描き写した羊皮紙を牛頭の前にかざす。

幹にも目はあるはずだけど位置が不明なので、近くに下がっていた牛頭の一つを選んで見せた。

「これの意味は分かる？」

自分の血を利用して発動させたりもしたけど、魔法陣の解析には到っていない。

光を屈折させることで効果範囲の物体を透明化する効果がある事と魔法陣の大きさで効果範囲が決まることは分かっているものの、魔法陣に手を加えると何が起こるか分からないので解析が進まない。

「魔法陣、分からない」

「そうよね」

今までの知性体も魔法陣や呪文を使う者はいなかった。

人間独自の技術なのかもしれない。

しかし、諦めきれない。

改良次第では私の姿を隠せる可能性がある。隠せなくとも光の屈折率を変えることで容姿を誤認させる方法もある。

単純な魔法では光を生み出すだけで屈折や反射などが出来なかった。
火や水の魔法で温度を調節することが不可能なのも合わせて考え、魔法陣などは魔力の複雑な応用を可能にする技術と予想している。

「きっと、天魔、分かる」

思考の海に沈んでいた私は牛頭の言葉で浮上した。
単語を並べるだけの牛頭に苛々しながら聞き出してみる。
どうやら、天魔は知性体で魔法を扱える魔物を総称して呼んでいるらしい。

「天魔、魔力、持つ」
「体の中に魔力があるの？」

牛頭が肯定した。
体内に魔力を持っているなら周囲の魔力を掌握されても戦える。
それ反則よ。
自動装填の拳銃みたいな感じだね。
とはいえ、魔物である以上襲ってはこないから心配はしない。
保護してもらえれば良し、魔法について分かれば尚良し。
まだ見ぬ天魔の姿を夢想しながら、私たちは山を下った。

三十三話　野暮用

「これ程あからさまだと一種の感動を覚えるよ」

私は呆れて呟く。

森の中、一人の青年が息絶えてそれを見つけた十五歳くらいの娘が泣きながら魔法陣を描いている。

夜闇に紛れていることもあってか、私や牛頭に気付いていないらしい。

それとも、気付く余裕も無いのか。

魔法陣を書き上げた娘は夕焼け色をした髪が乱れているのも気に留めず、詠唱を始めた。

魔力が娘に集まっていくのが見える。

「隠蔽、違う」

「黙って」

不思議そうな牛頭に命じつつ、娘の詠唱を暗記する。

詠唱が終わると青年の体が火に包まれ、中から赤ん坊が生まれた。

詠唱の内容から考えると生まれ変わりいや、生まれ直しね。

娘が涙を拭って赤ん坊を抱いた。

息をしているのを確認して、娘は赤ん坊と共に森へと消えていった。

「……また面倒事か。嫌になっちゃうよ」

牛頭から飛び降りて、娘が残していった魔法陣を羊皮紙に書き写す。

意味するところはやはり解らない。

詠唱は亡くなった人との再会を願う内容だった。
さっきの事象を引き起こしたのは魔法で間違いない。
分析と状況把握。導き出される結論なんて最初から解っている。
十中八九、神の手引きね。

「魔王、機嫌、悪い」
「ヴェベストロー行きは少し待って。野暮用が出来たの」

私と牛頭の素敵な旅路を邪魔するなんて、本当に野暮よね。
軽い頭痛を覚えて頭を押さえる。
野暮天神様、己を蹴って死んじまえ。馬蹴りのセルフサービスだ馬鹿やろう。

「魔王、楽しそう」
「嫌なことがあるとテンションが上がる質なのよ」

今すぐあの娘と接触するのは避けた方がいい。
見るからに精神の安定を欠いていたもの。出会い頭にズブリとかグサリなんて効果音のお世話になりたくない。

「近くに川があったよね？　あの傍で休みましょ」

首の座っていない赤ん坊を連れて旅はしないと思うから川であの娘が水汲みに現れるの待とう。
明日、娘と合うまでに上手く接触する適当な理由をでっち上げよう。
ネックは牛頭だけど……。

「先に天魔のところに行く？」
「魔王、場所、知らない」

そうだった。地名を聞いたところでたどり着く自信もない。
何しろ、方位磁石や地図もない。太陽のおかげである程度の方角が判るくらいで目指す場所に着いたら奇跡だしね。
方向音痴の自覚もある。

「さて、どうしようか」

目立つところにいなければいいか。
別行動して、解決したら再びヴェベストロー平原をめざすとしよう。
川を越えて森に身を隠す。
あの娘とさほど距離が開いていないのか、鈍痛が全身を這い回るだけでいつもに比べれば楽なものだった。
牛頭の枝に腰掛けて、幹を背もたれにして眠る。
凍える空気が身を包むので皮袋で手足を覆ったり首を巻いたりした。冷え易い箇所を保護すれば少しは我慢できる。
早く村でも見つけて防寒具を買わないと凍死するかもしれない。
ベリンダの街で拝借したお金が手つかずで残っているのに使う機会にも恵まれないし、困ったものね。
寒さに身を震わせながらも、私をゆっくりと眠りに落ちた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

好きだと言われたことがある。
あれは何時だったか。
そう、夏も間近な頃だった。
むせかえるような草のにおいと夕立の気配を覚えている。

まだいじめが表面化していない時期だったからその男子は知らなかったのだろう。
付き合えばいじめが止むかもしれない。男子に良い顔を見せていたい女子が何人かいた。
いじめが続いても一人じゃなければ堪えられる。
けれど、この男子まで標的になってしまうのは避けたい。
まともに私の顔も見れず、俯いて耳まで赤くしているその男子を躊躇なく巻き込む。それをしようとしても、良心が邪魔をした。
あの時、私は何と言って断ったっけ。
適当な理由を並べて、もう話しかけるなと言ったかな。
違うか。彼の誠実な雰囲気に嘘を吐けずに頭を下げて私は逃げた。
いじめが表面化するまで何度か話しかけてくれたけど、次第に目を逸らすようになっていった彼は最終的にいじめグループに仲間入りしていた。
主犯格の誰かと付き合っていたはず。
取ってやった、と自慢していた女子の顔は思い出せない。
ただ、いじめに参加する彼の楽しそうな笑顔がよぎるだけ……。

「魔王、泣いてる」
「寝起きだからよ」

頭がぼんやりする。
胸の中に暗い何かがわだかまって気持ち悪い。

「何もしたくない」

額に手を当てて見上げた空は灰色をしていた。
夜は明けたようだ。
かじかんだ手に息を吹きかけて暖める。
地面に降りて、川に背を向ける。

「人の寝顔を観察するなんて悪趣味ね」

森から送られてくる視線に向けて言う。

昨日の娘だと思うけど、牛頭と居るのを見られたのには参った。

とりあえず、言い訳を考えようとした刹那、夕焼け色の髪が刃物をちらつかせて飛び出した。

三十四話　誤解

木漏れ日に夕焼け色の髪が輝くのは幻想的でもあったけど、振り回すナイフは退廃的で危険な光を放っている。
突き出された切っ先から右半身を引いてかわす。
勢いを殺さずに私の横を走り抜ける娘を転ばしてやろうと足を出してみる。
私の悪戯心が満載の足を彼女はあっさり飛び越えた。

「もうズキズキするよ……。」

体のあちこちが切られるように痛い、かすり傷すらできてないのに。
神の老婆心だろう。天国という姥捨て山から下界観賞らしい。お暇なことで。
あまり格闘は得意じゃないので仕切り直すべく距離を取る私に、反転した彼女が追いすがる。
すぐ接近戦に持ち込まれ、彼女の錆びたナイフが縦横無尽に空気を裂く。

「ちっ」

舌打ちされたし。理不尽だ。
ギリギリで交わしながらも彼女の動きに違和感を覚えた。
けど、観察する余裕もない。
息が上がってきたしそろそろ決着させないと余計に私が不利だ。
打開策を頭の隅で考えるうち、向き合う彼女の眼が赤いのに気がついた。
充血ではなく瞳の色が赤い。

気付いた瞬間に私は無秩序だった回避の方向を統一し、川を背後にするよう立ち回った。

「ーーっ！」

「さぞ眩しいでしょうね」

川からの反射光。

サングラスなんて物は私に縁がないから、なかなか気付けなかったよ。

これで少なくとも木陰までは退くはず。

そう思ったのも束の間、彼女は眼を思い切り閉じて光を遮断。そのまま攻撃を再開しようとした。

魔力の掌握を利用した空間認識で視覚を補うつもりか。

「させませんよぉだ」

私は彼女の掌握した魔力を奪い取りにかかる。

魔力の奪い取りは初挑戦だったけど案外すんなり出来た。

彼女から近いほど奪い難くなり、結局の比率は私と彼女で三対二というところ。

「……力の根元、集いたまえ」

詠唱？

彼女がそっと唱えた途端、私が掌握していた魔力が半分以上とられた。

「何それ、ずるい！」

文句を言っても始まらない。

でも言わずにはいらない。

「ずるい、ずるい！　えぇと、力の根元集いたまえ」

……何も起こらなかった。

「早い者勝ち」

「やっぱりずるい！」

すごく悔しいんだけど。

夕焼け色の彼女が呆れたように私を見る。なによ、その眼は。

「てっきり雇われた賞金稼ぎだと思ってたわ」

彼女が頭に片手を当てて言う。

余裕を見せつける意図はなさそうだから、予想が外れた事による脱力だろう。

未だに油断なく魔力を掌握している彼女からは殺気や気迫が消えていた。

「魔物連れの私が誰かに雇われるはず無いよ」

牛頭を指差す私に彼女が妙な顔をする。

「戦っていたのではないの？」

……誰が戦っている相手の上でおねんねするのよ。

関係を誤魔化す必要もなかったとはね。

「あなたの事情はよく解らないけど、私が襲われたのは人違いなの

かな？」
「謝るわ」

頭下げる位してほしいけど無理か。逆の立場なら私もしない。
命のやり取りした後に頭を下げるなんて切り落として下さいと頼んでいるようなものだしね。

「朝ご飯を一緒に食べてくれるなら許すよ」

あっさり矛を収めた私を彼女が怪しんでいる。
過程はどうあれ彼女との交流の場を設けられたのだから、良しとしよう。
戦わなければ神が嗜虐心を満たす大義名分もなくなる。

「お互いに別の食事を作って話しながら食べましょう。命を狙われていても、これなら安心よね？」

この娘は私並みに用心深い。魔力をまだ手放していないし頭を下げて隙を見せたりしない。
だから、彼女が牛頭を横目に見ただけで聞きたいことも察しがついた。

「牛頭は肉を食べないよ。植物と一緒で水と土があればいい」

説明して牛頭に根っこを地面に埋める食事体制を取ってもらう。
彼女は牛頭の周囲を回って観察する。
そして、腕を組んで頷いた。

「わかったわ。魔力は掌握したままでいいわね？」
「それでいいよ」

そうでないと納得しないだろう。
ただ彼女が承諾したのが腑に落ちない。
私なら絶対に承諾しないもの。
もしかしたら、あの娘はこのまま逃げちゃうかも。
そう思いながら、食材を取ってくるという彼女を見送った。

三十五話　自己紹介

戻って来た彼女は一歳くらいの男の子を抱いていた。
明るい茶髪に緑色の眼をした男の子だ。
既に焚き火と焼き魚を準備していた私は少し驚いた。
戦闘になる可能性があるのに子供連れとは思わなかったよ。

「その子を食べたりしないよね？」

訊ねる私と同様に彼女も眉根を寄せた。

「人なんて食べないわ」

となると弟だろうか。まさか彼女の子供ではないだろうし。
聞いたところで教えてもらえないのは目に見えているから、私は無視を決めこんだ。
彼女が私の向かいに座り食事が開始された。

「……気まずい」

和やかなムードなんて最初から期待してないけどこれはあんまりだよ。
会話しないと情報を得られない。よって事態の収拾も叶わない。
私は険悪な空気を無視して口火を切る。

「ヴェベストロー平原が何処にあるか知らない？」
「知らないわ」

釣れない返事だった。

魔物限定で通じる地名だと納得する。

「天魔が住む平原らしいよ」

「天魔……それは何？」

これも通じないのね。

リン某様が自慢していたから人でも分かるはずなのに、彼女は本気で首を傾げている。

牛頭に半眼を流すと「天魔、いる」と自信を持って言い切った。

男の子が牛頭をまじまじと見つめている。

「魔物連れでその平原に行く途中なのかしら？」

「そう。あなた達は？」

答えてくれれば情報ゲット。答えてくれなくても隠し事があると分かる質問をしてみる。

腹のさぐり合いがとても楽しい。ドキドキしちゃうね。

「……ここに住んでる」

言いたくなさそうにしていた彼女は男の子と目が合うとそれに促される形で答えた。

男の子が主導権を握っているように見える。

「近くに村があるのね。服を新調したいから場所を教えてくれないかな？」

古着でもこの際かまわないや。あと野菜とかもほしい。

頭の中で必要な物をリストアップしている私に彼女は睨みつけるような視線を寄越して低い声で言う。

「案内はしないわ。それに魔物はどうするつもり？」

失念していた。

けれど、牛頭の事は後付けの理由だと気付く。でなければ『それに』なんて言葉は使わない。

案内しないという彼女にとっての決定事項が先にあり、尤もらしい理由をつけ加えただけだね。

きっと、彼女は村に近づけない理由がある。私を賞金稼ぎと間違えたのと関係しているだろうか。

「村は自力で探すことにするよ……何で殺気立つの？」

「村に近づいては駄目」

そう言われると行きたくなるね、とっても。

とは言え、

「理由しだいかな」

「死にたくはないでしょう？」

ないね。

こっそり行くことにしよう。

彼女が理由を言えないのは自身にとって都合が悪いからだもの、色々と聞けるはず。

でも、今は彼女から聞き出せるだけ聞き出すべきか。

予定に村への訪問を加えながら私は彼女への質問を続ける。

根ほり葉ほり聞いても怪しまれるだけなので、ワンクッション挟んでおこう。

私は男の子に笑顔を向ける。

「君、いくつ？」

牛頭の実と睨めっこしていた男の子はいきなり声をかけても驚かなかった。

子どもらしく頭を悩ませながら人差し指を一本立てた。

思ったより聡明な子かもしれない。

「一歳か。お名前は？」

我ながら気持ち悪くなる猫撫で声が効いたのか、男の子は早くも警戒を緩め始めた。

しかし、娘が男の子を手招きしたので私と彼の交流は遮られた。

「クルト、おいで」

彼女が名を呼ぶとクルト君は私と見比べて、何故か牛頭の元に行った。

娘が焦って腰を浮かせる。

牛頭が無感動にクルトを見る。

「牛頭、じっとしてなさい。動いたら燃やされるよ」

娘の表情はまさに鬼の形相だった。

クルトに何かあったら修羅場になると容易に想像できる。

牛頭が微動だにしなくなりクルトは娘に捕まる。彼が娘に怯えて逃げたので少し手間取っていた。

クルトの手を引いて戻った彼女は安堵の面もちだった。

「魔物を止めてくれてありがとう。助かったわ」

「どういたしまして。魔力を掌握しなくていいの？」

彼女がよほど焦ったおかげか、魔力が彼女の手を放れて好き勝手に漂っていた。

「……いいわ」

「そう」

今の一件で私達には害意がないと判断してくれたらしい。
態度にここまでの落差を生むくらいクルトは大事な存在なのか。
妬けちゃうね。

「名乗ってなかったわ。私はカーリン」

彼女から話を向けてきたのも態度が軟化した証拠。
今までどれだけ気を張っていたのやら。
さて、どうしたものか。
名乗りたくない。ベリンダと名乗って、もし珍しい名だったら出身地を聞かれてしまう。
ベリンダの街の名前どころか地方名すら知らないのだから怪しまれること請け合いだ。
けれど、この流れで名乗らないのも不自然だろう。

「あなたは確かマオウだったわね？」

返答に困る私はカーリンの一言に凍り付いた。
なんで、魔王だってバレてるのよ。
私が振り返ると寝起きに牛頭と交わした言葉に思い当たった。
聞かれていたのか。

「マオウ？」

……発音がおかしい？
もしかして、名前と勘違いしてるのかな。

「ごめんごめん。何時の間に名乗ったかなって考えちゃってね。牛頭との会話を聞いてたの？」
「そうだけれど、マオウで合ってるわね？」

この娘、案外ちょろい。

三十六話　狩り

カーリン達の後ろ姿を見送って、私は牛頭に背中を預けて腰を下ろした。
帰るというカーリンに対しクルトは牛頭で遊びたがったため少しごたついたけれど、最終的にクルト君はカーリンに説得されて帰宅の運びとなった。
気になるのはそのクルト。

「やっぱり、昨日の赤ちゃんよね……。」

途切れないように話し続けて喉が渇いている。
それだけ長いこと話したのにカーリンは帰ると言い出さなかった。
赤ちゃんを置いて来ていたらあまり長く傍を離れたりしないから、誰かに子守を頼んだと仮定しても私の前に足手まといのクルトを連れて来る意味はない。
一緒に預けてしまえば良いのだから。
したがってカーリンに子守をかって出る殊勝な知り合いはおらず、放置も出来ずに私の前に現れたのだろう。
気になる点はまだあるけど。

「牛頭はクルトの事どう思う？」

水筒に口をつけながら訊いてみる。

「うろちょろ、うるさい」
「素っ気ないね」

気に入られているだけだと思うけど、牛頭にとってはウザかった

らしい。
私は頭上を見上げる。
鈴なりになった牛の生首が好き勝手な方向を見ながら風にゆらゆらと振れている。
こんなのに物怖じしないのは幼児だからだろう。知らなければ不気味さも感じない。

「そう、知らないのよ」

一年も森で暮らしていて魔物を知らないはずはない。
クルトはつい最近まで平和な村にいて魔物を見慣れていなかったから、牛頭を怖がらない。
私を村に近づけたくないのは自分たちの存在を隠したいからで、その理由は急激な成長と魔法による蘇り。
まぁ、全部ただの仮定。
知らないことが多すぎて状況が把握できない。

「牛頭」

呼び掛けると視線が一斉に注がれた。

「狩りに行くよ」
「肉、たくさん、ある」

言われなくても分かってる。
ただ、狩りの振りしてカーリン達の住処を探すのよ。
そこにあの二人しか住んでないなら、私の想像が肉付けされる。

「肉はいくらあっても良いの」
「肉、腐る」

細かい事を気にする牛頭の意見を黙殺して立ち上がる。
さて、痛みセンサーで位置を探りますか。
魔力で探ると逃げられちゃうし、我慢しよう。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

見つからない。
カーリン達はおろか獣すら見当たらない。

「毛皮だけでもほしいね」
「必要、ない」

あんたはそうでしょうよ。
牛頭と呼んではいるけど本体はあくまで木の方だから温度なんて感じないと思う。
それにしても、おかしい。
普段なら牛頭の実を狙った肉食獣がやって来たりするのにまるで姿が見えない。
鳥もいない。魔物も見ない。

「カーリンの仕業かな」

魔力の掌握はあまり上手くなかったけど、詠唱や魔法陣を使えばカバーできる。
知性体でなければ魔物に後れは取らないだろう。
カーリンもこの周囲で狩りをしていたら、私を獲物と間違って攻撃したりしてーー

「冗談じゃないね」

笑い話にもならない。

魔力を掌握しておくべきかと思案する私の耳にたくさんの鳥の羽ばたきが聞こえた。鳩くらいの鳥が群で飛び立っていく。

西に少し行ったところだ。あの下に何か居るのかもしれない。

あえて東に進んでみる。

「うん、痛いね」

痛みが強くなった。

つまり、西にカーリンが居る。

鳥が飛び立った辺りを目指して歩き出す。

牛頭は無言で付いてきた。

「前から思ってたけど何で先に行かないの。私を置いて行っても牛頭に不都合はないでしょ？」

もちろん、案内役がいない私は困る。

でも、魔物は私を傷つけないだけで助けてくれる存在ではない。

何か理由があるのだろうと水を向ける。

「仲間、見捨てる、天魔、怒る」

私を見捨てると天魔のご機嫌を損ねるから牛頭が困る、と。

なんだ、自分のためか。

「安心したよ」

振り返って笑顔をぶつけても牛頭は無反応。
私のためなら兎も角、牛頭自身のためなら遠慮しなくてもいいや。
再び前を向いた私は足を止める。

「……人の声？」

距離があるのか、かすかに聞こえるくらいだけど、男の怒鳴り声。
カーリンの言っていた村の人間か。
今は会いたくないね。カーリンに警戒されてしまう。

「牛頭、隠れてやり過ごそう」

怒鳴り声とは反対の方向に逃げようと指示した時、駆けてくる足音が聞こえ慌てて眼を向ける。

「ーーマオウ！？」

現れたのはクルトを抱きかかえたカーリンだった。
肩で息をしていて、転んだのか左肘を擦りむいている。

「カーリン……。すぐに逃げて！　牛頭、人間を脅かしに行くよ」

絶句しかけた私は即座に頭を切り替えた。
カーリンの切羽詰まった様子と男の怒鳴り声を併せて考えると、彼女たちは男から逃亡中。
恩を売るには絶好の機会。
唇が歪むのを抑える。

「さっさと行って！」

私の歩いて来た方向を指さして促すと同時に魔力を掌握して男の位置を探る。
十メートル以内には居ないようだ。

「……信用するわ」
「決断が早くて助かるよ」

カーリンとすれ違って男の怒鳴り声を頼りに先回りする。
牛頭の姿だけで逃げてくれればいいけど。
多少の不安はあるものの私は息を殺して怒鳴り声の主を待った。

三十七話　脅かし

二人いる。
怒鳴り声をあげている筋肉質の男と周囲を警戒している背の高い男。
どちらも弓を持っているけど魔力を操る様子はない。
おそらく魔法を使えないのだろう。
今の私の最大範囲十メートルの魔力を掌握し、集める。
男達が魔力の動きを追って走ってくる。

「牛頭、出るよ」

幹を軽く叩いて促す。
私は隠れて魔力を操る役割、牛頭は男達を直接脅かす係だ。

「魔物！？」
「何で居るんだよ！」

唐突に現れた魔物に男達が慌てる。
筋肉質の男が弓に矢をつがえて引き絞る。
牛頭の後ろに隠れている私に気付いていないのを確認し、火魔法で弓を狙撃する。
一瞬で魔力レールが敷きピンポン球サイズの火球で弓を撃ち抜く。
筋肉質の男は燃える弓を取り落とし、怯んだ。
後一押しね。
牛頭の幹を三度小突く。

「人間、邪魔」

いい子ね。打ち合わせ通りの台詞よ。
牛頭がゆっくりと進む。
進行方向にいる男達は後退る。
風の魔力で男達を包み込む素振りだけで彼らは回れ右して逃げ出した。

「……妙に呆気ないね」

知性体が珍しいのも関係しているだろうけど、男達は武器になる物を弓しか持っていなかった。大きなナイフを腰に下げてはいたけど、人を仕留めるにしてはやはり軽装に思える。

「カーリンは何で逃げたんだろう」

彼女は掌握が下手だったけど真っ向から戦って勝てない相手には見えなかった。
あの男達は賞金稼ぎではなく狩りに来た村人と見るのが妥当に思える。
カーリンと村の関係に何かあるのは間違いない、か。

「牛頭、川に戻るよ」

どうあっても村を訪ねる必要ができた。
諍いは双方の意見を聞いて仲裁しないと禍根が残る。
問題はタイミングね。
川への道すがら、分からない点を纏めていく。
カーリンとクルト及び村との関係、蘇り。
細々としたものを除くと少ないけれど、カーリンと村のどちらからも話を聞かないといけないのが頭の痛いところ。
あれこれと考えている時、道の先をウサギが横切った。

「敷き布団発見！」

ついでにお夕飯。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ウサギを牛頭の枝に提げて川に帰る。

好きな曲を口ずさみながらナイフを取り出し、熱湯消毒しているとカーリン達が忍び寄って来た。

私の他に人影がないのを確認しているらしいので無視する。

「……また助けられたわ」

また？

あぁ、牛頭を止めた時のあれね。

「簡単に追い払えたよ。クルトが原因みたいだけど、何したの？」

鎌掛けですよ。

男達は「出てこい」とか「殺してやる」なんて女殺しなラブコールしか口にしなかった。

「それはおかしいわ。原因は私のはず」

「なら何でクルトが追われてたのよ。そうそう、夕食は取れたてウサギだよ」

訝るカーリンに苦笑してウサギを地面におろす。

さらりと話題を変えたのは深く考えていない事と追及しない意思表示。
警戒心は呼び起こしたものの、助けられたので強くは出れないらしい。
意外と律儀な娘ね。
感心しつつもウサギを前に私は手を止める。
ウサギを捌くところをクルトに見せても良いのだろうか。
一歳児が見るとトラウマになりかねない。
まぁいいか。私の知ったことじゃない。
そう思いつつも岩の裏を作業場に定める私は配慮の出来るいい子よね。

「一人で子育てと監視は大変でしょ？」

クルトの手を引いて岩の反対側に座るカーリンに軽い調子で話しかける。
諸々の状況から推察すると、カーリンはクルトと二人暮らし。
私と食事をしたのも、今ここに居るのも、私を監視しているだけ。
直接的な脅威があり、見慣れない者が森にいる。誰だって敵と通じていると疑うだろう。
魔王と聞いて名前を勘違いしたのは魔王の存在そのものを知らないからだ。
村とは完全に没交渉。故の世間知らず。

「……連中を追い払ったそうだけれど、どうやったのかしら？」

開き直ったよ。

「牛頭の姿を見せて、物陰から弓を壊したら逃げて行ったよ」

証拠はないけどね、と付け足す。
カーリンは僅かな沈黙の後で岩の上から顔を覗かせた。
赤い瞳は細められ、彼女が手で作った陰の中でも物騒に光った。

「信用していいのかしら？」
「カーリンが決めることだよ」

三十八話　結界の応用

剣呑な赤い瞳と見つめ合う。
川のせせらぎを聞き流しての睨み合い。

「保留にするわ」
「それじゃ、ウサギは食べられないね」

信用してない相手からは危なくて食事はもらえない。彼女も同じだろう。
毛皮を上手く剥ぎ取り川で洗う。明日の晩には使えると良いけど。

「マオウこそ、女の子が一人旅なんて大変でしょう？」
「牛頭もいるよ」

楽しい楽しい探り合い。
互いの事情は隠しつつ相手を多く知りたがる、と。

「私たち、似たもの同士よね」
「残念だわ」

同感だよ。
人を無条件で警戒するような人と仲良くなれないもの。
口元だけで笑い合う私たちにクルトが不思議そうな顔をした。

「夕飯、一緒にどう？」
「魔力は掌握しても良いかしら？」
「ご勝手に」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

明るいだけが取り柄の太陽が山向こうに沈みゆく。
川の水音を伴奏に夜の虫が高く鳴き始めそよ風に揺れる木々が唱和する。
この場所にも闇が迫る。抵抗するのはちっぽけな焚き火ふたつ。

「夕焼け色の髪よね」

少し羨ましい。

「マオウは夜闇色の髪だわ」
「おかげで面倒なことになってるけどね」
「奇遇ね。私もだわ」

ウサギの足を焼いていた私は危うく落としてしまうところだった。
まさかのお仲間ですか。私とは逆に勇者だったり？
カーリンは目元にかかる夕焼け色の髪を後ろに流すと、煮込んだ野草をクルトに食べさせた。
考えてみれば勇者が村人に襲われるはずがない。騎士団にいたリンさんが勇者としては妥当だろう。
あまり詮索するのも良くないよね。
ウサギの足がしっかりと焼けたかを細い枝を突き刺して調べる。

「そうだ。カーリン、魔法を教えてほしいのよ」

生焼けだったウサギの肉を火に戻して羊皮紙を取り出す。
結界魔法陣が描かれているそれを彼女に見せる。

「面白いわね。光を曲げて視界に入らないようにする魔法陣かしら」

一目見ただけで分かるんだ……。

無言で先を促す。

「これ、相手を絞り込まないと発動しないわ」

「血を使って相手を定めるの」

「魔法陣を血で描くのかしら？」

肯定するとカーリンは小首を傾げた。

何かおかしいのだろうか。

「多分、血以外でも限定できるわ。例えば骨」

「どういうこと？」

「血を使うのは描きやすいから。骨でも良いはずだわ」

そういえば、この魔法陣は古い神殿にあった。

貴族でも作るのが難しい魔法陣だとオイゲンが言っていたけど、

彼自身はどこで魔法陣を知ったのか。

血と違って骨なら保管しておける。

私の脳裏に白い池が浮かんだ。

オイゲンが私を追い払ったのはあの池が安全だから。

魔物の骨で結界が描かれていたのだとすればどうか。

大量にあった罪人の骨の下に描かれていたとしたら。

「魔法陣を骨で描いた後、別の骨を足したり出来ないかな？」

「それは無理。完成した魔法陣には手を加えられないわ」

決まりね。

教会には血で、白い池には骨で、結界が描かれていた。
オイゲンは骨も材料になることを隠していたんだ。
自分の死に場所と定めた池に私が興味を持たないように。
やってくれたね。

「これ墓を掘り返して骨を取ってくれば人相手にも使えるわ」

さらりと凄いことを言ってのけたカーリンに驚く。

「その手があったね」

よくもまぁ、直ぐに思いつくものだ。
白い池なら材料が大量にあるけど騎士団と鉢合わせしそうで怖い。

「でも、自分も人間だから結界の効果を受けるよ」
「……何か良い案はないかしら？」

私は親指と人差し指で輪を作る。

「円の中をくり貫いちゃえばいいよ」
「それだと外に出れないわ」

確かにそうだ。
光を屈折させるだけだから中に入れないわけではないけど、結界内をさまよう事になるだろう。
人以外の獣に結界内で襲われたら対応出来ない。
私は親指と人差し指の先を離して穴の開いた輪を作る。

「出入り口を設けて、罠を仕掛けたらどうかな？」
「進入路を限定できるのは良いけれど逃げ場が無くなるわ」

カーリンは相手を複数に考えてる。
彼女がこんなに真剣なのは使用する気があるという事で、相手は村人かな。
実は有効な方法は思いついている。
村の周りを結界で囲って孤立させるやり方。
私は村に行く予定があるから提案しない。
代わりに私にも役立つ案を挙げる。

「光の曲げ方を変えたり出来ないかな？」
「一から組み直すしかないから何年かかるか分からないわ」

魔法陣の一部を弄っても不可能らしい。
お手上げね。
使えない物に興味はない私はカーリンから羊皮紙を回収した。
物欲しそうな彼女の視線は無視する。
使われると碌な事にならないもの。
再び手に取ったウサギの肉は良く焼けていた。

三十九話　隠滅

眠りに落ちたクルトを抱えてカーリンは帰って行った。
彼女は私を監視しているのだから、明日の朝も訪ねてくるのは容易に想像できる。
村を訪れるタイミングが掴めない。

「どうしようかな」

ほのかに青い月を見上げる。
村を訪れた後でもカーリンと接触する機会を作れないと動きにくくなる。
だから、今までみたいに敵対関係になるのは好ましくない。
上手く立ち回るには相手の性格を測り行動を予測するのが一番。
私はウサギの毛皮を敷いて寝転がる。まだ少し血生臭い。

「まずカーリンは私にそっくりの性格」

敵に回したくないね。怖すぎるよ。
彼女と私の違いは優先順位だ。
彼女は自身よりクルトを上位においている節がある。
クルトを味方にすれば多少の無理でも従うはず。最悪、人質にしてしまえばいい。
そのクルトはかなり不思議だ。
カーリンの事を他人として捉えているように見えた。
カーリンとクルトの関係が不透明で作戦が立て難いったらない。
どの方法でも最後にはクルトの動きが予想できずに見通しのない計画が出来上がる。
明日にでも回すとしよう。

「魔王、寝る、しない？」
「寝ないよ。徹夜する」

夢の世界で嫌いな奴らが手招いているからね。
私は魔法陣を書いた羊皮紙を取り出す。
ついでに魔法の鏡の破片に光の魔力を込めて明かりを作る。蛍光灯替わりに丁度良いのよね。
騎士団の動向も探れるし、一石二鳥だ。
騎士団のメンバーに新しい仲間は加わっていない。数日前に加わったハンネスが騎士の一人と訓練しているのが写っているけど無視。どうせ負ける。
私は羊皮紙とにらめっこを開始する。
カーリンには一目で効果が分かったから、規則性があるのは間違いない。
新しい魔法陣は数年掛かりで作るとして、今は魔法陣を一目で看破する知識がほしい。
この世界に来た初日、魔法使いが仲間を呼んだ時に魔法陣や詠唱を使っていた。
魔法陣の効果を発動前に判断できれば戦いやすくなる。

「カーリンが教えてくれれば早かったのになぁ」

何度も彼女に聞いたけど教えてくれなかった。
敵か味方か分からない私を強くしたくないらしい。

「素晴らしい先見の明」

彼女の未来が暗いからサングラスも要らないね。
なんて言葉遊びをする暇があったら魔法陣の勉強。

「参考書が足りないね」

もう一度、蘇りの現場に行ってみよう。
結界で言うところの血や骨があったら採取しておきたい。
そう思って上半身を起こそうとしたら髪が引っ張られた。

「……大分、伸びたみたいね」

牛頭が無感動に見下ろしてくるので冷静を装って独り言を転がした。
実際にはかなり恥ずかしい。
髪が伸びたせいで背中の下に挟んでおり体を起こした時、縄に繋がれた犬みたいにつんのめったのだ。
無理矢理に髪を切られて以来、伸ばしたことがなかったから油断していた。
気を取り直して起き上がる。
風の魔力を使って文字通り川を飛び越えて河原に着地。
対岸から川を横断する牛頭に声援を送った後、共に森へと入る。
少し行くと広場があった。ここが現場、のはず。

「魔法陣、無い」

見れば分かるよ。
私が魔法陣を見せた事でカーリンが警戒して消したのだろう。
とはいえ問題はない。書き写してあるもんね。
クスクスと忍び笑いをしていたら、牛頭に不気味と言われた。
失礼な木ね。お互い様でしょ。
しゃがみ込んだ私は鏡の破片で土を照らす。
何の変哲もない土に見える。

周辺にも変わった物は見つからない。
どうやら場所は何処でも良いらしい。

「でも消した……。」

証拠隠滅したのだから、蘇りは知られたくないという事になる。

「明日はカーリン達が来ないかも」
「静か、いい」

牛頭はそうだろうけど私は会えないと困るよ。
明日、クルトが二歳になっていたら、タイムリミットが明確になる。

「牛頭、昨日の晩に死んだ男の死因は判る？」

一番近くにあった実に横目を向ける。昨日は無かった実だ。

「死因、判らない」

私が見ていた実の上になっていた実が答えて、反動で落ちた。
間抜けな構図ね。
思わず笑ってしまうけど私は昨晩の記憶を掘り返す。
外傷はないように見えた。そして、現場には血が落ちてなかった。
病死だとしよう。
蘇った肉体が一日ごとに一年老いるとして、病気にかからないだろうか？
感染症ではなく先天的な物なら尚更、決められた死に向こう。

死んだ男はカーリンと同い年くらい。十六かそこらだ。
男とクルトを同一人物とすると後十五日で追いつく。
その日、クルトは生きているだろうか？

四十話　猿芝居

夜が明けきらない内にカーリンが訪ねてきた。
とはいえ、私が居ることを確認しただけらしい。
私の狸寝入りを見破れずに彼女は帰って行った。
ちゃっかり、後を付けさせていただきました。

「ふふふ……。」

人の秘密を暴いて忍び笑い、我ながら良い趣味している。
牛頭は留守番しているので私の笑い声は誰にも聞こえない。
カーリン達の住処は浅い洞穴だった。
昨日より明らかに大きくなったクルトが居るのも判明したので撤収。

「見た感じは二歳くらいね」

クルトは危なげなく歩いていた。
音を立てないように素早く帰って川辺に佇む牛頭に声をかける。

「ごめん、待ったぁ？」
「かなり、待った」

そこは「今来たところ」って言うべきシチュエーションなのよ。
肩を竦めて見せて、朝食の準備をする。
少し大きめの焚き火で煙を昇らせる。
ちょっとしたアリバイ工作だ。

「私は今起きたところですよ」

しばらくしたらカーリンが様子を見に来て、すぐに帰るだろう。
お互いに怪しまれないように顔を出したり隠れたり。

「面倒よね」

土魔法で石製フライパンを作って、細く切ったウサギの肉に火を通す。
野草と一緒に炒めて木の器に盛る。
器は私のお手製。素朴さが売りの逸品だ。
良さが判るのはきっと私だけ。
肉と野菜だけだと色合いが悪い。白い器に盛ればマシになるのに。
贅沢な悩みを頭の隅に蹴りとばして私は手を合わせる。

「頂きます」

食事を開始して間もなくカーリンの姿が木々の間に垣間見えた。
何食わぬ顔でウサギを食べる。矛盾してそうでしてない絶妙さ。

「おはよう」

カーリンに手を振って挨拶に代えた。
口の中に物が入ってる時に話すのは失礼だものね。
カーリンの様子を見る限り、私が尾行したのは知らないみたいだ。

「クルトはどうしたの？」
「昨日の今日だから留守番させてる。マオウがいるのを確認したからもう帰るわ」

嘘ばっかり。

成長したクルトを見せたくないから置いてきた。顔を見せないと心配した私が森を探し回るから仕方なく来た。
そんなところでしょ。お見通しよ。

「気を付けてね」

私の笑顔は彼女にどう見えているだろうか。

「マオウこそ。早めにここを去らないと仲間を村人に殺されるわよ？」

その通り。むしろそうじゃないと困るよ。

「もし私の仲間を殺す輩がいるのなら、四肢の先から寸刻みにしてやるね」

笑顔のまま言い切る。
カーリンの口元が引きつった。

「村人に同情するわ」

彼女の細い咽から出た声はかすれていた。その声に自分で顔をしかめてカーリンはきびすを返した。
彼女が森に消えたのを見届けた私は食事を終えて立ち上がる。

「牛頭、演技は得意？」

食器を水魔法で洗いつつ訊ねる。
心許ない反応が返ってきたのでそれを踏まえて作戦を組み直す。

「牛頭、これから私が言う事を守ってほしいの」

注意事項を言い含めて更に復唱させた後、私は魔力を掌握して周囲を探る。

「さて、行こうか」

村に。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

森を進むと目当ての一行を見つけた。

昨日の狩人二人と武装した男達、合わせて五人。殺気を隠さない態度は明らかに狩りが目的ではないと語っていた。

森に魔物が出た以上、討伐する必要がある。

彼らはそのための武装集団だろう。

予定通り。順調過ぎて心の中の私が小粋なステップを刻んでいる。

「村まで行く手間が省けたね」

牛頭に合図を送る。

作戦の開始を告げるのは私の悲鳴だ。

「誰か！　助けて下さい！！」

丁寧語は舌噛みそう。

か弱い少女つまり私の悲鳴に男達が一瞬硬直し、走ってきた。

私は牛頭に捕まった旅人の振りをして助けを呼ぶ。

武装集団は私と牛頭の姿を見つけて武器を構えた。

「矢は放つな。あの子に当たる」

「気色悪い魔物め、その子を放せ！」

単純だなぁ。まぁ、普通は助けてと叫ぶ少女が魔物の仲間だなんて思わない。

それを見越してこんな猿芝居をやってるのだけど。

牛頭の幹をつま先で軽く蹴る。逃げろの合図だ。

「待ちやがれ！」

「おい、逃げたぞ！　追え！！」

血走った目が追って来る。

どちらが魔物だか分からないよ。

追いつかれないように、かと言って引き離してしまわないように、私はこっそり牛頭に指示を出す。

嘘の涙も流してみる。ささやかな特技だけどこんな場面は滅多にないので使い納めだろう。

次第にぐったりして見せる私に男達が焦る。

少し楽しくなってきた頃、ようやくカーリンとクルトの隠れ家に着いた。

森から突然飛び出した私と牛頭にカーリンが驚く。

「牛頭、投げて。後は手筈通りにしなさい」

私が言い終わった直後、牛頭が私をカーリンに向けて投げ飛ばした。

地面を転がってカーリンの足下で止まる。

「痛っ……！」

手加減しなさいよ。脱臼したかも。

「マ、マオウ？　これは何の騒ぎ？」

「村人に見つかった。穏便に済ませたいから口裏合わせて」

演技ではなくよろよろと私が立ち上がるとカーリンが肩を支えてくれた。

しかし、慌ただしい足音と共に現れた武装集団を見てカーリンの顔は青ざめる。

私は彼女にだけ聞こえるように囁く。

「私を人質にして、逃げる瞬間に引き渡して」

カーリンは小さく頷いた。

牛頭に視線で逃げろと指示すると、見た目からは想像できない身のこなしで素早く森の奥に走って行った。

「待て、追うな。少女の安全確保が先だ」

牛頭を追いかけようとした狩人の二人を大柄な男が止めた。

あいつがリーダーかな。

妥当な指示ね。狩人が二人掛かりでも牛頭なら返り討ちにする。

リーダーらしき大柄さんはカーリンを一瞥すると身の丈の両刃剣を構えて低い声を出した。

「その少女を放せ、鮮血の子」

……鮮血の子？

四十話　猿芝居（後書き）

次の更新は１０月２３日になります。

四十一話　潜入

鮮血の子と呼ばれたカーリンが歯軋りした。
私は彼女をそっとつついて現実に引き戻す。
侮辱語だろう事は彼女の様子で分かったけど、冷静でいてもらわないと私が人質になった意味がない。
カーリンは小さく舌打ちした。

「この子を無事に渡してほしかったら、一人を残して村に帰りなさい」

カーリンが私に錆びたナイフを突きつける。
小刻みに刃先が震えているけど、手元が狂ったりしないでしょうね？
背中を流れる冷たい汗を感じる私の耳に間延びした声が聞こえてきた。
背後の洞穴から聞こえた声はこの場にそぐわない幼児の声だ。

「お姉さん達、誰？」

クルトがキョトンとした顔で私たちを見る。
昨日の今日で私のことを忘れたのか。
頭のいい子だと思っていたけど評価を改めた方が良さそうだ。
視線を戻す。男達は驚いていた。
昨日カーリンを追いかけていた狩人はさほど動じたように見えないものの、他は揃いも揃ってだらしなく口を半開きにしている。

「まさか、クルトの子供か？」

いち早く立ち直ったらしいリーダーの大柄さんは信じられないと言いたげだ。
クルトの子供、彼はクルト自身を指してそう言った。
やはり、クルトは蘇ったのだろう。
カーリンが私を見下ろす。
余計なことを喋ったら殺すと視線が語っている。
このやり取りも反応も想定していたから何とも思わない。
カーリンは私の首筋にナイフを当てたままクルトに近づいた。
さり気なくクルトの周りに土の魔力を集めて逃げられないようにしている。
クルトの手をカーリンが片手で掴む。
するとクルトは不思議そうにカーリンを見上げた。

「お姉さんどうしたの？」
「おいで」

名前は呼ばないでクルトの手を引く。まぁ、当たり前。

「その子達を離せ！」

大柄さんが叫ぶ。しかも対象が増えている。
カーリンはそれに眉を顰めつつも言い返さず、森へと静かに下がる。
男達が動こうとする度に錆びたナイフをこれ見よがしに掲げて封じた。
ジリジリと後退して十分な距離を取った瞬間、カーリンは私を突き飛ばした。
振り返る間も無く足音が遠ざかっていく。
私は牛頭に投げられた時と同じように地面に転がっていた。
どいつもこいつも、少しは労りなさいよ……。

私の隣を抜けてカーリンを追いかけようとした狩人Ａの足を掴んで転ばせる。
心が晴れた。とっても清々しい気分。

「何しやがるこのガキ！」

跳ね起きた狩人Ａの頬に平手打ち。

「魔法を使える相手を一人で追いかけるなんて自殺行為です！」

感情が高ぶった娘の演技で涙目を利用した上目遣いを敢行。見事に怯ませることに成功する。

「その子の言う通りだ」

大柄さんがやって来て私に手を差し伸ばしてくる。
断るのも失礼なのでその手を取って立ち上がった。

「助けて下さり、ありがとうございました」

深く頭を下げて感謝の言葉を紡ぐ。
大柄さんが気圧されたように息を飲んだ。謝罪として頭を下げる文化が無いのかもしれない。
やってしまった事は仕方がないので、先程転ばせた狩人Ａにも頭を下げる。

「助けて頂いたにも関わらず失礼を申しました。ごめんなさい」

きっと、心にもない事ってこういうのを言うのね。
狩人Ａはあたふたし、困ったように大柄さんを見る。

その他のメンバーの視線も受けて大柄さんは頭を掻いた。
「魔物退治は後回しだな。村に戻って村長に報告だ」
方針を決めて歩き出した大柄さんの後ろに続く。
私を他の男が囲んで周囲を警戒していた。
護送と言うより連行されている気分。
「連れはどうしました？」
大柄さんが振り返りもせずに訊いてくる。
何故か言葉使いが丁寧だ。
「ずいぶん前に魔物に殺されてしまって……。」
顔を伏せて答える。
たった一人で旅してきたと言うよりは真実味があると思うし、骸を弔うと言い出されないようにずいぶん前と証言した。
背を向けている大柄さんの表情は伺えないけど次の質問が来ないのだから信じたのだろう。
「鮮血の子って何ですか？」
「災いを招く忌み子だ」
問いかけると私の右隣にいた狩人Ａが忌々しそうに吐き捨てた。
やっぱりそうか。
カーリンが追われる理由は分かった。
忌み子を殺さないと村に災いが起こる。だからカーリンは村に住んでいないし警戒している。
鮮血の子という名称から考えるとカーリンの赤毛赤目が忌み子の

証だろう。
目が開いた赤ん坊の時点で殺されそうなのに、よく今まで生きてたものね。
疑問をぶつけてみると大柄さんが肩越しに振り返った。
「村の掟で十歳を過ぎるまでは処分できないんです」
処分……。
腹の立つ言い回しだこと。あんた達こそ梱包して地獄宛に郵送してあげようか？
咳払いして攻撃的な思考を追い払う。
せっかく巧く村に潜り込めるのに自分で台無しにしてどうする。
ようやく見えてきたのは陰気な小屋に人が出入りする規模の小さな村だった。
村の奥には不釣り合いに立派な石作りの神殿が建っている。
大柄さんが他のメンバーに指示を出して周囲の警戒に当たらせる。
「こっちに来て……あぁ……下さい」
無理して丁寧な言葉使いをしなくても良いのに。
見ていて楽しいから放置に決定。
大柄さんに案内されて村を観察する。
村人は痩せている。やつれていると言ってもいい。
畑にもちらほらと芽が出ているのが見える程度。冬だからかと思って民家をちらりと覗いてみる。
ひどい有様ね。
男性が横たわっている。すえた臭いが漂ってきて鼻を押さえたくなった。
今は非力な子猫の皮を被っているので自重する。
見たところ食品がないのは村全体の分をまとめて管理しているか

らかな。
大柄さんと少し距離が開いたのに気付いて小走りに追いつく。
この村は活力とか生気というものを感じない。
内部の不満をカーリンを使って逸らしているのかもしれない。
考察している内に目的の家に着いたらしい。少しだけ他より大きな家の前で大柄さんが立ち止まった。

「村長、ただいま戻りました」

大柄さんが戸を開けて私を中に通した。
白髪の痩せたお爺さんが私を見て目を丸くした。
心臓が少し心配になる驚きようだ。
気付かれたのだろう。私は怯えた振りをして大柄さんの後ろに回る。
大柄さんが怪訝な顔をしたがすぐに報告を始めた。
魔物に私が捕まっていた事、鮮血の子との遭遇、鮮血の子が子供を連れていた等、詳細で要点を押さえた報告だった。
大柄さんはかなり有能らしい。

「ーーふむ、分かった。お前は警戒に当たれ。魔物狩りは明日にしよう」

村長は大柄さんに命じた。出ていくように目線で指示している。
だが、大柄さんは私を横目に見た後、意を決したように村長を見返した。

「村長、この方なんですが……。」
「安心せい。育ちが良い事なんぞ見れば分かる。何十年村長をやってると思っとる」

私はお世辞にも育ちが良いとは言えないと思うけど。
大柄さんは頷いて村長と私に一礼した後、出て行った。

「さて」

村長が盛大なため息を吐いた。

「魔王が村に何のようかな？」

私はその言葉に子猫を被って微笑んだ。

四十二話　交渉

村長は私の笑顔に眉一つ動かさなかった。
相応に胆力があるのだろう。

「私の正体を知ってたのね」
「今朝になって騎士団から知らせが来たからな。村の者に伝える前に乗り込まれたのは予想外だったが……。それより、こんな小細工をしてまで村に入る必要があったのかね？」

あったのよ。
直接村に来るとカーリンに殺されるからね。
私は無言で来客用の上等な椅子に腰掛ける。
大柄さんを遠ざけたくらいだから村の戦力では私に敵わないと悟っているのだろう。
実際のところ、私には人と争うと激痛が走るハンデがあるから一概には言えないけど、村を破壊し尽くして逃げるくらいは出来る。
さて、交渉開始といきますか。
脅しとも言うけど。

「買い物がしたいの」
「……なに？」

村長が肩すかしを食らって呆けたのに構わず私は銅貨の詰まった皮袋を投げ渡す。

「相場より少し高くても良いよ。村も裕福とはほど遠いようだし、断る理由はないよね？」

銀貨も五枚取り出して渡す。
こんな寂れた村にまで連絡が来ているのだからこの先、街に入ったりするのは難しいだろう。
だからここで必要物資を買いそろえたい。
お金の真偽を確かめた村長が頷いた。

「何がほしい？」
「服とか色々」

私が言った物を羊皮紙に書き出した村長が価格の計算を始めた。
暇つぶしに部屋を眺めても面白い物が見つからないので窓に近づく。
木の戸を開けてみると石作りの神殿と向かい合っていた。

「立派な神殿ね」
「皮肉か？」

そんなつもりは無かったけど、期待されると皮肉の一つも返したくなるね。

「信心が足りていればきっと魔王からも救ってくれるよ」

魔王と取引する人が信心深いかは兎も角ね。
村長は鼻で笑った。

「なまじ立派なばかりに頼ろうとしよる。おかげでこの有様じゃ」

村の惨状を言っているのか。

「信じるばかりで努力をせん。土地は痩せ、村を別へ移したいが皆

神殿に心捕らわれとる」

口調から察するに、かなり不満が溜まっているらしい。

村を捨てないようにするための信仰が今は後ろ髪と足を引っ張っているわけね。

カーリンのような忌み子を作り出して嫌悪する文化レベルならそうなるでしょうよ。

信仰なんて道具は使える人と使われる人がいる。この村の大半が後者だっただけの話。

おそらく村長も百も承知で今まで誰にも不平不満を漏らす事が出来なかったのだろう。

「邪魔なら壊しちゃえば？」

「魔王らしい考えだが、それをしたら皆が儂を恨むだろう。儂は村を潰したいのではなく移したいのだ」

ままならないね。

「カーリンに恨まれるのは平気なくせに……。」

私の呟きが聞こえたのか村長の手が止まる。

顔を上げて腕を組んだ村長が私を見て、窓を顎で示す。

閉めろと言いたいの？

とりあえず木の戸を閉めてみる。

「その名を誰から訊いた？」

……面白い事になった。

カーリンの名を口にしてはいけない掟があるのか、さもなければ名前を知っている人間が限られるのか。

「誰に聞いた？」
「言わなくても分かるでしょ」
質問を繰り返した村長に意味深長に返す。
村長はこれ見よがしに舌打ちした。
「あの馬鹿者共が……。」
思わず吹き出す。
目でこちらを伺いながら言ったら鎌を掛けているのが丸分かりよ。
「へぇ。名前を言っちゃいけない掟もあるんだ？」
掟が、ではなく掟も、と言うと村長がため息を吐いた。
「本人から聞いたのか」
「自己紹介してきたよ」
私は名乗ってないけどね。
村長は暫く羊皮紙を見つめていたと思うと唐突に立ち上がって廊下で人の有無を確認すると部屋の鍵を閉めた。
なるほど、カーリンの事は誰にも聞かれたくないと。
村長にならって窓の外に誰もいないのを確認して再び木の戸を閉じる。
「カーリンと何を話したんだ？」
「クルトについて教えて」
村長の質問なんて無視だよ。

悔しかったら解決してみろ。
土魔法で作った岩の椅子に腰掛けて足を組む。
村長は顔のパーツを一切動かさずに思案した。
なんて完璧なポーカーフェイス。札束で叩いたりしても反応無いのかな。
驚かしてやりたい。凄く。

「クルトに会ったのか？」
「会ったよ」
「そうか。生きてたか」
「生きてたよ。二日前に死んでたけど」

上げて、落とす。突き落とす。
村長は顔色一つ変えなかった。

「カーリンのそばに子供がいたと聞いたが、名は分かるか？」

蘇りの事を知ってるな。

「名前を予想できる人はあなた以外に何人いるの？」
「いない。その口振りだと子供はクルトだな」

村長だけあって頭の回転が早い。話がスラスラ進む。

「クルトはカーリンの何？」
「友人、理解者。儂がなれなかった何かだ」

随分と暴露するのね。
私は片手をあげて村長を止め、家周辺の魔力を感知する。
万が一にも聞かれるとまずい。

村長も私の懸念を理解したのか黙って頷いた。

「魔力の扱いに長けとるようだな」

「魔王なんてやらされてるからね。それより、クルトは何時までこの村にいたの？」

「三十日前かそこらだ」

質問が来ない。

予備知識で不明点を埋めたのね。

逆に言えば予備知識があれば状況を把握できるという事か。

私は今まで得た情報でそれらしいシナリオをでっち上げてみる。

出来上がったものは神が手を出すようなストーリーには思えない。

まだ何かピースが足りないのか。

見落としを探すと一つだけ、ピースか否か分からない物があった。

「記憶はどうなるの？」

カーリンの理解者だったクルト。

今の彼にその記憶はない。

あれば牛頭を怖がらない彼がカーリンを怖がって逃げたり、『お姉さん』と呼ぶはず無いもの。

同様にカーリンがクルトの周りを土の魔力で囲むはずもない。

「随分と熱心だな？」

……乗せられてた。

言われてみれば私がこんなに熱心に聞くのは不自然よね。

「魔法陣や詠唱に興味があるの」

嘘を吐くコツは真実を混ぜて堂々とすること。
村長は私の真意を測るように見据えてくる。

「魔法なら儂が教えよう」

村長が重苦しく言う。
今度は私が村長の真意を測る番だった。
揺らがない村長の目に嘘はない。
それが尚更、不気味。

「何のつもりよ？」
「交換条件だ」

村長が提案した条件は私がいないと成功し得ない物だった。
思わずお腹を抱えて笑ってしまう。
あの立派な神殿で説くのは他力本願かな？

「神が神なら崇める奴も似てくるのね」

笑いすぎておなかが痛い。目尻に浮かんだ涙を拭って私は立ち上がった。
握手を求める。村長はすかさず応じてくれた。
村長の手は骨と皮ばかりのかさついた手だった。
契約成立ね。
カーリンには死んでもらいましょう。

四十三話　開発

「つまり、カーリンが使った魔法陣は術者の命を代償に他者を蘇らせる物なのね？」
「あぁ。一日につき一歳成長する。記憶も同様だ」
私が書き写した蘇りの魔法陣を片手に村長が言う。
「ただし、術者の記憶は古い物から一日づつ消えていくようだ」
村長が言うのにはこの魔法陣はどこにも存在しないオリジナル。
鮮血の子が忌み嫌われる理由は命を扱う魔法を生まれながらに知っているからだそうな。
「カーリンが扱える魔法陣は恐らくこれだけだ」
「彼女、魔力を掌握する詠唱をしたけど？」
あのずるい魔法。
「儂が以前、魔物相手に使った詠唱だな。いつの間に……。」
あんたの仕業か！
胸ぐら掴んで怒鳴りつけてやりたい。子供になんて危ない物を教えるのよ。
言ったら私が教えてもらえなくなるから言葉を飲み込む。味は最悪。胸がムカムカ。
「クルトは何歳なの？」
「今年で十五だ」

今日で既に二歳だから記憶を完全に取り戻すまで残り十三日になる計算ね。
カーリンの余命も二週間切ってるのか。

「となると十日くらいで魔法を教えてくれるの？」
「基礎中の基礎だけなら何とかなるだろう」

私を伺うように村長が見る。
心配しなくても契約破棄にはならないよ。
私も基礎が精々だろうと思っていたから問題ない。

「なら早めに始めましょ」

私は村長を促して家の外に出た。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

交渉成立から十一日が経った。

「これが魔力隠蔽」

私は本に書いてあった図を思い浮かべて魔力で作った魔法陣に描く。
それを発動してみると魔力が感知できなくなった。
……術者の私ですら魔力が感知できなくない。

「隠蔽の術式が大きすぎたようだな」

村長が腰に手を当てて原因を言う。
言われなくても分かる。失敗したのは私だから文句も言えない。

「難しいね」

だから素直に落ち込んでみた。
しかし頭の中では術式の大きさを計算し直す。
諦めが悪いのは美徳なのよ。
そんな私に対して村長は首の裏を掻いて呆れ顔を見せる。

「天才と呼ばれる魔法使いが一生かけてするもんだ。新たな魔法陣の開発なんてのは、な」

私は五日間で既存の魔法陣を全て扱えるようになった。
魔法使いが数年かけて覚え、正常に作動させるのにさらに数年かかるらしいので驚異的なスピードとのこと。
魔法陣を構成する隠蔽などの効果図は私にとっては複雑な漢字を覚えるのと大差がなかった。
けど、魔法陣や効果図の位置と大小で範囲や威力が変わるのが問題になった。
おかげで開発が進まない。

「無理に魔法陣を開発せんでも、既存の魔法陣を使えばよかろう？」
「駄目ね」

どの魔法陣も構成が単純なのよ。
技術として広める内に簡略化が進んだのだろう、それは良い。
でも戦闘に使えば攻撃の範囲や効果、威力までも相手に悟られてしまう。

軌道が読めない分、今まで使っていた単純な魔法より避けにくいし複雑な効果を出せるけど手の内を晒す欠陥品。
私は相手に対策を取らせない攻撃方法が欲しいのよ。
再び隠蔽の効果図を組み込んだ魔法陣を水の魔力で描く。
足下に広がる青い魔法陣、これを隠蔽できればいいけど理論上どうしても無理なので諦めている。

「明日が本番だ。ほとほどにしておくように」
「村長こそ、ちゃんと寝ておきなさいよ」

村長が家に入ったのを見て、私は描きかけた魔法陣を消去する。

「実は新魔法陣は幾つか完成しているのでした」

効果を悟られない魔法陣として私が考えたのは二通り。
村長の前で練習していた、本命の魔法陣を別の魔法陣で隠蔽する平行発動。
二つの魔法陣を維持するのにかなりの集中力がいるので使いこなすのは至難の業、戦闘時には激痛で神経が削られる私には到底扱えないだろう。
周りに誰もいないのを確認して、私は魔法陣を展開する。
私を囲むのは円ではなく球の魔法陣。
見ても理解できない魔法陣を作ろうと思ったらこうなった。

「それにしても、調子に乗りすぎたなぁ」

魔法陣の平行発動は両手で別の絵を描いているようなものだから、どうしても細部が甘くなり誤作動する。
けれど球形魔法陣は構造が複雑なだけで慣れるのは早かった。
私は展開した魔法陣をバレーボール程度の大きさに縮める。

平面から立体になったことで魔法陣を構成している術式の相互作用が強まるまではよかった。
困っているのはその威力。
試しに風の魔力をそそぎ込む。単純な魔法で使えばそよ風が起きる程度の可愛い量だ。
発動すると春一番が吹き荒れた。
それなりに太い枝をしならせた木々が抗議の葉擦れを起こす。
ざわざわとうるさい事この上ない。

「やっぱり、変換効率がおかしい」

原因は分かっている。
魔法陣を描いている魔力まで発動エネルギーになっているからだ。
おかげで円形の倍近い威力になっている。
この複雑な魔法陣の構築をミスしたらと思うとぞっとする。
私が間違えずに構築しても相手が魔力を奪いにきて魔法陣が崩れたら……。

「あぁ、やだやだ」

制御技術には自信があるけど、球形魔法陣は奥の手にしておこう。
私は一通り球形魔法陣を試してから村長宅に足を向けた。

四十四話　追い出す

交渉成立から十二日目の朝を迎えた。
貧相な家の屋根から小鳥の鳴き声が聞こえてくる。
私は窓に腰掛けて村を見下ろした。後ろでは村長が武器の点検をしている。

「皆の様子はどうだ？」
「いつも通りに神殿に向かってるよ。今日もずっとあの中でしょうね」

農民なのだから畑の様子を見に行く方が良いと思うけど彼らは毎日あの調子。
一日のほとんどを神殿で過ごして畑の世話もしていない。

「神に祈れば作物が実ると本気で思ってるのね」

怠け者の神が人なんかいちいち助けるものか。
頼るより先にやることがあるのよ。
私が見守る中、老若男女ほぼ全ての村人が神殿に膝を突いて祈った後、中へと入っていく。
全員が中に入って、しばらくしたら作戦開始だ。
私は部屋の中へと視線を移す。
村長が武器の点検を終えて仕舞い始めていた。

「やめるなら今の内よ？」

一応、心変わりしていないか聞いておく。
村長は無言で最後に残った武器へと手を伸ばし、それを壁に立て

掛けた。
　ようやく私を見た村長が少しだけ笑う。いつものポーカーフェイスは消え、かわりに浮かんだその笑みは苦い物が混ざった不格好な笑顔だった。

「笑うか泣くか、どちらかにしなよ。みっともない」

　とはいえ、心中は察するよ。
　村長は綺麗に背筋を伸ばして私に対して深々と頭を下げた。

「儂は行く。……計画通りに頼む」
「旅路を祝福するよ。神に代わって、ね」
「御利益はありそうだ。少なくとも背を押してくれる」

　村長は心のどこからか引っ張り出してきた精悍な顔で家を出ていった。

「見栄っ張り」

　神殿へ入っていく老いた背中に私は愚痴る。
　すぐに行動を開始する訳にもいかず、紅茶を淹れてカップに注ぐ。
　来客用だけあって美しい絵柄のカップに湯気が立つ。

「うん、美味しくない」

　時間も経ったし、背中を蹴り飛ばしに行くとしよう。
　カップをおいて、私は家を後にした。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

阿鼻叫喚のるつぼというのは外から見ると娯楽になるらしい。
拠り所にしていた神殿の屋根がいきなり吹き飛んだのだから、村人達には同情を禁じ得ない。
心の内で合唱する。
犯人は私だけど、計画は村長だから苦情はそちらにお願いするよ。
私は風魔法で空を飛び、吹き飛ばした屋根から神殿内部に入り込む。
幾人かの村人が気付いて見上げてくる。
神を模したらしい石像の頭に着地した私は早速、魔法陣を展開した。
頭上に現れた巨大な魔法陣にギョッとしている村人達に冷笑を浮かべて宣言する。

「泣け、叫べ。喚いて祈って、絶望しろ！　魔王の前では神なんて無力なのよ！！」

全身を縛る痛みさえなければもっと気の利いた台詞が言えるのに、残念ね。
私を村に案内した大柄さんがあんぐりと開けた口に向けて魔力レールを敷いてやる。
それに驚いた大柄さんは慌ててレールから逃れた。

「あぁ神よ……！」

入り口にほど近い場所にいたおばさんの言葉を皮切りに村人が次々に同じ言葉を口にする。
私は踏みつけた神様らしい石像を平手でぺちぺち叩いてみせる。

「ははははっ。冷たくなってますけどぉ？」

顔を青くする者と赤くする者。

さっさと神殿から出ていきなさいよ。

現実的な若者を含む数名が泡を食って逃げていく。

村長が避難誘導をしているのが見えた。

私は展開した魔法陣に水の魔力を込めて発動する。

二重螺旋を描く水流が神殿の壁を穿ち穴を開け、それに飽きたらず壁向こうの民家を半壊させた。

「皆外に出ろ！」

村長が老人とは思えない大声で叫び、腰が抜けている老婆を立たせている。

未だに神殿内は二十人近い村人がいるのを考えると長引きそうだ。

余りにまどろっこしいので手伝ってあげよう。

神殿入り口の壁に狙いを定めて魔法陣を展開、発動させる。

人の背丈ほどもある鉄杭が数本、壁を貫く。

入り口が三つ増えた。

次いで水魔法を使って全員を押し流すために魔法陣を形成する。

構築した魔法陣で私の意図を察した村長が即座に土魔法で壁を生み出し入り口への通路を作りだした。

頭の回転が早いから連携が取りやすいよ。

魔法陣が青く輝き神殿内部を大波が洗う。

もみくちゃにされた村人達が入り口から大量の水と共に流れ出た。

いち早く神殿を出ていった若者達が武器を持って乗り込む寸前だったこともあり、外は大混乱だ。

私はそんな彼らの頭上を飛び越えて民家の屋根に降り立ち、哄笑を響かせる。

「ちくしょう！」

狩人Ａが弓を引き絞る。

放たれた矢は私が巻き起こした突風に煽られて狙いが逸れ、見当違いの方向へ消えた。

「下手っぴ！」

口元に手を添えて即席メガホンを作ってからかいの言葉を放つ。

村長が子供や老人を山へ向かわせているのを横目に、私は村人の様子を確認する。

計画通りに死者は出ていないものの、ここから先は私も命懸けだからどうなるやら。

どのみち、村長が戻って来るまで血気盛んな男共と喧嘩するのは避けられない。

私は各々の武器を手にして集まってくる二十数名の男達を見渡す。

全員魔法を使えないと聞いたけど、やはり数が多い。

殺しはしない。でも何人か大怪我しても良いらしいから、上手く立ち回ろう。

私はありったけの魔力を身に纏い、地面に飛び降りた。

「虐殺初心者です。よろしくお願いします」

文字通り、村から叩き出してあげるよ。

四十五話　美麗

最初に倒すべきは弓矢を持っている三人だと私は判断した。
魔力を掌握しているから拳大の飛来物まで見なくても反応出来るけど、対処が間に合うかは別だもの。
私は民家を水魔法で瓦礫の山に変えて風の魔力で包み、瓦礫ガトリングを撃つ。
久々に派手な技を使えて爽快な気分だけど、手加減というのは存外に難しい。
弓を一つ折っただけで他は外れてしまった。
人に直撃しなかっただけましかな。威力は落としていたけど骨が折れるだけで済むか自信がなかったし。

「バラけて囲め！　固まってると避けらんねぇぞ！！」

大柄さんの指示に応じた何人かは私の後ろに回り込む。
しかし、十人以上が瓦礫ガトリングの威力に足が竦んでいて動けない。
この機を逃さず未だに残っている弓を壊しておこう。
私は足元に円を広げる。次第に大きくなっていくそれは彼らも範囲に収める広大な魔法陣。

「避けられるかな？」

魔力消費の激しい隠蔽は抜きの命中率重視の魔法陣だ。
作動させた瞬間、無数の魔力レールが生まれて弓に絡みつく。持っている狩人Ａ達がレール上から弓をずらそうとする。

「無駄だよ」

私は火球を乱舞させ、優位性を誇示しながら告げる。
この魔法陣は範囲内での絶対命中を実現する効果がある。
範囲内においては無数の魔力レールが即座に軌道を修正するのだ。
魔法陣から出るか攻撃が当たる瞬間に大きく回避するしか逃れる術はないよ。

「弓を捨てて回避！　他は瓦礫を蹴りつけて注意を削げ！！」
「甘いのよ」

私の言葉は突風で掻き消え、男達が蹴った瓦礫は吹き下ろす風に煽られてむなしく落下した。
同時に手放された弓が火球に飲み込まれて消し炭となる。
余りにも一方的で我ながら恐ろしい。
私ですらこのレベルなのに、百戦錬磨の魔法使いなんていたら軍隊相手にできそうね。
魔力の掌握範囲が狭くても道具や詠唱でカバーできるからハンデにはならない。
騎士団を相手にする時は真っ先に魔法使いを潰すことにしよう。

「か弱い女の子一人に武器を持って取り囲むなんて危ない趣味だね。矯正してあげるよ」

土の魔力で作った魔法陣を発動する。
鉱物の混合した岩ではなく、純度の高い一メートル程の鉄の棒が二本生み出され私の左右に並ぶ。
魔力の変換効率が悪い形成と抽出を行う魔法なので殺し合いには使いたくないけど今回はいい練習になる。
時間稼ぎと手加減を両立できるお手軽な魔法だね。
魔力レールを敷いて鉄棒をバトン代わりに弄びながら私はまず大

柄さんを指差す。

「どれにしようかな、天の神様の言う通り」

リズムに合わせて振り向けられる私の指先を戸惑いの表情で見ている男達。

途中で襲いかかってきたらへそを曲げたフリでなぶる気でいたのに。

「ーーまずは君に決定！」

当選した筋肉達磨さんに拍手する。

覚悟した顔で剣先を向けてきたところを見ると意図は伝わったらしい。

大柄さんが援護を指示する前に筋肉達磨さんとの距離を詰め、右の鉄棒で剣を跳ね上げる。

がら空きのわき腹にすかさず左の鉄棒を打ち込むが筋肉達磨さんは見た目を裏切る俊敏な動きで剣を返して防ぐ。

金属がぶつかる甲高い音とあがる火花。

「素晴らしい反射神経ね」

これ程の実力者なら怪我させるだけでも全体の士気に影響しそう。

そう思って左の鉄棒で競り合う。鉄棒が剣を押し退けて進む様を強くイメージする。

「クソっ、なんて馬鹿力だ！」

失礼な。私は手を使っていない。

イメージと魔力制御で対抗してるのよ。

このまま拮抗するかと思っていたら背後から誰かが走り込んでくるのを魔力で感知して横に飛ぶ。
私のいた空間を剣が裂き、両断された空気が鈍い悲鳴を上げてそよ風となり私の頬をかすめていく。
風の魔力を利用して後ろに飛び、怯えていた小心者の顔面を踏み台に跳躍する。
近接戦はリスクが大きいようだ。
とはいえ、遠距離攻撃していたら片が付いてしまう。

「……安請け合いしなきゃよかったなぁ」

今さら後悔しても仕方がない。
訓練だと割り切って私はむさ苦しい男共に殴り込んだ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

村長が一人で村に戻ってきた。
村人を山に避難させ終えたのだろう。
二十人を越えていた男達は軽傷十三名、重傷七名となっている。
他は巻き込まれない位置でびくびくしていたか、重傷者を背負って逃げていった。
死者は出ていないし重傷者も四肢の骨折や切り傷、小さな火傷だから命に別状はないはず。
狩人Aが怪我の適切な処置を理解していたのもあって少し暴れすぎた感はあるけど誤差範囲よね。

「村長が来たから遊びは終わりだね」

村長が魔法使いなのは村の全員が知っている。
ここからは魔法の撃ち合い、それも十メートルの掌握範囲を持つ強力な魔法使い同士の戦闘だ。
こんなちっぽけな村、五分で消滅する。巻き込まれた者も同様だ。

「皆、山に逃げよ。昼までに儂が帰らねば街にゆけ。金はありったけ渡してあるからしばらくは保つだろう」

村長が山から引っ張って来たらしい魔力を維持しながら大柄さん達に言う。
狩人Aが反論しようとするのを強い眼光で封じ、大柄さんに後を託す。
大柄さん達も私が手加減していた事に気付いているのだろう、重傷者に手を貸して村の出口を目指し始めた。
私はそんな彼らを丸ごと飲み込める巨大な火球を用意する。

「逃がさないよ！」

私が放った火球は村長が生み出した水の龍に丸飲みにされた。
ここは後世に残るくらいに華々しく送り出して上げよう。

「これなら、どうかな？」

私が持つ中でも最も絢爛豪華な見た目を出す魔法陣を展開する。

「ーー！？」

村長を含め、全員が絶句した。
良い反応だ。その顔が見たいが為に作った趣味の逸品だもの。目に焼き付けておきなさいよね。

全種類の魔力を混合して発動する球形魔法陣。
色とりどりの魔力が紡ぎ出すのは球形魔法陣だからこそ出来る極端に複雑な芸術作品。
村長達もこの破天荒な魔法陣にリアクションがとれないでいる。
ただ呆然と見惚れるばかりだ。
というか、これを実際に発動させたら村長でも防ぎきれないの。
早めに逃げてくれないかな？
村長も魔法陣の異様さに飲まれかけていたけど遅ればせながら事態の重大さに気付き、演技ではあり得ない土気色の顔で大柄さん達を振り返る。

「さっさと逃げんか、たわけ！！」

余裕を無くした村長が怒鳴り、大柄さん達が肝を潰して走り去った。

四十六話　信仰

私は焼け残っていた村長の家で紅茶を飲んでいた。
カップを置いて窓の外を眺める。
村人達が逃げ去った貧相な村はやけに広く見えた。
部屋の扉が軋んだ音を立てて開く。

「立体の魔法陣なんぞ、夢想すらせんかったわい」

部屋に入ってきた村長が苦虫を噛み潰したような顔で言う。
私が想定以上に強くなって後悔しているのだろう。
何せ私は魔王だから。

「手伝ってあげたのに感謝の言葉もないの？」
「ありがとう。これ以上ないほど絵になっておったよ」
「村長こそ。みんなを逃がすため村に残る決死の立ち姿、惚れ惚れしたよ」

感謝と共にお褒めの言葉も頂いたので、貰いすぎた分をきっちり返す。
村長は力無く首を振り、椅子に腰掛けた。

「お金は全部渡したの？」

どうせ使う機会もないから私の所持金を全て村長に寄付してあった。

「あぁ。金貨も含めて全てな」

それはそれは……。
堕落したり使い込んだりしないと良いけど。
私の集めたお金だけで村人全員が半年近く質素に暮らせるはずだから、どこに行ってもそこまで邪険にはされないはず。
人は自分に迷惑がかからない範囲で人助けをする生き物だと村長もよく分かっているのだろう。
私は青い空を暢気に泳ぐ雲を目で追いながら話を変える。

「明日の夜に次の契約を履行するけど、良いのね？」

明日の夜にカーリンは寿命を迎え、クルトが記憶を完全に取り戻す。
土壇場になって辞めると言い出されても面倒なので、この場ではっきりさせておきたい。
村長に視線を移して瞳に揺らぎが無いのを確かめ、私は窓から離れた。
本当に、意地っ張りだね。

「魔王よ」

部屋を出ようとする私は村長に呼ばれて振り返る。

「何故、手を貸してくれるのだ？」
「魔法を教えてもらう代わりに協力する約束だったでしょ」

即座に返した私に村長は薄く笑った。

「もはや儂を凌ぐ実力を持っとるのに裏切らんのだな……。」
「契約ってそういう物よ」

何を当たり前のことを言っているのか。
魔王だから信用されてないとしても、裏切られない限りは手を尽くして成し遂げるに決まっている。

「村長こそ、裏切らないの？」

私は魔王だ。
後ろから刺したところで喝采は受けても非難されはしないだろう。
私と手を結んでまでカーリンにこだわる理由が分からない。

「持ち掛けたのは儂だ。メリットも多い」
「メリット？」

これからの計画を客観的に見ても、村長には何一つメリットが無いと思う。
デメリットしかないような気さえする。

「長くなる。話すこともーー」

ない、と言いかけた村長は私が土魔法で椅子を作ったのを見て苦笑した。

「私の経験上、死ぬ前には語る事の一つくらいあるものよ」
「まるで死んだことがあるような言い方だな」

経験済みなの。
人生経験が豊富で嫌になっちゃうね。
椅子に浅く腰掛けて膝に頬杖を突く。
村長は私が聞き終わるまで出て行かないと判断して窓の外、壊れた神殿を眺めた。

「処刑される直前のカーリンを牢から外に出したのは儂だ」

遠い目というのを初めて見れるかと期待したけど、そんな事はなかった。

村長は飲みかけの紅茶に口を付ける。

それ、私の飲みかけだけど。まぁいいか。

「儂が村長として仕事をしようと、感謝されるのは神だけだった」

「感謝が欲しかったの？」

首を傾げた私に村長は妙な視線を寄越した。

わからんだろうな、とでも言いたげなそれに私は頬を膨らませてやる。

怒りアピールが功を奏して村長は視線を再び神殿に戻した。

「昔々、儂が子供の頃に旅人がやって来た」

唐突に話が変わった。

年寄りめ。ボケたか？

睨む私を気にも止めずに村長は続けた。

「旅人が語る中に異国の騎士物語があった」

あらすじを訊いてみる。情けないひ弱な騎士が人知れず魔物の群に立ち向かう話だった。

「『誉れはいらぬ、いさおしを謡われずとも我がなすことの意味は変わらぬ』子供心に響いたものだ。おかげで魔法を学んだ」

男の子だなぁ。
私が呟くと村長は照れくさそうに頭を掻いた。
「だが儂は物語の騎士より欲が張っておったようだ。人生が無駄ではなかったと思いたかった。故にカーリンを助けた」
自分を誇る為に助けた訳ね。
底の浅いプライド。
私の評価に村長は自嘲気味に笑った。
「村の皆に何も言えんかった事を言っとるなら言い返せんな。儂は保身に走ったのだから」
カーリンを本当の意味で助けるなら村人に差別を止めさせる必要があった。
それをせずにただ逃がしても対症療法でしかない。
「では、魔王ならどうする？」
「村で自分が育てるよ。そして毎朝神殿で祈らせる」
形だけでも神の庇護を受ける者にしてしまえばいい。
「それでも何かする奴がいれば罰当たり者として神にご報告するのよ。村のみんなの前で、ね」
村長が目を見開いた。
「神を……信仰を道具にするか。それこそ罰当たりであろう」
「馬鹿ね。神は待っていても助けてなんかくれないの。あいつの重い腰が上がらないなら引きずり出すまでよ」

渋々納得した村長は一転して愉快そうに笑った。

「儂も信仰に踊らされていたか」

「みんなとステップが違っていたけどね」

話は終わりだ。

私は立ち上がって今度こそ部屋を出る。

牛頭は心配しているだろうか。

四十七話　クルト

村の入り口にカーリンの姿を見つけた。隣には青年がいる。
順当に考えてクルトだろう。すっかり大きくなっちゃって、もはや可愛さの欠片もない。
遠目に見る限り揉めているようだ。

「カーリン、久しぶり！」

私は大げさに手を振ってカーリン達に駆け寄る。
カーリンは私の姿に焦っていたけど、配慮してあげる謂われはない。
嫌がらせを兼ねて満面の笑顔を浮かべる。
突き飛ばされた時の痛み、忘れてないよ。
背を向けていたクルト青年は近づいて来た私にようやく気付き一瞬だけ戸惑ったものの、すぐに私の肩を掴んできた。
クルトは力の加減を忘れているらしく、掴まれた肩が凄く痛い。

「……星になぁれ」

魔法陣を展開しクルトを空に高く舞い上げる。
私はか弱いのだ。大事に扱え。
カーリンが空に浮かぶクルトを見上げてあたふたしている。いつもの冷静で冷徹なイメージが崩壊している。

「マオウ！　クルトを下ろしなさい！！」

耳元で怒鳴らないでよ。
私は魔法を操ってゆっくりとクルトを地面に下ろす。

「落ち着いた？」

取り乱していたのはきっと焼け残った村を見たからでしょうけど、動転し過ぎよ。

「村ならこの通り、今は人っ子一人いないよ。神殿も原形を止めてない」

ここに来るまで家を回って確認したから間違いない。

村長も今は森に入っている頃だ。

「君は誰だ？　村に何があった？」

記憶がないのか、単純に覚えてないのか。

カーリンに丸投げしたい誘惑に駆られつつ私は肩を竦めた。

「私はカーリンの知り合いよ」

村に何があったかは見ての通り、と私は旅行ガイドよろしく村を示す。

右手をご覧下さい。お客様、生命線が短くていらっしゃる。十六年ほどの寿命ですね。

クルト青年は焼け残った家を見て回る事にしたらしい。ヨロヨロと歩き出した。

カーリンが声をかけようとして、言葉を見つけられずに押し黙った。

「……あの人ってクルトなんだね？」

私はそんなカーリンの耳元で囁く。
カーリンの肩が跳ねる。
その様子に私の心の片隅で頭をもたげた意地悪な小悪魔にご退場願いつつ、埃を被って眠り転けている保護欲旺盛な天使を叩き起こす。
起きた天使の翼は真っ黒だった。きっと埃のせいね。

「クルトの事を詮索するつもりはないけど、早く手を打たないと逃げた村人を追っていきそうだよ」

話の分かる天使なお姉さんを装ってカーリンの背を軽く押す。
よくよく人の背中を押す日だ。
カーリンは私を疑うように一度見て、クルトが入った家へと走って行った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「はい、お茶だよ」

村長の家でカーリン達にお茶を出す。
カーリンはクルトの袖を掴んでいる。
クルトは一通り部屋を見回して不在を確かめると肩を落とした。

「村を捨てるために村長と私で一芝居打ったのよ」

村長との契約を半分だけ教えて村で私がした事と一連の流れを告げる。
重傷者を出したのは秘密にした。

私が村人に怪我をさせたと聞いたクルトが殴りかかってきそうだもの。
村長からクルトの人柄は聞いている。
カーリンが村で暮らせるように村人を説得した唯一の人物。

「村長が本当にそれを望んだのか？」
「信じなくても良いよ。ただ、村人を追いかけるつもりならカーリンを連れて行くのはダメ」

神殿が無くなって村人は情緒不安定になっている。
災厄を招く忌み子が来たらどうなるか、想像すればいい。

「ただの思い込みだからこそ、簡単には覆らないの。カーリンが大事なら村人は諦めなよ」
「両立できるはずだ！」

クルトが机を叩いて立ち上がる。
カップから紅茶が零れて机を濡らした。
やっぱり、まだ最後の一年の記憶がないのか。
私はクルトの瞳を真っ向から見つめ返す。

「村人を説得するつもりなら明日にしなさい。私が魔法で運んであげる。どの道、今は村のみんなが混乱していて感情的になり易いの。カーリンが大事なら少しでも安全な道を選ぶべきよ」

額が当たるギリギリ手前まで顔を近づけて睨む。
その後もクルトは反論したものの、私に正論をぶつけられている間に頭が冷えてきたらしい。
力を抜いて椅子に腰掛けた。
カーリンが労るように背中を撫でている。良いお嫁さんになるね。

生きていれば。

「話は纏まったね。それじゃあ、今日は村人達を説得する方法を考えなさい。カーリンもね」

カーリンはどうせ諦めているけどクルトと一緒に何かさせておくのが良いだろう。

カーリンが付いていれば勝手に村人を追う心配もない。

「私は牛頭を探してくる」

窓の外を見るとすっかり日が昇っていた。

二人のせいで再会が遅れてしまった。どうしてくれる。

「暇だったら家を回ってお金とかを回収しなよ。私達が留守の間に野党に盗られるのも間抜けでしょ」

保険に仕事を与えておいて私は今度こそ村を出た。

四十七話　クルト（後書き）

次の更新は１１月２日になります。

四十八話　料理

牛頭が河原に佇んでいるのを見つけた私は手を後ろで組みながら近づいた。
牛の頭をあちこちの枝に実らせたこの魔物には死角が存在しない。
私が声をかけるまでもなく牛頭は私を見つけて身じろぎした。

「魔王、おかえり」
「ただいま。ハグしてほしい？」

欧米的な嬉しい再会の感情表現。偏見かもしれないけど。
私に向き直った牛頭を伺うように首を傾げてみる。

「必要、ない」
「つれないこと言わないの」

指先で幹をつつく。相変わらず突き指しそうな硬さ。
戯れを続けようとした時、枝に引っかかったウサギの毛皮が視界に入った。
最後に見てから十三日もの時を経て尚、枝に引っかかったままというのは考えにくい。
雨の日もあったし、嵐と評していい日もあった。
私の視線を追ったらしい牛頭がウサギの毛皮を差し出してくる。
……傷むどころか大して汚れてもいない。せいぜい泥が跳ねている程度ね。

「魔王、嬉しそう」
「うるさい。村に行くよ」

太陽の匂いがするウサギの毛皮を胸に抱いて来た道を戻る。

「顔、赤い」

「うーるーさーい」

道中ずっと牛頭が体調を聞いてくるので耳を塞ぎながら歩く羽目になった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

牛頭を見たクルトがカーリンを背中に庇って私達に対峙する。

私と別れた後の牛頭は河原で過ごしていたそうだから、クルトには牛頭に関する記憶がないのだろう。

この状況はある意味、予定調和。

「こいつは牛頭。私の……。」

何だろ？

「まぁ、何かよ」

身も蓋もない紹介が不服だったのか、牛頭が不機嫌に私が座っている枝を揺する。

「ごめんごめん。旅の連れで仲間よ。人を食べない魔物だから安心してね」

と、言っても無理か。

私自身がクルトに信用されてないものね。
幸いにもカーリンが保証してくれたので牛頭も村に入る許可を得た。
礼を言わずに村を闊歩する牛頭は村長宅の前で地面に植わって光合成という名の昼食を始めた。

「私達もお昼にしない？」

村ではいつも礼拝の後に朝食だったから、昨夜を最後に何も食べていない。
そんな事情はどこ吹く風でクルトが私を引き止めるように肩を掴んだ。
星になーー

「村の再建が先だ。お前がやったんだから責任を持て」

私の魔法陣が展開する直前にクルトが言った。顎で半壊した家を示してクルトが続けようと口を開く。

「星になーれ」

私が言い直した術名と共にクルトが空に舞い上がる。
責任なら村長に取らせろ。そもそも、この村に人が住むことはもう無い。
クルトは手足をジタバタさせて空中遊泳を楽しんでいた。
カーリンがこめかみを押さえながら私の頭を小突く。

「下ろしなさい」
「ちぇっ」

素直な私は指示通り地面にクルトを下ろす。
このまま埋めてしまえば静かになるだろうか。

「村の再建、ね。食事の後に手伝ってあげるよ」

そんな義理はないし無意味だとも思うけど、それで今日は村に残るなら手伝ってもいい。
明日の朝までこの村に二人を置いておく契約だから。

「絶対だぞ？」

悔しそうなクルトを適当にあしらい、私はお昼の準備を始める。
村長に出された下手な料理に嫌気が差して台所を占拠した事もあるので、道具の位置は判っている。
クルトの視線を感じるのは彼が私を監視しているからだろう。
余っていたウサギの肉でスープ、先ほど採ってきた野草でサラダを手際よく作り皿に盛る。ついでに卵と野菜を拝借して玉子とじを作る。
クルト青年の視線に羨望が混じったのを感じ取る。
村でこの料理はかなり豪華な方だからクルトも食べたいらしい。
私と目が合うとクルトはとっさに真面目な顔をした。

「その卵や野菜は村の物だ」
「村に渡した金貨のお釣りにしては少ないよね」

涼しい顔で受け流す。
カーリンが私に苦笑した。

「二人も席につきなよ。久しぶりに一緒に食べましょ」
「おい、待ーー」

「ご一緒するわ」

クルトの制止に重ねてカーリンが招きに預かり席に着く。
クルトも結局、料理の魅力に抗えずに椅子に手を伸ばした。

「頂きます」

手を合わせて箸を手に取る。
村長には怪訝な顔をされたものだけど、クルトは料理に夢中で見向きもしない。
カーリンはそんなクルトに微笑んでいた。
クルトが玉子とじを口にして吐息を漏らした。

「……うまい」

出汁を取ったりしてるもの。
村人が食べてた焼くだけ煮るだけの偽料理と一緒にしないでよね。

「何笑ってんだ」

私の口元が綻んでいるのを目ざとく見つけてクルトが睨んでくる。

「食べた以上は共犯よね」
「蒸し返すなよな」

四十九話　月夜の宴

山裾に沈む夕陽を眺めて私は一息ついた。
夜の山道は真っ暗だから、クルトが村人を追いかける心配はもうしなくていい。
魔法で切り出した木を風の魔力で包んで運ぶ。
最初はカーリンと二人でこの作業をしていたけど、彼女は魔力の制御が下手で森の木々を縫って進む器用さはなかったので私がすべて請け負っている。

「二人も一緒に行く？」

汗を拭っているカーリンとクルトに訊く。
私ならこの二人を連れて文字通り飛んで帰れる。
私の提案にカーリンは乗り気だったもののクルトが難色を示しご破算となった。
どうやら「星になーれ」がトラウマになっているようね。
問答無用で拉致しようかと思ったけどカーリンが怖いので自重する。

「それじゃあ、一足先に帰ってるね。夕飯の用意もしておくよ」

自身を風の魔力で覆い、浮かび上がる。
躊躇無く空を飛んだ私に呆れるような視線が向けられているのに理不尽さを覚えながら、村へと飛ぶ。
村の中心、最も日当たりが良さそうな場所に切り出した木を並べた私は村を見て回った。
火事場泥棒が現れるにはまだ早いけど村人が戻ってきている可能性がある。

念には念を入れておかないとね。
一通り見て回った私は我が物顔で村長の家に上がり込み料理を始める。
小さくて歪な芋を土魔法で形作った皮むき器で剥いているとカーリン達が帰ってきた。

「クルト、汗臭いよ。体洗ってきて」

虫を払う要領で手を振る。

「なっ！？　お前だって汗かいてるはずだろ」

何で突っかかってくるのよ。面倒な奴。

「私は体を動かしてないもんね。風魔法で移動してたの、気付かなかった？」

幽霊みたいに絶えず地面から浮かびながら村と森を行き来していたのだ。

「……良く集中力が持つわね」

肩を竦めて去るカーリンを見送る。
家の裏手に井戸があるからそこで水を汲むのだろう。
水の魔法で体を洗うことも出来るけどクルトは魔法を使えないから。

「つい数日前まで子供だったのに、今更恥ずかしくなるんだねぇ」

台所の窓から覗く牛頭に同意を求めるも、沈黙が返ってきた。

この寡黙な魔物と会話をしていても何時も途中から独り言になる。
慣れたけど、やはり味気ない。

「魔物、来た」

唐突に牛頭が告げたのは招かれざる客の来訪だった。
水を張ったボールに芋を放り込んで家を出る。
村の入り口で大きな影が揺れているのが遠目から見て取れる。

「一体か。……牛頭はカーリン達に知らせて、隠れるように言っておいて」

牛頭が家の裏手に消えるのを確認して、私は影に近づく。
魔物は毛虫にコウモリの羽根が生えたような姿で大きさは二メートルと少しと言ったところか。

「見た感じはまともな部類ね」

美的感覚が麻痺しているのを実感する。
私が近づいても羽根付き毛虫は地を這うだけだった。
動きも洗練されていないので知性が無いのだろう。
埒が明かないのでサクサク処理しましょ。
風の魔力を集めて村の外に吹き飛ばそうとした時、森から視線を感じた。
何時でも視線の主に対処できるように身構えつつ、羽根付き毛虫を吹き飛ばす。
割と頑丈そうだから高く打ち上げない限り大丈夫だろう。
木に引っかかってしまう可能性もあるけど、ご愛嬌って事で。
視線の主は私の実力を見たからか、襲ってこない。

「どちら様？」

こちらから声をかけても森から出る気はないようだ。
普段の私ならこの時点で無視する。でも今晩はそうもいかない事情がある。

「出てこないと真っ黒にしちゃうよ？」

火の魔力が私の手元に集う。
真っ黒に燃やすよ。白くなっちゃうかもしれないけど、美白の一環って事で一つ、

「許して、ね！」

円形の魔法陣を展開、隠蔽は無しの一転突破仕様だ。
簡単に避けられるように手加減してある。
顔くらい見たいから。

「……逃げたかな」

森の奥に逃げて事なきを得たらしい。
姿を見れなかったのは残念。
今晩が計画の最終段階だから邪魔が入ると困る。
カーリン達を置いて視線の主を追いかけることも出来ず、私は村長の家にとって返した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

食事をしてしばらく雑談を楽しんだ後、クルトが何処からかガラスのビンを持ってきた。

「二人も飲むか？」

ビンを振って中の液体を揺らしながらクルトが訊いてくる。

二人って事は私も入っているのかな。

興味はある。

「月も綺麗だし、外で飲もうよ」

蝋燭の臭いがするこの部屋だと悪酔いしそうだもの。

カーリンが水差しを持ってくる。

私はクルトに頼まれて爽やかな香りがする花を台所から取ってきた。サラダに添えようと思っていた柑橘系の香りがする花だ。

夜の空気は随分と冷えていた。

私とカーリンは息を白くして遊びながら適当に切り出した丸太に座る。クルトは家から椅子と小さな机を持ってきて腰掛ける。

カーリンが木の杯に注いで差し出してくれたのは透明な液体。

クルトにもそれが配られる。

「香料と水は自分で調整するといいわ」

クルトが何故か手慣れた様子で水を加えている。

「この辺りは寒いからな。寝る前に一杯飲むんだよ」

参考にしようと観察していた私にクルトが説明した。

私は杯の中身を水で三倍くらいに薄めて昼に採ってきた香りの強い花を浮かべる。

透明な水面に映る青い月と金木犀に似た花が風流だ。
杯を軽く回して花の匂いを楽しんでから液体を口に含む。

「暖まるね」

飲み過ぎると明日が辛いだろうけど、思ったより抵抗なく喉を流れていくので加減が分からなくなりそう。

「遠慮なく飲みなさい」

カーリンが杯を傾けて言う。クルトが面白そうに頷く。
カーリンの雪色の頬に早くも朱が差していた。
絡み上戸じゃないでしょうね？

「鼻も目も口も楽しめる一級品」

自画自賛という。心を満たす一級品よね。
私は部外者だけど。

「ただ耳が寂しいわ」

カーリンが言外に催促するのに苦笑する。
クルトは興味をそそられたのか身を乗り出してきた。

「唄が歌えるのか？」
「きっと驚くわ。すごく綺麗だから」

ハードルあげないでよ。
放っておくとどんどんハードルが高くなりそうね。

「では、注文通りに一曲」

私は一口飲んで杯を置いた。

唄うなら鎮魂歌なんて皮肉が効いてると思うけど。

五十話　横槍

「ありがとな」

カーリンをベッドに運んで戻ってきたクルトが唐突に言った。
意味が分からないので私は首を傾げる。
クルトは答える前に杯を呷って空にした。

「あいつが俺以外と笑い合うなんて夢みたいだ」

あぁ、そういうこと。
彼女はクルトとしか接してこれなかったから、私と楽しくやっているのを見て彼も安心したのだろう。
村人と共に生きるカーリンを想像出来たから。
私と村人を同一視する、単純で楽観的な想像ね。
絶望的なくらいに分かっていない。

「どうかしたか？」

不安そうにクルトが訊ねてくる。
私はそれに笑った。或いは嘲った。

「何でもないよ」

今のあなたに言ってもきっと認めないでしょうしね。
頭で分かっていても、見るまで信じない。そんな人もいる。
彼は私の深意を探るように見ていた。もとより、私は見抜かれるほど浅くない。

「クルトも寝ておきなよ。私は牛頭と一杯やってから寝る」

背後の牛頭を振り返る。牛の眼が私に一瞬だけ集まって、周囲に拡散した。

魔物の再襲撃を警戒しているのだろう。

クルトは一つ頷いて空の杯を回収すると家に入った。

私もしばらくしたら寝た振りをしないといけない。

杯に水を注いで橙色の花を沈める。星屑みたいに漂ってゆったりと浮かび上がる。

寝たら悪夢を見るのだから起きている間は良い夢を見たいのに、私は何時も人の夢に付き合わされるだけだ。

私のそれは何処にあるのか。

「……牛頭は隠れて。カーリンが出て行っても寝た振りするの。分かった？」

牛頭が了解したのを確かめて私は杯の中身を地面に撒いた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

騒がしい足音と共に玄関の扉が開かれた。

虫の音が不作法者に遮られて私は舌打ちする。

カーリンの名を呼ぶクルトの叫び声が遠ざかっていく。

この辺りにはもういないよ。

クルトの声が聞こえなくなった頃、玄関の扉が再び開かれた。

落ち着いた足音が廊下を進む。

静かに部屋へ入ってきた老人に私は目を向けた。

「村長、こんな所で油売ってる暇はないはずよ。悪役の出番は今なんだから」

村長は嫌そうな顔をしつつ私が座る椅子に歩み寄る。

「不味いことになった」

珍しく切羽詰まった顔で村長が切り出した。

私はその言葉に眉を寄せる。

計画は順調に進んでいる。後は締めくくりだけなのに何があったのか。

「騎士団がここに向かっとる」

思わず額を押さえた。

二週間以上この辺りで過ごしているから近い内に来るだろうとは考えていたけど、タイミングが悪すぎよ。

「斥候も見かけた。この村にお主が居るのも知られていると見ていい」

「最悪ね。進軍しているんでしょ？」

「あぁ、全軍で闇の中を進んでいる」

夜の森を行軍している以上、今晩中に私と一戦交える気ね。

向こうにとっては都合が良い事に、戦場は無人の村。開けた空間で私を取り囲めるという訳だ。

しかも街一つを覆う魔力感知が可能なベリンダがいる。

付近で魔法を使うだけで騎士が飛んでくるだろう。

クルトが蘇りの魔法陣を使ったら、何もかも台無し。

頭の中に無数のプランが乱立する。吟味と思考を繰り返し、一つ

の回答を導き出した私は立ち上がる。

「クルトと騎士団を合流させる。私がそれを相手にしている間、予定通りにーー」

私は言葉を切って深呼吸する。

組み立てたプランを見直しながら、私は村長に向き直った。

「カーリンを殺して」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

魔力を限界まで掌握して空を飛ぶ。

昼間に切り出した丸太を十本ほど持参して向かうのはクルトの所だ。

ベリンダなら私の動きを魔力で把握し、追いかけてくる。

今優先すべきはクルトをカーリンに合わせない事だ。

村長には牛頭を連れて行かせた。現状の最善手。

「……痛いんですけど」

神経を切り刻まれるような鋭い痛みが全身に走っている。

お優しい神様め、ご立派なエゴを振りまきやがって、私の計画を妨げるのか。

あんたは本当に何がしたいのよ？

歯ぎしりしたい気持ちを押さえて森の魔力を感知しながらクルトを捜す。

「見つけた……！」

人間大の物体が動くのを感知して降り立つ。

「魔王！？」

居たのは軽装ではあるものの武装した壮年の男。騎士団の斥候だった。

「ハズレか。紛らわしい！」

魔力を操り丸太で薙払う。斥候は素早く抜いた剣を盾にしたが、構っている暇はない。思い切り丸太を叩きつける。

滑稽に地面を転がっていく斥候を横目に私は再び空中に浮かぶ。

時間がない。ここまで事態がこじれるなんて想定外よ。

私に村長、クルトとカーリン、そして騎士団。

「この四つ巴、笑えないのは誰かな」

一人、愚痴をこぼした私は全力でクルトを捜すのだった。

五十一話　輪廻

クルトをようやく見つけた時、彼は川原にいた。
村の畑に水を引く用水路に川が流れ込む地点で彼は辺りを見回している。
その眼前に降り立った私はクルトが疑問の声を差し挟む余地を与えず、運んできた丸太で周囲を塞ぐ。
クルトは昨日から一年分成長し、大人びた雰囲気を持っていた。
もう記憶も完全に取り戻したはず。
クルトは転がった丸太を見回して、私に視線を向けた。

「カーリンを捜しているんだ。何処にいるか知らないか？」

ずいぶんと冷静になっている。
やり難いな。
私はことさらにゆっくりと首を振る。

「知らないよ」

心当たりなら、ある。高確率でそこに居るとも思う。
ただ、教える気はない。

「クルトに用事があるの」
「……後にしてくれないか？」

冷静さの蔭に焦りが覗いた。
クルトが進めようとした右足のすぐ横をかすめ去るように小石を弾く。瓦礫ガトリングの応用だけど彼の後ろで地面が派手に抉れた。
自然とクルトの足が止まる。

「何の真似だ？」
「村長からの依頼には続きがあるのよ」
答えは返さずに一方的に話す。
残された時間はほんの僅かなのだから、効率的に動くしかない。
騎士共め、覚えてなよ。

「依頼の一つ目は村を襲撃し、移設のきっかけを作る魔王の役割」
役割っていうか本物だけど、割愛しておこう。
クルトは素早く逃げ道を探したけど見つからず、私の話を聞く姿勢を見せた。
当然だろう。急いだところでカーリンの死は決定事項。
彼の仕事はカーリンの死後、彼女を蘇らせる事だ。
だから私はそれを妨害する。

「二つ目は、カーリンの死体を村長が片付けるまでクルトを引き留める事よ」
クルトの眼の色が変わった。
蘇りの魔法は体がなければ発動しない。死体を片付けられたら彼女は二度と蘇る事はない。

「……何でだよ？」
クルトが拳を握り込む。
重たい怒気が溢れ出し、瞳に殺意が宿る。
「何でそんな事するんだ！？」

彼が怒りにまかせて足を踏み出す。もう少し煽れば殴り掛かってくるだろう。
実際、私は殴られるべきかもしれない。

「カーリンの友達じゃなかったのかよ！？」

激高しても未だに殴りかかってこないのは私がカーリンの友達だと思っているからか。

「カーリンは俺の為に死んだ。間違ってるだろ。永遠に死ぬのは俺の方だ」
「確かにカーリンがクルトの為に死ぬのは間違ってるね」
「ーーそれなら！」
「クルトがカーリンの為に死ぬのも間違ってるよ」

私が断言するのにクルトは口端を歪めた。非常に似合わない。

「最初に死んだのは俺だよ。だからカーリンは蘇るべきだ」

知ってる。日付を逆算したもの。
でも、

「関係ないよ。この計画を立てたのは村長なの。つまり村の人間よ」

カーリンは忌み子。クルトは村の子。
村人がどちらを取るかなんて決まってる。
彼も思い至ったらしい。
似合わない笑みを消して下唇を噛んだ。
そして過激な光を宿す瞳で私を見据え、クルトが地を蹴った。

「そこをどけ！」

魔法を扱えないクルトが私に叶うはずもないのに。
繰り出された右拳は左足を半歩引いて避ける。

「星になーれ」

魔法陣を展開する直前、クルトの唇が動いているのに気付いた私はとっさに飛び退く。
クルトの回りに魔力が集まっていた。
私が掌握していた魔力も少量とはいえ奪われている。

「詠唱か。クルトも使えたのね」

村人は村長以外に魔法が使えなかったから油断していた。
考えてみれば、カーリンを蘇らせるために魔法陣を起動させる必要があるのだから、クルトが魔法を使えないはずはない。
とはいえ、実力差は歴然としている。

「そのちっぽけな魔力量で私と闘うの？」

クルトの集めた魔力では座布団サイズの石壁を生み出すのがせいぜいだ。
しかも制御がガタガタ。
あれでは予め描いてある魔法陣を使わないと満足に魔法を扱えないだろう。

「やってみなくちゃ分からないだろ！」

呆れた。
あんたがそう言って村人とカーリンの間を取り持とうとして失敗したからこんな騒ぎになっているのよ。
馬鹿らしい。

「殺し屋黒子」

展開するのは、青と白の魔力が混ざり合う球形の魔法陣。

「ーーだいだらぼっちバージョン」

魔力を操って光を遮断した漆黒の巨人が顕現する。
本来は夜に奇襲をかけるために黒くしたのだけど、今は威圧するのが目的だ。

「……ありかよ、それ」

常識無視の球形魔法陣。
五メートルの巨人の肩に乗った私を倒さない限り消えない魔法。
クルトの魔力は雀の涙で、空を飛ぶ事も出来ない。よって巨人の肩に居る私への攻撃手段がない。
つまり、この後は私が一方的に攻撃を加えるだけだ。

「降参は認めないよ」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

クルトが川原に寝転がっている。

「背中が痛くないの？」
「……お前のせいだろ」

身の程もわきまえずに向かってくるあんたが悪い。
手加減しつつも二、三発巨人の拳を浴びせるとクルトは立てなくなった。

「あのデカいのなんだよ。勝てっこねえよ」

本気を出せば倍の大きさになるよ。
クルトの心を抉っても楽しくないので黙っておく。
それにクルトに精神攻撃を加えるとまた神が要らぬお節介をしてきそうだもの。ただでさえ体中を切り刻まれている気分だから避けておきたい。

「……カーリンと村で暮らしたかったんだ」

クルトが呟いた。
村長から聞いている。その後、どうなったかまで詳細に。
だから私は彼の後に続いた。

「受け入れると嘘を吐いた村人に騙されて彼女の元まで案内してしまい、カーリンは処刑されかけたのよね」

だが、カーリンは逃げ出した。それをクルトが追いかけた。
その日を境にクルトは村に帰らなかったと村長は言っていた。

「知ってたんだな」
「村長から聞いたのよ」

「そうか。俺はあの日の夜、カーリンに殺されたんだ」

クルトがぎこちない動きで上半身を起こす。
骨は折れてないようだけどあちこちに痣が出来ている。
巨人の拳に混ぜ込んでいた川原の石によるものだろう。

「クルトに裏切られたと思ってナイフでグサリ、そんな所かな？」
「ご名答。だから俺の自業自得なんだ」

上半身を起こしたクルトはそのまま私に頭を下げた。

「頼むよ。カーリンを死なせたくないんだ。お前なら村長だって止められるだろ？　助けてくれ！　頼む！！　頼むから……。」

やっぱりそうか。
これは贖罪の輪廻。
誰より自分を思っていたクルトを殺したカーリンはその命で償う。
クルトはカーリンの償いに対して償う。
だからお互いに合わせる顔もなくて最終日には姿を消す。
相手を蘇らせるという事は相手を許した証明だから。
傷つけて傷つけられて、当事者同士で慰め合って、

「それがまた傷つける事だと気づかずに」

下げられたクルトの頭を見下ろす。
永遠に贖罪のために生死を入れ替えるつもりか。
どこまで不器用なのよ。
見るに見かねた村長が英雄ごっこを始めたのも納得ね。
本当に、腹が立つ。
私は右足を軸に強烈なローキックをクルトの頭に見舞った。

満身創痍のクルトが堪えきれる道理はなく、クルトの頭は川原の石に並んだ。

とってもお似合い。

「私に人助けをしろって？　そんな事するものか。そこで奇蹟でも祈っていなよ」

呻くクルトが立てないように彼の足を踏みつける。

「それじゃあね。私は村長に報告しないといけないから」

嘘だけど。

五十二話　嘘つき二人

クルトが蘇った場所にはカーリンと村長が一触即発の雰囲気で睨み合っていた。
私は二人の間に着地する。

「……マオウ。裏切ったわね？」

村長から聞いたのだろう、カーリンが言った。
憤怒の色に燃えている彼女の瞳に微笑む。

「おかしな事を言うのね。私や村長はカーリンを手伝ってるのに」

彼女が何故クルトを蘇らせたのか。
殺してしまった事への罪滅ぼし、信じきれなかった事への贖罪。
それが理由。
なら、

「カーリンが蘇る理由は何？」

クルトの命を当てに蘇りを期待するなんて本末転倒なのよ。
カーリンが表情を消した。

「説教かしら？　すごく偉そうだわ」
「クルトに依存してるカーリンよりずっと偉いよ」

生まれてから一人で生きて、やっと出会えた理解者のクルトに依存したい気持ちは分からないでもないけどね。

「本気でクルトに謝るなら、大人しく死になよ」

それでカーリンの贖罪は終わるのだから。

歯を食いしばるあなたには悪いけど、時間がないの。

山積みの用事が片付く前に騎士団に乗り込まれると厄介なのよ。

だから手早く済ませるに限る。

「カーリンだって自分の矛盾が解っていたんでしょ。だからここに来た」

生きていて良いかをクルトに決めて貰うために。

クルトの贖罪の輪廻とカーリンの共依存の輪廻と……。

どうしようもなく不器用で内向的な二人。

肩を竦める私にカーリンが冷ややかな視線を注ぐ。

「それを理由に私を殺すのは筋違いではないかしら？」

「どうして？」

「選択権はあくまでクルトにあるわ。マオウ達に決める権利はないでしょう」

うん、その通りだね。

クルトがまともに考えられる状態なら、私もそう考えるよ。

「けど、クルトはカーリンに負い目がある。だから、彼に選択権をゆだねるのは公平性に欠くね」

だから、ここに来る前にクルトを潰してきたのよ。

合わせてお説教しても聞く耳持たないのは火を見るより明らかだもの。

「カーリン達の間違いはね。頭を下げなかったことだよ」

ただそれだけで万事うまく運んだのに、信頼の使い方を間違って依存して謝り続ける。

どこまでも不器用な二人。

断罪を続ける前に村長が私を制した。

「魔王よ。もうよい。終わりにしよう」

見栄っ張りめ。震えたその手を私の肩から退けなさい。

どいつもこいつも不器用なのよ。

馬鹿は死ななきゃ治らないって言うけど、治ってないし。

「儂が始末をつけーー」

村長がむせた。

わき腹に食い込んだ私の肘鉄に感極まったらしい。

涙を流して喜ぶとは気持ちの悪い奴。

「な、なにをする」

「魔王らしい事させなさい」

村長がカーリンを殺したら私の計画が狂ってしまう。

私が魔法陣を展開するのに合わせてカーリンが動いた。

喉を狙った軌道で迫るナイフはしゃがみ込んでかわす。

私の集中が途切れたために未完成だった魔法陣が霧散するも、すぐに魔力を集めなおして周囲の地面を火で覆う。

カーリンは軽く跳躍したと思うと土の魔力で岩の地面を空中に作り足場にした。

私は自らの退路を塞ぐだけとなった火の海を消して魔力に戻す。

その隙を狙ってカーリンが岩の槍を生み出して私へと魔力レールを敷いた。

「観念するといいわ」

打ち出される岩の槍に臆することなく私は球形魔法陣を展開する。

「お邪魔虫、ぬりかべ」

水晶で出来た透明な壁が辛うじて間に合い、岩の槍を受け止める。
唯一、防御を目的にして開発した魔法陣だから瞬時に発動できるように何度も練習した甲斐があった。
しかしやはり時間を掛けなかった分、魔法陣の完成度が悪かったようで程なくして水晶の壁は瓦解した。

「村長は寝てなよ」

起き上がりかけた村長を足蹴にしつつカーリンを見据える。
彼女は困惑顔で村長を一瞥した。

「マオウ、あなたどっちの味方……？」

「私の味方よ」

胸を張って答える。
村長が戦うと困るの。だから参加させないのよ。
私は球形魔法陣を展開する。
今回、一番の功労者の登場です。拍手でお迎え下さい。

「殺し屋黒子、だいだらぼっち」

五メートルの真っ黒な巨人が姿を見せてもカーリンは驚かなかった。
ただ無言で風の魔力を操って周囲の木から枝を落として集めただけだ。

「流石はカーリン。対応が早いね」
「白々しい。こちらの策を見破っておいて言うことではないわ」

そう言いつつも嫌みな笑みを浮かべたカーリンは枝を束ねて強度を増すとだいだらぼっちの脚を薙払った。
魔法の水で出来たこの巨人には打撃の効果がない。
しかし、巨人を構成する水を私の掌握範囲からはじき出せば巨人が縮むのだ。
私自身は巨人のバランスを取るために魔力を操る必要があるので一時的に動けなくなる。
殆どだるま落としだ。
カーリンは枝のハンマーで巨人の脚を立て続けに殴りつける。
だいだらぼっちが三メートル程度に縮むまで時間はかからなかった。
カーリンの振るう枝ハンマーの射程に入った瞬間、私は球形魔法陣を展開する。

「何度やっても意味ないわ！」

しなるハンマーが振り下ろされるより早く私の球形魔法陣が発動する。

「殺し屋黒子、一寸法師バージョン！」

だいだらぼっちが瞬く間に掻き消えて、あちこちで水の小人が立

ち上がる。
カーリンがすぐさま枝ハンマーを分解しバラした枝を風魔法で操る。
小人達が次々と薙払われて水滴に変わっていく中、私は風の魔力を操る。

「瓦礫ガトリング」

枝を使えるのはカーリンだけじゃないのよ。
私の声に反応した彼女が対応する直前にその胸を枝が貫いた。
即死だろう。
彼女が倒れるのと同時に私も膝を突く。
気が狂いそうな痛みで力の入れ方を忘れそうだ。
カーリンを殺した瞬間に強まった痛み。
まだ先があるのよブーイングは全部終わった後にしろ早とちりの神様め。

「確かに死んでおるな」

村長がカーリンを見下ろして言った。
当たり前だろ。早く続きをしろトンマ。

「では、カーリンを蘇らせる。魔王は周囲を警戒してくれ」
「手早く済ませなさいよ」

私は痛みを堪えながら立ち上がった。

五十三話　笑えない者

村長が地面に魔法陣を描き始める。
失敗しないように正確さを求めた結果、魔力で描く方法を選ばなかったのだろう。

「……お前が魔王だというのは違和感があるな」

幹に背中を預けて周囲に気を配る私に目を向けずに村長が言った。
私は悟られないように浅い呼吸を繰り返す。
事ここに至っても未だ痛みが和らぐ気配はない。

「魔王らしい事をさせろと宣ったが、動機が既に魔王らしくなかったぞ」

なんだ。バレてたのね。
自覚もない英雄ごっこかと思っていたけど私の意図を掴むくらいには認識があったらしい。

「年の功ってやつかな？」
「やはり、儂に殺させまいとしたか。損な役回りをさせたな」

いつもの事よ。
しかも、まだ過去形にするには早かったりする。
片付けないといけない案件はまだ目の前にあるのだから。

「ねぇ、村長は罪滅ぼしに自分の命を使うのってどう思うの？」

私が世間話をするように話しかけると村長は苦い顔をした。

いま聞くのか、と愚痴ともとれる呟きを残してしばし黙る。
私はこの老人に言い訳を用意させるつもりはない。
だから畳み掛ける。

「カーリンを殺して自らの命で生き返らせる。カーリンとクルトの輪廻は終わり、二人が生きる奇蹟を実現する」

村長と結んだ契約の最終目標。
村を滅ぼしてなお村長が残った理由。
謳うように言いつのり、私は声のトーンを落とした。

「なんで、そんなに思い詰めるの？」

カーリンを助けられなかった事を命をもって償うほどに。

「儂は村人を止めなかった。確かに一度はカーリンを助けたがクルトのように村人を説得はせなんだ」

村長が円の中に効果図を描き位置を測る。
村人を止めなかったのは罪になるのか。
不満が高まる村の和を保つために吐き口を設けるのは罪になるのか。
なるのだろう。大を生かすために小を殺すのはご大層な正義に罰せられる事案だから、村長は自らを裁く。
故に私は村長の代わりにカーリンを殺した。

「罪は背負うに重い荷だ。儂が手を下すのが筋であったが、感謝している」
「年寄りは労らないとね」

冗談めかした軽い口調で答える私に村長は忍び笑いを返した。

「人より人に優しい魔王か。皮肉めいているな」

最後の効果図を描き終わり、魔法陣を完成させた村長は私に頭を下げた。

感謝される謂われはないのだけど、それは口に出来ない。

だから努めて尊大な態度で感謝を受け取った。

村長が魔力を集める。

それほど手こずる作業ではないはずが、村長は眉をしかめた。苦戦しているようだ。

魔力が別の誰かに掌握されかかっている。

「ベリンダの奴、空気読みなよ」

姿どころか気配さえ感じさせない距離から魔力を掌握してのけるのは彼女しか思い付かない。

私は苦戦している村長を手伝うべく魔力を集めて彼の傍で解き放つ。

魔力は近くにいる程掌握しやすくなる。ベリンダと距離がある今ならまだ間に合う。

「助かる。これは別料金かね？」

「口より先に手を動かしてよ」

時間がないの。

村長はカーリンを生き返らせて終わりだから余裕があるでしょうけど、私にはまだやる事がある。

私との契約はアフターサービスも充実してるのよ？

「始める。さがっておれ」

村長が魔力を注ぎ込み、以前に聞いた物悲しい詠唱を始めるとカーリンの死体が火に包まれる。

カーリンの髪と同じ暖かな夕焼け色の炎は彼女の体を燃やして命の灯火を宿す。

炎は穏やかに収まり、一人の赤子が残された。

「終わったな。長いようで短い付き合いだったが、お前さんともこれでお別れだ」

村長がどこか寂しさを残す顔で夜空を見上げた。

「これにて奇蹟の夜は出来上がった。儂は用済みだな」

「そうね。牛頭、最後の仕上げをするよ。手を貸して」

背後の森に呼びかけると牛の頭を揺らした魔物が現れる。牛の角同士がぶつかり合って耳障りな音を立てた。

「……最後の仕上げ、とは何の話だ？」

村長が訝しむ。

私は牛頭が引っ張って来た魔力を借り受けて球形魔法陣を構築する。

対象は村長、彼を完全に覆うように魔力が入り乱れる。

「何の真似だ。今さら儂を殺す気か。それとも騎士団に対する人質のつもりか？」

困惑の中に緊張を含みながら村長が問い掛ける。

私の考えが心底解らないという顔だ。

「私が望む結末は情けない英雄の独りよがりな物語りなんかじゃないの。泥臭い人間が素直になる物語りが好きなのよ」

立てた人差し指を左右に振りながら私の好みを語って聞かせる。

村長は困惑を深めるばかりだ。

「何を言ってるかさっぱりだ。簡潔に言え！」

怒鳴った村長を鼻で笑う。

カーリンが蘇った時から徐々に収まり始めていた全身の痛みが再び私の精神に刃向かう。

もとより、覚悟の上。この痛みは甘んじて受けてあげるよ。

「さぁ、泥臭い奇蹟を起こしましょ」

村長を囲む球形魔法陣に手を触れて私は口を開く。

「頑張ってね」

私の励ましに村長が問い返す前に黒い炎が彼を飲む。

絶叫が木霊する。魔法陣から逃れようと黒い炎の人型になった村長は足掻く。しかし、夜闇においても主張する漆黒の炎に視界を遮られてそれは叶わない。

村長が焼けた喉で何かを叫ぶ。

人が焼ける猟奇的な臭いが漂ってきて思わず顔をしかめた。

見てるか神様。どうだ、魔王らしい所業でしょ。

「この四つ巴で笑えないのは私一人で間に合ってるのよ」

本当はお前の役割なのよ、役立たずの神様。

外伝　彼等

彼が一年毎にある夢を見ていることに気づいたのは十歳になる夜だった。
何故か村の外で起き出して一日を過ごすだけの夢だ。
この夢に他と変わった点があるとすれば登場人物の年齢が変わらない事だろう。

「おはよ」

この夢における唯一の登場人物が目を擦りながら挨拶してきた。
去年の夢から成長した様子が見えない十二歳くらいの少女は夢以外で見た覚えがない。
彼は警戒しつつも挨拶を返した。ある程度の礼儀は村長である父から躾られている。
見る者が見れば驚きつつも彼の頭を撫でて褒めそやす程には様になっている彼の礼儀作法、しかし少女はまるで頓着せずに欠伸をかみ殺しながら朝食の用意を始めた。
毎度彼が驚くのは彼女がその幼さで魔法を使える事だ。だからこそ夢だと彼は判断している。

「我が魔法の湯でその身を柔らかくするが良い」

妙な独り言を呟いてクスリと笑う少女は何かを煮込んでいる。
彼は今の内にと周囲を見回して去年との違いを探した。
どうやら、どこかの洞窟にいるようだ。去年の夢も最後には洞窟にたどり着いて眠ったから、やはりこの夢は連続していると判る。
注意深く見回していると洞窟の入り口を木が覗いた。

「おかえり牛頭。騎士団の動きはどう？」

少女が木に話し掛ける。

少女がこの木を何故牛頭などという名で呼ぶのか、彼は知らない。

見た目は何処にでも生えていそうな単なる木で、少女の魔法によるものかこの木は動く。知っているのはそれだけだ。

「魔物、言った。騎士団、二日前、見た」

牛頭が単語でぶつ切りにした報告をする。

少女は自らの頬に片手を当てて思案する。

「しつこいね。やっぱり私に発信機が付いてると考えた方がいいかな」

ぽつりと言うと少女は牛頭に食事するように言った。

彼の記憶ではこの少女は騎士団に追われているようだった。

考え事をしている彼の腹が小さく音を立てた。

「……なぁ。朝飯はまだか？」

夢だから気を使う必要はないだろうと礼儀を捨てて少女に問う。

雪に咲く可憐な花のような唇を少女は綻ばせる。

「少しは大人になったと思ったけど、まだまだだね」

笑顔でのたまって少女は椀を出してきた。

汁物をよそって彼に差し出してくる。

食欲をそそる匂いと腹を満たす味。夢の中なのが残念に感じる。

「食べ終わったら出発するよ」

少女が木を削った二本の棒で椀の具を掴みながら言った。

何度見ても器用なものだと彼は思った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

十五歳の夜に彼はまた夢を見た。

夢の中は粉雪が微かに視界を彩る朝だった。

その幻想的な光景に彼は違和感を抱く。

いつもは近くにいるはずの少女がいないのに気が付いた。

何処からか落ち着いた歌がそよ風に流れて彼の耳を撫でていく。

「外か。珍しいな」

誰にともなく呟いて立ち上がる。

魔法で作ったらしい岩の小屋を出て声の元に向かう。

巨石に腰掛けて空を仰いで歌う少女がいた。

少女の漆黒の髪を純白の雪に染められた風が静かに巻き上げていく。

少女が振り向いて彼を見る。理知的な夜闇色の瞳が十五歳の彼を映す。

「そろそろ魔法を使えるようになった？」

小首を傾げて聞かれ、彼は頷く。

少女には到底及ばないが戦力になる実力が彼には備わっていた。

未だに魔法使いになってはいないが嘘は吐いてない。

「おめでとう。君も立派に男の子だね」

少女が手を打ち合わせて彼を祝福した。
皮肉めいた響きが含まれていた気もするが彼は素直に返礼した。
少女は牛頭を呼んで枝に吊していた皮袋を一つ彼に投げ渡す。

「それじゃあ、君には村に帰ってもらうね。その袋には旅費が入っているから無駄使いしちゃダメよ」

彼は眉根を寄せる。
ここが何処かも解らないのだ。村に帰りつけるだろうか。
不安に思う彼の心を見透かした少女が羊皮紙を手渡した。

「村までの地図だよ。注意事項も書いてある」

字が読めることを前提とした物言いに彼は驚いた。
少女は一切構わずに重要な事柄を告げて深呼吸した。

「これから、未来の君にお説教するね」

最重要だ、と前置きして少女が彼を睨みつける。
意味が分からずに反発しかけた彼の脚を払い尻餅を付かせた少女は腕を組んで見下ろした。

「しっかり覚えておきなよ、大間抜けの英雄さん」

大量の魔力で威圧された彼は背中に冷たい汗を流した。

「子供が知った風な口を利くと思うなら筋違い。子供でも分かる間

違いを犯したあんたが悪い」

身に覚えのないことを一方的に畳み掛ける少女を見上げる。

強固な意志を宿した強い視線が彼を射抜く。

「謝るなら言葉を使え。独りよがりに二人の輪廻を断ち切って悦に入る間抜けな英雄め。贖罪？　やるより先に行うことがあるでしょ。許してもらって初めて終わるのよ」

冷たい声でまくし立てた少女は腰の皮袋から鏡の破片を取り出した。

「餞別よ。村に帰って二人に頭下げてきなさい」

彼の手を取って破片を乗せた少女は牛頭を呼んで彼に背中を向けた。

そのまま歩き去ろうとした少女を彼は慌てて止める。

「ちょっと待ってくれ。何がなんだかさっぱりだ」

「その内わかるよ。ばいばい」

とりつく島もない。

挙げ句にいたずらが成功した子供のような笑顔に微かな苛立ちが混ざっているのに気付いてしまえば、彼には何も言えなかった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

五十歳を過ぎてようやく夢の意味が分かった彼は苦笑した。

最後の一年の記憶とその中にいた黒髪黒目の少女が極めて質の悪い仕置きを仕掛けたのだ。

「魔王め。やってくれるわい」

彼が村長として選択し続けた結果、カーリンとクルトは輪廻の環を作ってしまった。

カーリンを蘇らせて全てが終わったと安堵した村長に少女は球形魔法陣を発動した。

生きたまま体を焼かれた彼は五十日を越える夢を経て蘇った。

魔王が蘇らせたのだ。村長の命そのものを使って。

「無茶をする」

魔法陣の発動中に息絶えていれば蘇りは成功しなかっただろう。賭だったはずだ。

だが魔王は躊躇なく賭けた。故にカーリンが記憶を取り戻したはずの今になっても村長は死んでいない。

「牛頭とやらの実の記憶を使ったのか。一体、何時から企てたのやら」

五十年蓄えてきた知識で理解し諦めに似た呆れ顔を浮かべた。

今なら鏡の破片にかかった魔法の意味も理解できる。

「カーリン達に恨まれていないか確かめろという事か」

夢の中という認識であった彼は他に目的もないと思い村の近くまでたどり着いていた。

これからどうするかは決めていないが鏡の魔法を使う限りカーリ

ンとクルトには恨まれていないらしい。

「腹、括るかのぉ」

村に向けて彼は歩き出す。

これが夢でないことを感謝するなら神にすべきではないだろう。

背中を蹴り飛ばして発破をかけてくれたのは、魔王なのだから。

外伝　彼等（後書き）

次回更新は１１月１２日の予定です。

五十四話　追っ手

「どうだ神様！　素晴らしい見せ物でしょ！？　あんたが用意した私の頼れる味方はみんな裏ぎったよ！！」

私は何を当てにしてたんだ。

この世の者はすべからく、今敵か、これから敵か、自分だけ。

とっくの昔に解ってたはず。

一人で生きて、一人で為して、そして死ぬ。その覚悟は死ぬ前に誇りにしたはずだ。

「見てるだけならいなくて良いよ。けど、お前が手を出したらこの様だ！」

呪ってやる。祟ってやる！

この身が朽ちて果てようが地の底から怨嗟の声を届けてやるから！！

全智無能の神様め。お綺麗なモノしか写さないその瞳に泥水差してよく見てろ！

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

魔力を押し退けて迫る物を察知して私は即座に岩の壁を生み出した。

何かが岩壁にぶつかる硬い音がする。

「お邪魔虫、ぬりかべ」

球形魔法陣を展開して生み出した水晶の壁を岩壁と入れ替える。
地面に落ちていたのは何本かの矢だった。長さや大きさが揃っていない。

「傭兵団、もしくは山賊ね」

呟きつつ周囲を見渡す。木の陰にでも隠れているのか敵の姿は見えない。

「牛頭は動かないでね。手元が狂うといけないから」

臨戦態勢に入った私の命令に牛頭の反応はない。

「ハイとか了解って言いなさい」

そこまで厳密に動かないでほしい訳ではないの。
漫才みたいなやり取りをしつつも私は魔力を掌握し全方位を警戒する。
経験上、こういった状況は長丁場になることが多い。

「面倒だから景気良く、四方八方燃やしちゃえ！」

火の魔力を選択的に集めて私達を囲む火の輪を作り、それを一気に広げる。
次々と落ち葉が乾き燃えていく。
煙が辺りに漂い始めたのを見計らい、私は水の魔力で円形魔法陣を描く。
すぐさま発動すれば濃霧が立ち込めた。
視界が完全に隠されたので敵も私達を視認できないだろう。

「……牛頭、今の内に逃げるよ」

囁くと樹木とは思えない速度で牛頭が動き出す。
何度体験しても信じがたい速さで森を駆け抜け、事態に気付いた襲撃者が対応する前に振り切った。
しばらくしてようやく元のスピードに戻った時には小さな山を一つ越えていた。

「最近、多い」

牛頭がぼやいたのに私は頷いた。
村長といる間は騎士団に襲撃を受けていたけど、別れてからは傭兵団に付け狙われている。
どうやら私の似顔絵に金額の書いた紙が出回っているらしい。美人画というやつだろう。
その金額は一家族が一生遊んで暮らせる程だから、一目本物を見たいと男達が血眼になって私を追いかけている。

「モテすぎるのも困りものよね」
「自分、モテる。魔王、付録」
「言うねぇ、このイケメンが」

正直善し悪しが分からないけどね。木だし。
とはいえ、夜討ち朝駆け奇襲に強襲と手段を選ばない賞金稼ぎにウンザリしているのは牛頭も同じだろう。
狙われているのは私だけだから置いて行かれても文句が言えない。

「少なくとも魔物なら私を傷付けないのにね」

人間の方がよっぽど危ない。
あの傭兵達を雇えれば何かと使い道もあるけど、村長に旅費としてお金をかなり渡したため金欠だった。
戦っても圧勝できる実力差があるものの、下手にそれをすると賞金額が上がって強いのがやって来そうだから自粛している。
もう手遅れかもしれないけど。

「魔王、『暁の鷹』、潰した。原因」

やっぱり、そうだよね。私もあれは残党だと思ってたのよ。
でも、水浴びしている所にぞろぞろと現れたあいつ等が悪い。
私も恥ずかしかったから大魔法連発して地形が変わったけど、不可抗力よ。
最初から私を狙っていたようだから結果オーライというやつだ。

「ヴェベストロー平原には明日に着くのよね？」

牛頭の非難に無視を決め込んで私は話を変えた。
平原という遮蔽物のない場所だと不利になりそう。
敵をすぐに発見できるから奇襲は受けにくくなるだろうけど、囲まれたら戦わざる得なくなる。

「いざとなったら飛んで逃げようか」

すっかり慣れてしまっているから飛ぶのは難しくはない。
どうせズボンだ。少し大きめだけど心配する程じゃない。

「問題は騎士団と出くわした場合だね」

空を飛んだ所を一度見られている以上、対策は立てられているだ

ろう。
ベリンダまで加わっているから私と牛頭では勝ち目がない。
私も策をいくつか準備してはいる。
それでも騎士団を相手にしながらでは策を使う前に押さえ込まれるだろう。

「平原に入り次第、可能な限り早く天魔と接触を図るべきね」

天魔の庇護下に入れば騎士団も迂闊には手出し出来ないはず。
天魔自体が強い上に知性体の魔物が多く集まっているから尚更、かなりの戦力になる。
私は騎士達と遭遇した時の作戦を考えることにした。

五十五話　テント

平原というから爽やかな草原を想像していたのに……。
心の内でため息を一つ。
ヴェベストロー平原は森を抜けてすぐの所にあった。
しかし、今は冬。私達を出迎えたのは期待していた青い草原ではなかった。
見渡す限り草の残骸。土が見え隠れするくすんだススキ色の平原が広がっている。
生命の息吹を感じない出迎えはある意味、私にぴったりね。
皮肉ってみても空しいだけだった。

「街が見えるけど、人は住んでるの？」

近くはない位置に灰色の壁に囲まれた大きな街があった。城塞都市というやつだろう。
出入りしている人間は遠すぎて確認できない。
牛頭の答えを聞く限り街の状況は分からないらしい。
当然といえば当然か。
随分と遠くに来たものだと後ろに広がる森と山を振り返る。
状況に流されるままに旅をしてきて数ヶ月が経つ。
サバイバル知識がついたし、魔法も使えるようになった。
色々な人間を敵に回してきたから、早く雲隠れしなきゃねぇ。

「思い出もないね」
「魔王に、会えた」
「……ありがと」

牛頭の幹を軽く叩いて出発を促す。

天魔はヴェベストロー平原の奥にいると聞いている。
地平線が見える程に広いこの平原でうまく出会えるかは分からない。むしろ配下の知性体を探す方が確実か。
方向性を天魔から知性体に変えて私は辺りを見回した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

魔物に出会わないまま夜を迎えた。
悩んだものの、寒さには敵わず火を熾す。
賞金稼ぎや騎士団が食事中に襲ってきたら、煮て焼いて魔物の餌にしてやる。
忍び笑いをしているといち早くお食事モードになっている牛頭に不気味と言われた。
薪にしてやろうか。

「寒い日は鍋に限るね」

野生の馬は美味しいのだろうか。
すぐに分かるけど。

「それにしても、魔物の姿がないね」

カーリン達の村からずっとそうだけど、ほとんど魔物を見かけない。
天魔のお膝元とも言えるこの平原でもそれは変わらない。

「ここ、いる」
「的外れの解答をどうも」

いつの間にやらぎっしりと実った牛の頭が私を見る。

「多分、天魔、一緒」

「やっぱりそうだよね」

それでも肉食の魔物は狩りに出るはずだ。

まだ一日目でくまなく調べたとは言えないけど、草が倒された様子が見あたらないのでこの辺りには魔物がいないと思えた。

「早めに奥を目指した方が良いね」

天魔と会えなくても縄張りに入れば騎士団も手を出しにくくなるはず。

私はお椀に食事をよそって手を合わせながら考える。

「明日は空から探してみるよ」

街から見える範囲で空を飛ぶと騎士団に目撃情報がいくので避けていた。

ここまで離れれば安心だろうけど、平原に住む人は目が良いらしいから明日の昼に空を飛ぶと決める。

椀に口を付けてつゆを飲み、温まった私は食器を手早く片付けた。

牛頭の枝に吊してある皮袋の一つを取って中身を取り出す。

光の魔力で生み出した白色光で取り出した四つの石を照らす。

「欠けてないね」

石に刻んである球形魔法陣に不備がないのを確かめる。

魔法で石を球形に整えた上で誤差一ミリメートル以下で魔法陣を

刻むから欠けたら最後、作り直すしかない。
作る手間はかかるけど相応の効果を発揮する私のお気に入りでもある。
それらを頂点に置いた四角形を地面に作った私は牛頭に顔を向ける。

「牛頭は下がってて」

四角形の中から牛頭を追い出した私は土の魔力を集めて石の魔法陣へ慎重に供給する。
石の床が広がり、壁が出来る。平らな屋根が頭上を覆えば完成。
石で造られた正方形の小屋が建つまで時間はかからない。
魔力の調整に慣れてきたのか。

「そのうち畳とか作りたいね」

あとお風呂とキッチン。贅沢か。
幼児の村長が動き回るので編み出した軟禁部屋も何時しかテントのようになっている。
元々は床も無かったし。

「穴はない、と。牛頭、私は寝るから何かあったら起こして」

まぁ、多少の攻撃では傷一つ付かないし魔力が自動供給されて直っちゃう仕様だから心配はいらない。
むしろ外にいる牛頭の方が危ないくらい。
石の大きさからしてこれが限界で牛頭は入れないから仕方ない。
攻撃されると目覚ましが鳴るのですぐ牛頭に加勢できるだろう。
牛頭におやすみを言って、私は瞼を閉じた。

五十六話　男装

岩テントを解除した私を出迎えたのは酷い悪臭と凄惨な光景だった。

「……散らかし過ぎよ」

呆れて牛頭を睨む。
枯れた草を彩るどす黒い赤と朝の空気に混じる刺激臭。
原形を留めているのは二人だからパーツすら分からなくなっている分を含めると何人いたのか。

「見つかる、前、殺す」
「こいつら私達に気付かずに近寄ってきたの？」

何とも運のないことで。自業自得だけど手は合わせておこう。

「お疲れさま」

無駄足と無駄死にを労う。
さて、一刻も早くこの場を去ろう。
撤収準備を始めた私は牛頭に呼ばれて手を止める。

「魔王、食事、しない？」
「鼻が曲がりそうだし、こんな状況で食べられないよ」

トマトサラダを見ただけで吐きそう。
トマトないけど。
牛頭から皮袋を取ってテント用の石を入れる。

「食事、出来る」

そう言うと牛頭は地面に根っこを埋めて食事モードになった。

「止めておきなよ。血を吸って葉っぱが赤くなるよ」

「紅葉？」

「似合わないイメチェンは自己嫌悪の元よ」

赤髪なんて今時大学生でもやらないよ。パンクロッカーじゃあるまいし。

死体の傍で不謹慎な会話をしつつ、皮袋を牛頭の枝にかける。

すっかり荷物持ちが板に付いてきた牛頭は文句も言わずにされるがままだ。

私は足下に転がる男に躓いたりしつつもその場を去る。

死体になっても邪魔な奴ら。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

太陽も高く昇ったので計画通りに空から探すことにした。

視力は良くも悪くもないのであまり高くは飛ばずに辺りを見回す。

その状態で動き回り途中で牛頭の枝に腰掛けて休憩を挟んだりを繰り返していると日が落ちる頃、ようやく魔物を見つけた。

黄金色の羽が四枚生えた一本足の山羊。

空を飛んでいる成金なその山羊は私が手を振って呼び止めると高度を落とした。

黄金山羊は私を見て怪訝な顔をしたと思うと牛頭に話し掛ける。

曰わく、非常食は選ぶべき。

もっと肉付きの良いモノを狙うべきだとのこと。
つまり、私には贅肉がないという事ね。
褒め言葉として受け取っておこう。

「して、何用か？」

黄金山羊が訊ねてきたのを幸いに天魔の居場所を聞き出す。

「あの方に会いに来たのか。もうじきここを通るだろう」
「もしかして、天魔に先行して危険がないかを確かめてるの？」

私が疑問を投げかけると黄金山羊が首肯する。
思ったより統率が取れている。まるで軍隊ね。

「それより貴様は何者だ？」
「えっ？　非常食でしょ」
「冗談と区別の付かぬ愚か者か？」
「そっくり返すよ」
「……魔王、喧嘩、するな」
「はいはい」

牛頭に窘められて肩を竦める私に黄金山羊が目を見開く。

「噂に聞く魔王は貴殿の事か。失礼した」

いきなりの低姿勢に今度は私が面食らった。
本当に魔物なの？
いくら知性があっても礼儀は後から身につけるもの。
天魔は礼儀に五月蝿いのか。仲良くやっていく自信が一気に無くなった。

それでも会うしかないのが悲しい所。

「出来れば案内してほしいけど、場所だけ教えてくれればいいよ。こっちで出向くから」

私の提案に黄金山羊は首を横に振った。

「それには及びませぬ。天魔にこの事を伝え魔王の元に馳せ参じましょう」

そう言うと私が止めるのも聞かず、黄金山羊は空へと飛び上がった。

その迅速な行動に私と牛頭は見送るしかない。

北の空に消えていく黄金山羊に私はついため息を吐いた。

「幾つか腑に落ちないのよね……。」

受け入れられる事に耐性がないからか、黄金山羊が怪しく思えてしまう。

頭を軽く左右に振って私は空を睨むのを止めた。

今は考えるだけ無駄ね。天魔に会わないと事態は動かないのだから。

「牛頭、私は着替えるから周囲を警戒して」

旅装束で会うと失礼に当たる相手だろう。

こんな時のために村で買い取った上等な服に着替える事にした。

問題は選択肢が全て男物である点。女物だとワンピースやドレスになってしまう。

「魔王、ドレス、着る？」
「似合わないからイヤよ」

即座に断り、落ち着いた青色が好ましい男物の服を手に取った。
袖口が小ウサギの真っ白な尻尾で縁取られている。何でも、幸運のお守りだとか。
腰に合わせて茜色の紐で縛り、髪に常より念入りに櫛を通す。
鏡の破片に美少女が写ったのを確認して私は牛頭の前で胸を張った。

「どうよ。男装の麗人を前にした気分は」

微笑みかける私に目を向けず、牛頭は私の背後をただ見つめていた。
不満を隠さずに唇を尖らせて視線を追い、振り返った私の前に黄金山羊がいた。

「惚れ惚れするほどお似合いです」
「そう言われると女として傷つくね」
「……。」

黄金山羊の視線が泳いだ。

「魔王、かなり、意地悪」
「惚れ惚れするでしょ？」

五十七話　天魔

黄金山羊をからかうこと数分、北から三十は越えるだろう魔物の群が現れた。
黄金山羊が言うには本隊は更に倍以上の魔物で構成されているらしい。
軍隊そのものね。魔物は全て知性体だというから私は警戒を強めた。
数は決して多くないけど人間以上に個々の戦闘力が高い。戦いになったら逃げる方を優先するべき戦力差だった。
魔物に囲まれて転校初日のアウェイ感を味わっている内に日は沈み、本隊が到着した。
晴れて天魔との面会となる。
天魔の周囲だけ地面が均されてはいたが天幕の類はない。
知性があっても魔物は魔物という事か。共同生活も先行き不安だった。
性格の不一致とかでお別れになったりして、洒落にならないね。

「話には聞いていたが魔王と呼ぶには余りに貧そうじゃな」

キョロキョロと周囲を観察していた私はその評価に肩を竦めて発言者を見る。
全長約二十メートルの蛇の胴体、空洞の眼孔に傷んだ白い髪を持つ女の顔。蛇の鱗代わりに人の手がびっしりと胴から尻尾を覆っている。
件の発言者、天魔。
ドラゴンとかペガサスとかを少し期待していた。
完璧に裏切られたけど、ここまで悪趣味とは。些か魔物のビジュアルをなめていた。

落ち着きなく動く天魔の鱗もとい手の指。波打つようにチロチロと気色が悪い。

「して、魔王よ。此処に参られた御用向きをお聞かせ願いたい」

「騎士団がしつこいから保護を求めに来たのよ。牛頭も同じ」

私は背後に控える牛頭を指し示して伝える。

私と天魔を囲むように様々な魔物が見物している。

下手に天魔を貶めると私が危ない。しかし、平身低頭するのも今後に響く。

私が問題を起こせば牛頭にも波及するのだから慎重にならざるを得ない。

「避難した魔物より聞いておる。なれど、騎士は恐れるに足らぬ」

勇ましい台詞だこと。

しかし、天魔が言うのも尤もか。

百を超える知性体が群として動けば同数の騎士は餌にしかならないだろう。

相手に天魔殺しがいなければ。

「リンド・クライツェンは手強いよ」

歴史上、天魔を唯一倒した者。

大陸中央にいた天魔、黒角を倒した青年が指揮する騎士団と言うだけでかなり危ない。

以前、私が見た黒いランスは倒した天魔の角を加工したものであり、特殊な魔力を内包する強力な武器だと村長から聞いている。

雷を自在に操る黒いランス。使い方次第では天魔と渡り合える武器だ。

「どう思う？」

リンド・クライツェンとその戦功や武器について説明し、意見を求める。

「それらの話は聞いておる。故に我等は魔王の力を知りたいのじゃ。戦力は欲しいが足手まといはいらぬ」

やっぱりそう来たか。好都合ね。

見た目の印象でこの群が実力主義だとすでに感じていた。

今の私なら知性体が相手でも楽に勝てるだろう。

「何をすればいい？　いくつか魔法が使えるけど、この場でやるとみんな吹き飛びかねないよ？」

もしくは細切れになる。

天魔の近くにいた強そうな魔物が何か言いたげに舌打ちした。

天魔がそれを冷ややかに見て私に向けて顎をしゃくった。

「良いんですかい？　俺がやると原型を留めんでしょう」

「力を見るだけじゃ。加減せよ」

天魔に釘を差されながらも、喜々として進み出たのは私に舌打ちした魔物。

ベリンダの街でも見た二足歩行するサイだ。

天魔を覗いて周囲の魔物は何か慌てている。

魔物は私を傷つけるのを嫌うからだろう。私が敵なうとは思ってなさそうだ。

サイの魔物は全体が岩で出来た斧を背負っている。

刃渡りだけで一メートルはありそうなそれを構えた時、天魔が合図する。

「始め！」

スタートダッシュを決めて私との距離を詰めるサイ型魔物は途中で無様にすっ転んだ。

角が地面を削るのを見て私は笑い転げる。

私の後ろで見ていた魔物は私のした事に気付いただろう。

「畜生。仕切り直しだ」

角の先に泥が付いているのも知らずにサイ型魔物が立ち上がる。

私が指差して笑っているのを見て歯軋りして、再び走り出した。

また転ぶ。見事なヘッドスライディングに私の笑いは止まらない。

「地味な魔法を使いやがって」

今ので流石にサイ型魔物も気付いたのだろう。

土魔法で岩を生み出して足を引っかけたことに。

隠蔽魔法陣を用いた嫌がらせだけど、早さと正確さは騎士団の魔法使い並だろう。

「叩き切ってやる！」

威勢の良いかけ声と共にかなり離れた距離からサイ型魔物が斧を振り被る。

その斧に土の魔力が集まっているのを見て取って攻撃方法が予想出来た。

「お邪魔虫、ぬりかべ」

斧が振り下ろされるや即座に球形魔法陣を展開し水晶の壁を生み出す。

土の魔力で生み出された岩で巨大化した斧はぬりかべに阻まれて停止する。

「……あれ？」

周囲が静まり返った。

表情が読める魔物はみんな目を見開いて口を半開きにしている。

サイ型魔物も目を瞬いた。

「……なんじゃ、それは？」

天魔が引きつった笑みで訊いてきた。

その問いかけで私は思い至る。

球形魔法陣を使えるようになってから魔物に出くわさなかったから、天魔たちに情報がなかったのだ。

「私の考えた魔法陣よ」

あっさりと私が言うと天魔は空を仰いでため息を吐いた。

サイ型魔物が斧に纏っていた土の魔力を手放して武器を置く。

「蛇姫様、自分じゃ勝てませんわ、こんな化け物」

心なしか自嘲気味にサイ型魔物が天魔を振り返った。

天魔は蛇姫と呼ばれているらしい。

というか、これで終わりなの？

「分かっておる。我と同等かそれ以上じゃ。勝てる通りはない」

天魔のお墨付きを得て私は魔物の群に迎えられた。

不完全燃焼である。八つ当たり気味に地面を抉ったら牛頭に叱られた。

五十八話　星と月

歓迎の宴はなく、粛々と魔物達は散らばった。
天魔からは自由に過ごせとのお達しだ。
魔物達は私との距離を測りかねているらしく遠巻きに見つめてくる。
その視線を無視して私は一人、食事を準備した。
牛頭は天魔に呼ばれて今までの旅を報告している。
魔王と呼ばれていても見た目は単なる人間の私では信頼性に欠けるという天魔の判断だろう。
知性がある分、感情を優先しがちなのかもしれない。
目的地に着いた事もあり、牛頭から荷物を全部預かっているから特に問題はない。

「魔王は何を食すのですか？」

黄金山羊が近づいてきて私の対面に腰を下ろした。
一本足だというのにスムーズな体重移動で不安定さを感じさせない。
少し感動した。

「雑食だよ。好き嫌いはあるけどね」

黄金山羊に答えつつ、フライパンに具材を投入する。
近くに川がないので鍋に使う水が確保できなかったのだ。
野菜炒めを作る私に黄金山羊が眉を顰めた。

「草に火を通すとは、変わった事をなされるのですね」
「生だとお腹を壊すのよ」

「その点は見た目通りの人間ですか」
私は紛う事なき人間よ。魔王は職業とかあだ名とかそんなモノだ。言わないけど。
「この群はどこに向かってるの？」
明らかに何処かを攻めるために編成されているのが気になって訊ねる。
魔王である私が天魔を頼るとは限らない以上、騎士団を見据えて整えた群とは思えない。
「……天魔の黒角が倒されて以降、人間共が活気づいておりましてな」
黄金山羊は南の空へ視線をやる。
「人間の街を攻める気なの？」
ヴェベストロー平原の入り口にあった城塞都市を思い浮かべる。今思えば、あの城壁は天魔達に対抗する必要から出来たのだろう。
「天魔、蛇姫様は平原の魔物が人に害される事に心を痛めておいでです」
「だから都市ごと滅ぼして人を遠ざけるのね」
「左様に御座います」
かなり荒っぽい。しかし、有効かもしれない。
この群に私がいなければ、だけど。
この世界の人間は私を殺すために騎士団を持ち出してきた。

未だに騎士団の規模が大きくならないのは私が直接的な被害をあまり出していないからだろう。せいぜいが貧相な村一つの被害。
私がこの世界に来て数ヶ月でその程度だから支配層も安心して権力闘争しているはず。
騎士団が教会所属なのも国の道具にされるのを防ぐためだろう。
だが、私が街一つ落とすと状況は変わる。
騎士団に加えて街が所属している国が討伐軍を出してくる。それはもう、ここぞとばかりに手柄を取りにくる。
魔王である私の命という手柄を求めて。

「街を滅ぼすのは勝手にすればいいけど、私は参加しない方が賢明ね」
「それは困ります。魔王様におかれましては戦場に出向き我等の旗となって頂かなくてはなりません」

黄金山羊が身を乗り出してくるのを手で制した私は天魔の意向を確かめるべきだと説明する。
元々、人間という脅威を取り除くための戦いなのに私が行ったら本末転倒だ。

「しかし魔王様が蛇姫様と接触した以上、戦場にいなくとも手を引いていると思われるのでは？」

黄金山羊が反論する。
それに違和感を覚えて私は悟られないように黄金山羊の表情を探った。

「それもそうね」

と言いながら、私は納得していない。

ただ、様子を見ようと思っただけだ。

「納得して頂けて何よりです」
「とりあえず、私の懸念は蛇姫に伝えておいて」
「かしこまりました。しばしお待ち下さい」

立ち上がった黄金山羊は私に深く礼をするとその四枚の羽で浮かび上がり、天魔の元へと飛んでいった。
黄金山羊が嘘を吐いているのかは蛇姫の動きで判断しよう。
私が蛇姫と接触した事実は魔物しか知らない。
戦場に姿のない私が裏で手を引いているなんて想像は魔物ではない街の人間に出来ないのだ。
なおかつ、魔物の索敵能力は高い。黄金山羊を始めとして空から探る事が出来る上に臭いや音に敏感な奴もいる。
ただ、私が疑心暗鬼になっている感も否めない。補強する判断材料が欲しかった。
一部の魔物達が人間と繋がっている可能性についての情報が。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「お待たせいたしました」

黄金山羊はすぐに戻ってきた。
野菜炒めを食べ終える時間もない。
私は立ち上がって土魔法で椅子を作る。
割と真剣な話だし、雰囲気作りが大事よね。
黄金山羊の嘘を見抜けるように真正面から顔を見たい。

「器用な真似を致しますね……。」
「あなたも魔法が使えるんでしょ？」

サイ型魔物は土の魔力で斧を大きくしていたし、黄金山羊も似たような技が使えそうだ。

「作るとしてもそんな細かい装飾は無理です」

黄金山羊が岩の椅子を鑑賞しながら言った。
一応は魔王なんだし、質素な椅子だと威厳がなくなるでしょ。

「魔法陣でも使えばーーって無理だね」

頭の中で魔法陣がイメージ出来るなら椅子をイメージした方が手っ取り早い。

「地面に描けば可能でしょう」

早い話、知性体でも複雑な図形は頭に描けないらしい。球形魔法陣をパクられる心配はないのね。

「蛇姫は魔法陣も使えるのよね？」

村長に魔法を教わったのでお役御免になったけど、当初の予定では天魔に魔法を教わるつもりだった。

「蛇姫様は魔法陣も詠唱も使えます。魔王様のような立体の魔法陣ではありませんが」

球形魔法陣を使えたら私も驚くよ。
あれは私が考えたんだし。

「そんな事より、蛇姫様に伝えた案件です」

それが本題だったね。忘れかけてたよ。
私は野菜炒めを口に運びつつ促す。

「結論から申しまして、魔王様には参加して頂きたい」
「理由は？」
「この度の戦で功を挙げて頂かなくては、人間の形をした魔王様を認めぬ者が出るであろう、と」

筋は通っている。

「わかった。一蓮托生という事ね？」
「天魔は仲間を見捨てませぬ故」

その仲間に私が含まれているかを訊いてるのよ。
どちらにせよ、答えは同じだ。私は備えておけばいい。

「それと、蛇姫様よりもう一つ」

黄金山羊は眉を顰めて続きを渋る。しかし、結局は言うことにしたようだ。

「明日は新月だとの事です」

空を見上げる。浮かぶ月は細い。
ただ、あれは満ちていくはずだ。

「そう。なら、星明かりを楽しむよ」

五十九話　裏切り

岩テントの中で目を覚ます。
寝ぼけた頭を気力で支えながら外の音を探った。

「そうか。天魔に会ったんだっけ」

道理でざわざわと外が騒がしい訳ね。
欠伸をこぼして替えの服を選ぶ。
早ければ今日中に街に着くから、戦闘に備えて動きやすい服を手に取った。
飾り気がないけど仕方ない。
どうせグロテスクな魔物に比べたら私なんて地味だもの。
袖を通して軽いストレッチをする。
程良く体が柔らかくなったので岩テントを畳む。

「魔王、起きた」
「おはよう御座います。魔王様」

牛頭と黄金山羊が出迎えた。
黄金山羊は恭しく頭を下げている。

「おはよう。もう出発するの？」

辺りを見回すと魔物達がかなり余裕をもった隊列を組み始めていた。
魔法を警戒して密集するのわ忌避しているのか。

「朝食を食べるのでしたら、申し訳ありませんが行軍中にお願い致

します」

……風紀が乱れそうだけど、魔王特権だろうか？
まぁ、食べられるのなら文句はないや。

「わかった。私はどこに列べばいいの？」

行軍なんて初めての経験だから適切な位置がわからない。
まさか背の順ではないだろう。

「ご案内致します」

黄金山羊が案内してくれたのは蛇姫のいる本隊の中央だった。
私の参加を決定した理由から先陣を任されるかと思っていたので少し意外。

「寝坊助じゃの」

蛇姫が見下ろしてくる。

「まだ星と月が出ていたからね」

私は牛頭の枝に腰掛けて足をブラブラさせ、余裕たっぷりに言い返した。
何故か傍らの黄金山羊が鼻白む。大方、私の態度を注意しようとして出鼻を挫かれたのだろう。
蛇姫は虚ろな眼孔を南に向けて街への進行を命じた。
私の洒落た発言に取り合う意志はないらしい。
蛇姫に合わせて進む牛頭に揺られながら私は干し肉を取り出した。

「最後の食事がこれだとしたら侘びしいね」

だから、死ぬのは御免よ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

先遣隊が戻ってきたのは空模様が怪しくなってきた昼過ぎ。

先遣隊は飛行可能な魔物だけで構成され、黄金山羊の目立つ羽も混じっている。

群から離れ、蛇姫と私の前に着地した黄金山羊は街の様子を話し出した。

「街は変わりなく、しかし遠方から騎士団がやってくるのが見えました。我々は街と騎士団の双方と相対する事となりましょう」

騎士団まで加わるのか。なんと面倒な。

つくづく間が悪い奴らね。

「どうやら、魔王が平原に入ったことを感付かれたようじゃの」

「遅かれ早かれバレていたと思うよ」

本当にどうやって付いてきているのよ。あの集団ストーカー共め。

蛇姫は本隊が着くまで街への攻撃はしないようにと黄金山羊に伝え、下がらせた。

「魔王よ。備えて置くのじゃぞ？」

「準備万端だよ。備えさせる理由を聞けるくらいに」

予想ついてるけど、暇つぶしには丁度良い。
何故、裏切ると教えたのか、答え合わせのお時間だ。

「……分からぬのじゃ」

蛇姫は正面に向けた顔を動かさずに答えた。

「どうにも胸の内が痛むのじゃ。魔王を傷つけてはならぬと命じられているように感じる」

魔物に特有の強制力のない強迫観念か。
神の仕業ね……。

「神か。そうじゃ、それが近いの」

思考が洩れていたらしい。蛇姫が勝手に納得していた。
しかし、こうなると騎士団が私を追うのも神が手を回しているのかもしれない。
何のために……？
いや、今は他にやることがある。

「私を裏切るのは確定なの？」

一番大事なのはここだ。
強迫観念に抗ってでも私を裏切るのか、否か。

「天魔の黒角が倒されて判ったのじゃ。我等魔物は人に勝てぬ。あやつ等はいつの間にか手に負えぬほどに強くなっておったのじゃ」
「それで私の首を手土産に人間と和睦する手筈ね」

身勝手な。
しかし、裏切る理由は判った。
知性体は人間を恐れている。
これでは裏切りを防げない。

「魔王にはすまぬが、逃がす訳にもいかぬのじゃ」
「でしょうね」

私を無傷で逃がせば内通していると疑われる。

「……何故、怒らぬ？」

蛇姫がようやく私へと顔を向けた。

「私は最初からあなた達を信用してなかったの、裏切られたとすら思ってないよ」

疑えば身を守れる人生だ。今更、裏切り位で腹を立ててどうするのよ。
言っている内に体がじわりと痛み出した。
神様、神様。私を痛めつけて楽しいですか？
人どころか魔物の痛みも思い出せとでも？
次の相手は蛇姫ですか。
魔王使いが荒過ぎよ。労組が無いからって油断してるならボイコットしてやるから。

「魔王、足、痛い」

つらつらと考えていた私はぶらつかせていた足が牛頭に当たっている事に気付かなかった。

慌てて謝る。

「本当に奇妙じゃ」

耳に届いた声に振り返ると蛇姫が難しい顔をしていた。
私が問いかける前に街が見えたと蛇姫が言い、タイミングを逸した私は口を閉じる。
城塞都市の前には騎士団、それらを背後に腕を組むリンド・クライツェンの姿があった。

「魔王、いるのだろう？　話がある！」

相変わらず正義に味方らしい高飛車な態度で自称『神の力の体現』が私を呼ぶ。
魔物と通じている事が私にバレていると知っているのだろうか。

「お呼ばれしたから行くよ」

蛇姫に告げて、牛頭を進ませる。
蛇姫は私を静かな声で呼び止めた。

「我を殺して群の実権を握らぬのは何故じゃ？」

そんな事したら神が私に体罰を与えるからよ。それもキツい奴。
言うつもりもないので、私は肩を竦めた。

「月は星に手が届かないのよ」

星座に月は含まれないから。
私に絆は繋がらない。

六十話　信じるよ

魔物の間をすり抜けてリンド・クライツェンの前にたどり着くまで、私は思考を巡らせていた。
魔物達の裏切りを知っても知性体の彼等を相手取って戦う気にはならなかった。
今まで会ってきた知性体は例外なく魔力を扱えた。蛇姫が統率する知性体の群と戦うなんて自殺行為だ。
幸い私は人と区別がつかない。髪と目の色は誤魔化しが利く。
だから、蛇姫達は私を生きたまま人間に引き渡さないと、影武者ではないかと痛くない腹を探られる。
全員が魔法を使える知性体の群と武器は使えても貧弱な人間、逃げ出すなら後者の方が簡単だ。
そこまで展開を読んで暴れずにいたけど、騎士団に捕まるとなれば話は別。
私と実力が拮抗しているらしい蛇姫と事を構えたくはないから避けていたけど、もう戦わざるを得ないかもしれない。
少しずつ存在感を増す痛みと戦いながら……。
私は黒いランスを構えた青年を睨みつける。
邪魔ばかりして、私に何の恨みがあるのよ。

「牛頭、このまま魔物の群を抜けてなるべく騎士団に近づいて」

私を乗せて運んでくれる牛頭に指示する。
魔物の群を抜けてヴェベストロー平原に逃げたら大群に押しつぶされる。
この場は騎士団に突撃して城塞都市を攻撃、市街地を駆け抜けて混乱を招いた後、森へ逃げるのが得策ね。
逃走完了までのシナリオを描き、イメージトレーニングを行う。

かなり厳しいけど、市街地に入るまでが勝負になる。

「久しぶりだな、魔王」

リンド・クライツェンの声で私は現実に引き戻された。
考えている内に魔物の群を抜けていたらしい。

「その場で止まれ！」
「止まって、牛頭」

声を荒げて制止を命じるリンドに素直に従った。
距離は百メートル前後か。かなり近い。
背後に控える魔物達との距離は三百メートル程、空には黄金山羊など飛行可能な魔物が数十体。
やはり、戦闘は避けられない。
前回のように空を飛べば地上からの一斉砲火を受けるだろう。
地上戦、それも混戦に持ち込む必要がある。
意識して冷静さを保つ私にリンドが再び声を掛ける。

「連れていた少年はどこだ？」

……少年？
一瞬だけ考えて、村長の事だと思い至る。口の端が持ち上がる感覚に慌てて無表情を取り繕う。
きっと、村長は騎士団と出会わずにすれ違ったのだ。そして、騎士団は私が村長を人質にしていると勘違い中。
ナイスアシストよ、村長。

「さぁ、どこだと思う？」

思わせぶりに魔物の群を振り返る私に蛇姫が上体を起こした。その巨体は魔物達の中でも異彩を放っている。

「何の話じゃ？」

蛇姫の声は困惑に彩られている。
いきなり話に引っ張り出されたのだから困惑もするだろう。

「それで、あの子に何の用？」

利用できるならいない人質だって使ってやる。

「その様子だとこの場には居ないな？」

リンドがしたり顔で言った。ご丁寧に確認するような口調。
お生憎、私相手に口で勝てると思うなよ。

「いないよ」

満面の笑みで認める。

「この場には、ね。食べられたら嫌だもの。蛇姫にも言ったけど私はここの魔物を信用してなかったの」

言外に匿っていると匂わせる。
リンドは私の発言を吟味して、否定する根拠がないのに気付いたらしい。気を取り直すように大きく息をついた。

「そうか。では魔王に提案がある」

本題とばかりに切り出されて肩すかし食った私は首を傾げた。
てっきり、人質の居場所を訊いてくるモノとばかり思っていたのに。

「まず、簡潔に言う。魔王に手を貸してもらいたい」

私はぶらつかせていた足を止めた。
このお馬鹿ちゃんは何寝言を言っているのよ。夢の世界に住民票を置き忘れたの？
無言でリンドを睨む私とは対照的に背後の魔物達が浮き足立った。
リンドの提案は魔物の予定にないのだろう。
リンドめ。私を生け捕りにする為にアドリブを挟んだのね？

「誰が手を貸すものか。私を殺しに来たくせにーー」
「事情を説明させてもらいたい！」

言葉を遮られて私は腕を組んだ。
街の住民が避難する時間稼ぎを兼ねているのだろうか。
黙考する私にリンドが説明とやらを開始する。

「事の発端は、魔物と心を一つにする者が現れるとお告げがあった事だ」

お告げって……そんなあやふやなもので私は命を狙われていたの？
神の奴『心を一つに』？　よくも世迷い言をバラ撒いてくれたな。

「そのお告げから、魔物を束ねる王が生まれ人を滅ぼすために心を一つにするのだと推測した」

それで私を殺そうと躍起になった、と。

人間側は黒角を倒したものの、魔物側からの報復を恐れていたのね。

確かに話は繋がっている。

とすれば、私に求める協力内容も察しが付いた。

「魔王である私に各地の魔物をまとめて人との衝突を避けろと言いたいの？」

「その通りだ。話が早いな」

リンドが大仰に頷く。

「どうして今更、そんな考えになったのよ？」

ほら話にしては良く出来ていると半ば感心しながら、興味を覚えて問う。

その時、唐突に気が付いた。

「……痛みが引いていく」

思わず自らの手を見つめる。そこに答えなどあるはずがない。

あるとすれば蛇姫の方。顔を振り向ければ事の成り行きを見守っている蛇姫と目があった。

もしや、私を人に売ったことを気に病んでいたのか。

いや、タイミングが合わない。私を売る事はかなり前から決まっていたはず。

この群の編成が行われたのは騎士団と同じくお告げがあったからだろうと今となっては想像がつく。

だから、神の仕業と言われて蛇姫がすんなり納得したのだ。

なら、私が蛇姫に会った瞬間に痛みを感じなければおかしい。

掴んでいた状況が手をすり抜けて暴れまわる感覚。早く取り押さ

えなければいけないのに掴み方が解らない。
だが、痛みが収まったのだからリンドの提案に乗れば解決するのだろう。
未だに誰が原因なのかも判らない。それでも丸く収めることは出来る。
私の決断一つで見ず知らずの誰かが安寧を得る。
あるいは絶望する。
私は息をつこうとして、喉がカラカラに渇いている事に気が付いた。
柄にもなく緊張しているのが、激しく打つ心臓の音で判る。

「……分かった。あなた達を信じるよ」

一言で、私を苛んでいた痛みの一切がなくなった。

六十一話　真実

さり気なく体を動かして痛みがなくなったのを確かめた私は蛇姫と配下の群を眺める。
魔物達の陣形に乱れはない。弛緩した空気も存在しない。
取引そのものを疑問視している、そんな風に見えた。
そうなると消えた痛みの原因は蛇姫達ではない。まだ疑っているのだから彼等の心配は続いている。
リンド・クライツェンと私が握手でもすれば彼等の不安も払拭できるけど、今は痛みの原因が知りたい。
この後の行動指針に直結する問題だもの。

「今後の計画を詰めたい。魔王は街に来てくれ」

リンド・クライツェンが言うのと同時に片手を挙げる。リンドの指示を受けて騎士団が左右に割れた。
一糸乱れぬ統率のとれた動き、人が集まっていると思えない。
あの間を通れとでも言うのか。
挟み撃ちにされたら終わりじゃない。
牛頭が騎士団が作った道へ動き出す。

「牛頭、ちょっと待っーーっ！？」

牛頭を止めようとした瞬間、痛みが駆け抜け、油断していた私はバランスを崩して地面に落ちた。
打ち付けた腰をさすりながら起き上がる。
騎士団や魔物達から視線を感じて恥ずかしい。微かな笑い声が聞こえるのは被害妄想だと思いたい。
しかし、痛みがぶり返したのは被害妄想ではないらしい。全身に

柔らかく爪を立てられているような、不快感。
何が何だか判らない。解決してなかったの？
タイミングにも理解が出来ない。私が騎士団の間を抜ければ交渉締結のはず。
解決していないとしたら……。

「罠ね」
「落ちた、魔王、責任」

そっちじゃないよ。

「魔王、ドジ」

少しイラついた心を深呼吸で落ち着ける。
蛇姫に会ってからの一連の行動と出来事を思い返し、その場に居合わせた者を頭に浮かべていく。
候補者各々の思惑と行動を挙げて違和感を探る。
残った者は蛇姫でも人間でもない。
そしてようやく状況が理解できた。
私は牛頭を見上げて言う。

「ありがとう」

犯人はあんたよ。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

蛇姫は私を人間に売り渡すまでの行動に矛盾がある事を自分で理

解していた。自身の痛みに向き合う姿勢があったのだから除外できる。

黄金山羊については蛇姫と同様の理由で除ける。

他の魔物は私が痛みを感じ始めた時に周りに居なかった。アリバイがあるので除外。

牛頭だけが私の傍にいた。

蛇姫が私を裏切ると確定した時、私と騎士団の取引が成功した時、再び痛みだした時。その全てにおいて共通する痛み。

「心配性だよね、あんたは」

そういえば、ベリンダの広場で騎士団に殴り込み掛ける際、言われた言葉があったっけ。

私はあの時なんて答えただろう。

「大丈夫、死ぬ前に終わらせるから」

確かこんな言葉だったはず。

私は言葉をかけて優しい魔物に背を向ける。

この痛みは魔物と人間が和解するまで続くのだろう。

これもＤＶの範疇なのか、と詮無い事を考えながら街への一歩を踏み出す。

手持ち無沙汰に見上げた空から、落ちてきた雫が瞼に当たる。

空気を読まない空模様に苦笑する。

その時、背中に何かが押し当てられた気がした。

背後の牛頭を見ようとした刹那、違和感を感じる。

違和感の正体を探るべく腹を見れば、何かが突き破っていた。

先端から私の血が零れ落ちる。

「何これ……？」

振り返って犯人を見ようにも体から力が抜けていく。
地面が近づいてくる。赤く染まった何かが背中へ抜けていく。
視界の端でリンド・クライツェンが私を指差して何かを叫んでいる。
私が倒れた地面は嫌味に柔らかく、冷たさを感じない。
足音が近づいてくる。ガチャガチャうるさいこの足音は騎士団のものだろうか。
体を転がして仰向けになりつつ、半ば本能的に球形魔法陣を展開する。
「お邪魔虫、ぬりかべ」
いつもより魔力を集め難かったのは私が痛みを我慢しているのだけが原因ではないだろう。
明らかに別の誰かが奪おうとしている。今、それが出来る距離にいるのはベリンダと牛頭だけ。
「そうだ、牛頭……。」
水晶の壁で囲いを造った私は牛頭に顔を向ける。
急拵えの魔法陣で造った壁はあまり長く保たない。
壊れる前に訊かなきゃ。
私の血を枝から垂らす心配性の魔物に。
「何で……。」
裏切ったの？
ねぇ、何で？
牛頭は言葉無く佇んでいた。
無数に光る牛の目が水晶の壁を見回して、壊れるまで時間を測っているようだった。

「牛頭？」
「天魔、言った」

魔王を騎士団の前で殺せば魔物が助かる。そう言ったらしい。
昨日の夜か。
甲高い音がしたので視線をやると水晶の壁にひびが入っていた。
二本の槍を構えた男の仕業らしい。こんな早く壊すとは、感動する程の馬鹿力ね。
霞む視界と揺れる意識、それでも私は真実に辿り着けた。
この痛みは、私が犯人だ。

六十一話　真実（後書き）

次回の更新は１１月２３日になります。

六十二話　反発

「今になって考えてみれば至極当然の流れよね」

大地に寝転がりながら自分の甘ちゃん振りを自嘲する。

騎士団にとっての私は最後まで駆け引きの道具でしかなかったのだ。

私を仲間にすると持ち掛けて魔物達の様子を窺った。

魔王が生きる道を支持するか、甘言に惑わされず計画通りに私を殺すか。

人に対しての忠誠心を見た。あの提案は検査。

街は魔物に対抗する為、周囲に壁を建てていた。それだけ恐れている。

いくら魔物が「今日から仲間です。てへっ」とか言っても信用されまい。

「ふふふ……痛っ」

黄金山羊が「てへっ」と口走る光景を想像したら、牛頭に刺されたお腹が痛んだ。

「はぁ……。」

溜め息混じりに体を起こす。

牛頭が私の首を狙って枝をしならせる。

「どっか行け、裏切り者」

正確に枝だけを火で包み、本体を魔物の群に吹き飛ばす。

同時に水晶の壁が壊れた。
大量の水を生み出した私は、切りかかってきた騎士と傭兵をまとめて騎士団の陣営に叩き込む。

「お節介神め」

なにが『人の痛みが分かるか』だ。
なにが『思い出させてやろう』だ！
私はこんなモノ思い出したくもなかったのに！！

「どうだ神様！　素晴らしい見せ物でしょ！？　あんたが用意した私の頼れる味方はみんな裏ぎったよ！！」

私は何を当てにした。
少なくとも魔物は私を傷付けない？
なに甘えてるのよ。
なにが「信じるよ」だ。騙されてるとも知らずに解決した気になって。
挙げ句の果てに騎士団に対する猜疑心を牛頭の優しさだと勘違いする。
私に味方なんか現れるはずがないのに！
この世の者はすべからく、今敵か、これから敵か、自分だけ。
とっくの昔に解ってたはず。
一人で生きて、一人で為して、そして死ぬ。その覚悟は死ぬ前に誇りにしたはずだ。

「見てるだけなら居なくて良いよ。けど、お前が手を出したらこの様だ！　どうして私を苦しめる。間違っているとでも言いたいの？
理解した気になってんなよ、自惚れ神！」

空に吐き捨てる。
高尚な信仰心を振りかざす騎士共から怒りの声が挙がる。
吠えてろ。私はお前等の上司に文句言ってんのよ。

「呪ってやる。祟ってやる！　この身が朽ちて果てようが地の底から怨嗟の声を届けてやるから！！」

全智無能の神様め。お綺麗なモノしか写さないその瞳に泥水差してよく見てろ！
私は血の味がする唾を飲み込んで周囲の敵を睨みつける。
騎士や魔物と目が合う度に殺意が向けられてくる。
私の全身を襲っていた痛みは胸の内に集まり、敵の殺意に反応しては暴れ狂う。
それでも、私の決意は揺らがない。

「……私はあんたが考えるほど素直じゃないのよ」

ドブ腐れ外道で　　神様め。
昔からこの視線を浴びてきたんだ。痛みが強まったからって膝を屈するものか。
誰も助けてくれないから一人で戦う道を選んだのに、敵は増える一方で。
立ち向かう勇気を奮い起こすために自分を裏切らないと誓った。
だから、これだけは曲げない。
私は一人だろうと満足して死んでやる。

「かかってきなよ！　裏切り者ども！！」

響く声は雨に濡れ、泥にまみれて消えてった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

始めに動いたのは騎士団だった。
大きな盾を全面に押し出して、私を魔物の群に追いやるように進んでくる。
私はお腹から流れ出す血を手で押さえる。内臓は大丈夫だろうか。
体を起こせるのだから重要な器官は無事だと思うけど、このまま戦ったなら死ぬかも。
まずは私自身が安静に出来る戦い方に持ち込むか。

「殺し屋黒子、だいだらぼっち」

三メートルの黒い人型を生み出す。
巨人の肩に立って戦場を見渡そうとした私へ空から火球が降り注いだ。
だいだらぼっちの右手を傘にして防ぎ切った私は空を見上げる。

「魔王様の上を飛ぶなんて不届きね」

黄金山羊を含む空の魔物が頭上を旋回している。火球は連中の仕業だろう。
鬱陶しいけど、防げるレベルだから後回しね。
私は服の袖を破いて傷を巻き込んできつく結ぶ。包帯の代わりだ。
出血は止まらなくとも今より少なくなればいい。
皮肉にも、この数ヶ月で痛みに耐性が付いている。

「ベリンダは何処かなぁ？」

見っけ。騎士団の中央やや城門よりにいる。
周りに杖を持った輩が居るところから察するに、魔法使いの集団か。
遠距離攻撃が可能なあいつ等から潰す。
即座にだいだらぼっちを操りベリンダの下に向かう。
私が動いたのと同時にリンド・クライツェンが何か指示したのが見えた。
それに答えたらしいベリンダが魔法陣を展開し始めた。

「……大きすぎでしょ」

ベリンダの掌握範囲は百メートルと見積もっていたけど、倍近くに見える。
半径二百メートルの魔法陣は上に乗る騎士のせいで全体が分からない。
隠蔽の効果式が一部見えている事から攻撃用だと判断した私は足下の騎士をだいだらぼっちの腕で掬い上げる。
だいだらぼっちを構成する水を制御して掬い上げた騎士を左腕全体に閉じ込める。

「どんな魔法か知らないけど、この左腕で防いでみせる！」

これ見よがしにだいだらぼっちの左腕を掲げる。
正義の味方は人質を取られるのが大好きでしょ？
特にベリンダには効果抜群のはず。
案の定、彼女が描いた魔法陣への魔力供給が止まった隙に私は距離を詰める。
途中、魔法使い達が生み出した鉄の壁に阻まれ、左腕に捕らえている騎士達を弾にして瓦礫ガトリングを繰り出す。
やかましい悲鳴を上げて鉄の壁に打ち込まれる仲間に騎士が息を

飲んだ。
鎧甲で固めてるのだから死にやしない。私も遠慮なくやれる。
「この外道！」
褒め言葉が空から降ってきて上を向けば男が二本の槍を突き出してくるのが目に入った。
私はだいだらぼっちの中に避難する。水を操って逆の肩から顔を出した私に二本槍は右の槍を薙ぐ。
私は再びだいだらぼっちの中に隠れ、だいだらぼっちの頭の上に立ち上がる。
「怪我人を相手に酷いね。トンボさん？」
水晶の壁を壊そうとしてたから私が水で流したはずだけど、よく無事だったな。
トンボは空中に土の魔力で足場を作って私に相対した。
魔法の鏡で何度かこいつの実力は見ている。
私はトンボが両手に握っている槍の刃に注意を向ける。
平らな刀身に菱形の魔法陣が刻んであった。
やっぱり、見た事ない魔法陣ね。私の球形魔法陣と同じくオリジナルか。
あるいは、一子相伝的な何か。
「人の獲物を気持ち悪い目で見んな」
心底嫌そうに言って、トンボは槍を構えた。

六十三話　毒

トンボの持つ槍には二本とも菱形の魔法陣が刻んである。
見た事のない効果式で構成されている以上、実際に発動させてみるしかないか。

「かかってきなよ。血まみれ赤トンボにしてやるから！」
「上等だ！」

挑発するまでもなかったか。
トンボが跳躍し右の槍を振りかぶる。菱形魔法陣が淡く光っていた。

「お邪魔虫、ぬりかべ」

だいだらぼっちを解いてぬりかべを発動、水晶の壁を挟んでトンボが右の槍を叩きつけてくる。
水晶の壁に放射状の亀裂が走った。

「また、この壁か！」

歯を剥き出しにしたトンボが左の槍も振り下ろすとぬりかべは粉々に砕け散った。
水晶ってかなり硬い鉱物なのに、こうもあっさり……。
風の魔力で地面に降り立つ。
騎士が突き出してくる槍や剣を横風で逸らすものの、いくつかは避けられずに細かい切り傷が出来た。
気にせずに掌握範囲ギリギリ、半径二十メートルの球形魔法陣を展開する。

土と水の混合魔法。

「お邪魔虫、」

対集団用。

「ヒダル神」

直後、球形魔法陣の内部に水が満ち、私を囲んでいた騎士が溺れ始める。

「させるかぁ！」

リンド・クライツェンの声に振り向く。

魔法陣の外でリンドの持つ黒いランスが青い火花を放っていた。

そうか、あのランスは討ち取られた天魔、黒角の一部。

特殊な魔力、確か雷の魔力が内包された武器。

……雷？

「この剣借りるよ！？」

私が着地した時に倒した騎士の物だろう剣を蹴り上げる。

「神の力を受けよ！！」

黒ランスが突き出されるや否や雷鳴を伴って高圧電流が放たれた。

私の集中が途切れた為にヒダル神の球形魔法陣が解けてしまった。

代わりに私は無事だったから良しとする。

「馬鹿な……直撃だったはずだ」

「落ち着け！　剣を盾にして逸らしたな？」

悠長に答える余裕もないので含み笑いだけ返す。

雷だろうが所詮、電気。流れやすい方に進むのを知っていれば電導率の良い物体で逸らせばいい。

ただ、不意討ちされたら堪らない。さっさと他の騎士と混戦に持ち込んだ方が無難ね。

リンドを警戒しながら後退する私は一瞬だけ地面に影が走ったのを見逃さなかった。

とっさに横飛びで離脱する。間をおかず、私の居た場所に隕石染みた速さでトンボが着地した。

「意外と隙がねぇ。リンドの大将は援護を頼む。カマキリ、早く来いよ！」

トンボが呼び掛けると騎士の中から一振りの大鎌を肩に担いだ女が出てきた。

大鎌には楕円形の魔法陣が刻んであり、すでに発動しているらしく白い輝きを放っている。

また、厄介なのが出てきたねぇ。

あの大鎌に描かれた魔法陣の効果は分かっている。魔法の鏡で見た時は目を疑ったもの。

「カマキリさんの持ってるそれは物質を自在に素通りする大鎌よね」

あれに対抗するためにヒダル神を開発に踏み切ったのだけど、リンドやトンボを同時に相手取るのは面倒ね。

逃げ道を探す私にトンボが声を掛けてきた。

「おい、魔王。こいつらに何しやがった？」

ベリンダが来るまでの時間稼ぎのつもりか。
こちらとしても逃げ道を探す時間が増えるのでありがたい。

「溺れさせて終わりってんじゃねぇだろ？」

重ねて問われて、私は苦笑する。
気になるのも無理はないか。
ヒダル神を受けた騎士は呻くだけで立ち上がれないでいる。
溺れたのなら気絶でもしない限りは咳き込む程度で済むのだから、一人も立てない今の状況は異常さが際だっている。

「簡単よ。浸透圧差で水を奪い取ったの」

私は肩を竦めて答えた。

「極度の脱水症状を起こしてるから放っとくと死ぬよ」

お邪魔虫、ヒダル神の正体は魔法だからこそ可能な超高濃度の塩水なのだ。
魔法で生み出した水は術者の集中が切れると魔力に戻る。つまり、魔法の水で溺れても術者が魔法を解けば水そのものがなくなり呼吸が出来てしまう。
その点、ヒダル神は逆に対象の体内から水分を抜き出す魔法。取られた水分は体内に戻ることはない。

「エグい事しやがる」

苦い顔でそう言ったトンボがカマキリと頷き合った。すぐに二人は正反対に走り出す。

私を挟み撃ちする腹だろう。

「殺し屋黒子、影法師」

等身大の人型を二十体、周囲に生み出す。

ヒダル神で倒れた騎士の武器を各々に持たせて武装させる。

これならリンド・クライツェンが放つ雷に対して避雷針の役割も果たすだろう。

雨足が次第に強くなってきている。視界は悪くなる一方だ。

この場を抜けられれば、逃げ切れる。

希望を抱いたその時、私は視界が揺れていることに気が付いた。

貧血で目眩を起こしたかと頭を押さえ、揺れているのが地面だと分かった。

「……地震？」

かなり大きい。

ふと足元を見た瞬間、噴火のような派手な音と共に背後から土埃が上がる。

「何がーーっ！？」

背後を見るために慌てて上半身を捩ったせいで腹部の傷から激痛が突き抜けた。

何とか膝を突くのは避けたものの、致命的なミスだったのは間違いないようだった。

先が見えなくなりそうな程の見た事のない魔力が私の周りに浮かんでいる。

紫色をしたそれは地面を突き破って現れた、人間の手を鱗に持つ蛇の天魔が吐き出していた。

「蛇姫の特殊な魔力、ね」

効果が分からない。雷とは明らかに違うようだけど、一体何よこれ。

「毒じゃよ」

端的に告げられた事実に私は血の気が引く音を聞いた。

すぐに鼻を手で覆い隠そうとして、無駄だと悟る。

傷口から入ったらおしまいだ。

「我の毒霧はすでに貴様の体内じゃ。止めは人間に任せる手筈故、しばらくは保つが時間の問題じゃの」

勝ち誇った物言いに悔しさがこみ上げて拳を握る。

……迂闊だった。

「術者の意識がなくなれば毒は魔力に戻るはずよね」

最優先で蛇姫を殺せばいい。

幸い、リンド・クライツェンと愉快で物騒な仲間達は影法師に手一杯だもの。

にわかに殺気立つ私に蛇姫が肩を竦めた。

「術者は我だけではないのじゃよ」

「は？」

それどういう意味よ。

知らない内に魔物が近くまで来ているのかと思い、辺りを見回し

ても蛇姫の他に魔物はいない。

「人には素晴らしい魔法使いがおるのじゃ」

困惑する私に蛇姫は笑みを浮かべた。

「仲間を持たぬ魔王に分からぬのも通理」

簡単な事じゃ、と蛇姫が言う。

「ベリンダなる娘と協力しておるのじゃ」

「何それ……。」

人と魔物はいがみ合ってたのに、こんな簡単に連携するの？

手に手を取って魔王退治ですか。

「……痛っ」

黒い虚ろな何かが膨れ上がって胸が裂けそう。

たかがこの程度で喚起された強烈な疎外感と孤独が私を苛む。

本当にこんなモノ思い出したくなかった。

絶対に満たされない、がらんどうの心。もう一度忘れることが出来たらどんなに楽か。

「毒が回ってきたようじゃの」

ずっと前から服毒中よ。

処方箋には孤独とか書いてある、どぎつい奴を生前から飲んでいたみたいね。

「もう、どうでもいいや」

私はここで死ぬとしよう。
この胸にある空洞を満たす者は現れない。
せめて、一人分。一人分だけ空虚を埋めよう。
最後まで私は私を守って死ぬ。

「心が満ちる事はないけど、私で満たすしかないのよ」

心の粉飾決算だ。過剰計上してやる。

「……ふふふ」
「何がおかしい？」
「さぁ？」

私にも分からないよ。

六十四話　風狸

蛇姫がわずかに後退して魔力を集め、臨戦態勢をとった。
私に逃げる意志が無くなったのを敏感に察したらしい。

「死が決まっても、まだ抵抗するとはの。守る仲間もおらぬのに必死になってどうするのじゃ」
「誰かを巻き込んで戦うのがそんなに高尚な事なの？」

蛇姫に答えながら、私は身に付けていた皮袋を捨てる。
今から死ぬんだから必要ない。あるだけ邪魔。
戦闘に使える小道具が入っている皮袋を残して当たりにばらまく。

「ただただ群れてるだけのお前等がどんなに無力か、これから教えてあげるよ」

水筒の水を飲み干して蛇姫に放り投げる。
それが戦闘再開の合図になった。

「ほざくな張りぼて魔王めが！」

言葉と共に蛇姫が地面を疾駆する。鱗代わりの人の手が地面を撫でるようにしてその巨体に推進力を与えている。
私は風を纏って右に飛び退く。
私の力量では球形魔法陣と併用して他の魔法陣や詠唱を使えない。使えるのは魔力を直接使う瓦礫ガトリング等の単純魔法やあらかじめ彫ってある魔法陣を用いる岩テント等だ。
リンド・クライツェン達を足止めしている影法師は球形魔法陣によるものだから私の直接的な攻撃手段はせいぜい瓦礫ガトリングだ

け。
立て続けに突進してくる蛇姫を避ける。
それをみて確信した。蛇姫も私にかけた毒の魔法を解けず、魔法を封じられた状態なのね。
強風を纏って逃げ回る私は落ちている兜や武器を巻き上げていく。
私と蛇姫の戦いに飛び込めずにいる騎士に向けて、ヒダル神を受けて倒れている持ち主を吹き飛ばす。
倒れている騎士をあらかた片付けると足の踏み場が確保できた。

「お掃除は終わりっと」

ゴミが多くて嫌になっちゃうね。

「埒が明かぬ。ベリンダよ毒の維持を頼む。我は魔法を解くぞ！」

騎士が巻き添えになる心配が薄れたからか、蛇姫が毒の魔法を解いて水の魔力を集めだした。
私はリンドやトンボ達の位置を確認して蛇姫を挟める位置に回り込む。
常に強敵と一対一に持ち込まないと不意を打たれる恐れがある。
皮袋から岩テント用の丸い石を取り出す。
蛇姫の魔力量からして、この魔法陣を使わないと防げないだろう。
蛇姫が集めた水の魔力で円形魔法陣を正面に構築し、詠唱を開始する。
その魔法陣を読み取れば沸騰水を使った魔法だと分かる。

「それは火を呑み沈める覇者。飲んで鎮めよ、水流のアギト！」

蛇姫が魔法陣を発動させるのを冷静に見届けながら、岩テント展開、Ｖ字型の岩壁が私の前に出現した。

蛇姫の放った水魔法は熱湯の鉄砲水、触れたら火傷は免れない。
私に止めを刺すのは人間に任せると言ってたのは本気らしい。だけど、代わりに重傷狙いというのも容赦ないね。
蛇姫の後ろで最後の影法師が消えた。術者の私が離れすぎたせいだろう。
手の開いたトンボが空に飛び上がる。

「つまんねえ魔法をちまちま連発しやがって」

トンボが槍を背中に担いだ。あの姿が二つ名の由来なのね。
槍に描かれた菱形の魔法陣が光る。
地上ではカマキリとか言う女が大鎌を肩に担いで走ってくる。
蛇姫が水魔法で私の足止めをしている内に囲むつもりか。
出し惜しみをしている暇はなさそうね。
腰に下げていた大きめの皮袋の口を開けて丸く削った木を取り出し、空に放り投げる。
岩テントと同じように球形魔法陣を刻んだボール状の木が十個、空に浮かぶ。
それに風と水の魔力を素早く込めて、詠唱を始める。

「飛べ、飛べ、はしゃげ。空を舞え、飛ぶ鳥落とす勢いで」

詠唱が進むに従って丸い木を頭にしたムササビが形成される。

「さぁ、飛べ。風狸！」

名前を呼ばれた途端に空を飛び回る十匹の風狸。
トンボは舌打ちして避けている。それを見上げて私は笑いをこらえた。
実はあれに殺傷能力はないのだ。ただ飛び回るだけ。勢いのある

詠唱は虚仮威しよ。
頭にある丸い木が核でそれを壊さない限り自己修復して飛び回る。
『ひたすら目障りであれ！』がコンセプト。
そうこうしているとカマキリがすぐ近くまで来ていた。大鎌が振り抜かれる。
物理的な防御は効果がない、物質を自在に素通りする大鎌。
ヒダル神を構成する暇はなく、私はしゃがんで鎌の下を潜った。
下手にこの場を動くと岩テントの壁からはみ出て、蛇姫が発動させ続けている水魔法の餌食になる。
しゃがんだ体勢のまま、風魔法で加速した足払いをかける。
上に軽く飛んで足払いを避けたカマキリが私の胴を切り払うべく大鎌を薙ぐ。
地面の上で前転してカマキリに肉薄し、体のバネを利用して伸び上がる。
「持ち主は素通りしないでしょ？」
彼女の顎を狙い裏拳を放つ。
素人の私でも風魔法を使い、拳が砕けるのを覚悟でやれば脅威だろう。
かなりの速度で繰り出したにも関わらず、仰け反ってかわしたカマキリは流石だ。
しかし、私にとっては十分な隙が生まれた。
「星になーれっ！」
言葉が終わる前に円形魔法陣が足下を飾り、カマキリが空に打ち上がった。私の掌握範囲である二十メートル上空までの旅を楽しんでね。
その後は落ちるけど。

「カマキリ！？　あのバカ！！」

花火よろしく小気味良い風切り音を残して空高く進んで行く相棒に慌てたトンボが追いかける。予想通りの展開だ。

それを確認した私は素早く次の行動に移る。

円形魔法陣を消し、球形魔法陣を展開。

「お邪魔虫、ぬりかべ」

水晶の壁が蛇姫の水魔法を防ぐ。入れ替わりに岩テントの核を回収し他の三個の核と一緒に土の魔力を込めながら空に打ち上げる。

「トンボ、避けろ。罠じゃ！」

蛇姫が気付いて叫ぶ。風狸が飛び回る音で聞こえないと思うよ。

トンボが自分達の周りに魔力レールが敷かれているのを発見して、槍を前で交差させた防御姿勢を取る。

私は彼らを指さして満面の笑みを浮かべ、言う。

「墜ちろ、イカロスもどきめ」

岩テントが発動しトンボとカマキリを内包する。閉じ込めに成功した。

そして、岩テントは核である丸い石にかかる重力に従い落下を始める。

中にいる者達も落下の衝撃からは逃げられない。

外から攻撃を加えても容易には壊れず、威力のある攻撃では中の二人も危険。

岩テントの外にいる騎士や魔物にも為す術はない。

「まずは二匹、ね」

派手な落下音を聞きながら私は呟く。

私はことさらにゆっくりと振り返り、呆然としている騎士に聞こえるように宣言する。

「誰かを庇うなんて馬鹿のする事よ」

六十五話　暗器

トンボ達、馬鹿共を嘲笑い、私はリンド・クライツェンを睨みつける。

真っ向から睨み返してくる黒いランスの青年は声を張り上げる。

「各々、魔法使い一人を含む五人組で行動しろ！」

リンドの命令に騎士達は迅速に動いた。思わず感心するくらいに良く訓練されている。

蛇姫がさり気なく後方に下がっていく。魔物達を指揮するためだろう。

それを見て、私は悪巧みをした。

実行するため、空を無秩序に飛んでいた風狸を見咎められないようにリンドへ向かわせる。

「蛇姫、パフォーマンスは終わりかな？」

まずはジャブ、揺さぶりをかける。

騎士達は魔物を完全には信用していない。戦闘の片手間に観察すれば分かる程あからさまに疑っていた。

だからこそ、天魔自身が身を持って味方だと証明する必要があったのだろう。

戦闘開始直後からベリンダと連携できたのも事前に話し合っていたからだ。

魔物側の協力姿勢を見せ、私を討伐した後の交渉を有利に進めるための政治取引だと想像できる。

取引である以上は人間にも利点がなければおかしい。

蛇姫という戦力を使える事だと思っていたけど、それなら今の状

況で蛇姫が自群に引き上げる訳がない。
だから、他にあるのだ。
私はそれに心当たりがあった。
異なる二つの指揮系統がある群は混乱を招きかねない。故に騎士と魔物は分かれて戦うのが理想だ。
騎士が攻め続けるのは無理。背後に守るべき城塞都市があるからだ。
そこで、魔物群と交代で私の体力を削る事にしたのだろう。
交代前に私が殺されると台無しだから、蛇姫が序盤で出てきた。
目論見通りにいくと思うなよ。
私は蛇姫に微笑みかけた。

「後はゆっくり高みの見物かな。人にだけ損害を受けさせて、魔物側は武力をちらつかせて有利に交渉を進める気でしょう?」

出てきなよ、魔物の群。人間と一緒に戦ってみろ。
現場は大混乱になるよ?
出てこなければそれで良し。騎士は魔物を警戒して全力を出せなくなる。
お好きにどうぞ。
表情を変えない蛇姫はリンドに目をやった。
利害関係から考えても人間側の指揮官であるリンドでないと収まりがつかない、そう思ったのだろう。
私の読み通りの展開。
騎士達がリンドに注意を向ける。私を警戒してもいるけど、注意力が散漫になっていた。
お腹の傷を押さえる振りをして服の裏ポケットから小さな矢を取り出す。
服で死角を作りながら隠蔽の魔法陣を展開し、風魔法で放つ。
狙いは勿論、

「ーーリンド、避けるのじゃ！」
「なっ！？」

……無駄よ、見えないから。
衆人環視の中で、リンドがわき腹を鎧ごと割かれて落馬した。
一瞬の沈黙の後、時が動き出す。
近くにいた騎士がリンドに駆け寄り、彼らを守るべく別の騎士が私と蛇姫に武器を向ける。
蛇姫がゆるゆると力なく首を振った。

「何をしたのじゃ、魔王」

私の唇は自制も効かずに笑みを形作る。
笑い出しそう。お腹が痛むから嫌なのに。
でも、無理だ。我慢できない。

「くっふふふ……あはははは！」

傷口を押さえながら、肺の空気をすべて使って私は笑う。

「見た？　傑作！　何が起こったか分からないって顔してるの、分からないんじゃなくて理解できないのよ。ばーか！！」

周りの騎士が取った行動も笑いを誘った。蛇姫に武器を向けるとは、誰が敵かを見誤っている。
私は蛇姫に武器を向けている騎士を指差す。

「あれが決定的な証拠よ。仲良しごっこをやった所で心の内は隠せない。武器を向け合うのがあなた達の仲間意識なの？」

化けの皮が剥がれたね。
あぁ、馬鹿らしい。素晴らしく馬鹿馬鹿しい。テンション上がる程に馬鹿げてる！

「みんな裏切り者よ！　信じ合える訳ないの、あれが証拠よ」

私だけじゃない。私だけじゃないんだ！
溢れる涙の原因はお腹の痛みか、笑い過ぎか、別の何か。
笑い続ける私の声に別の声が混じったのはその時だった。

「ーーあんたと一緒にするなよ。あたしは違う」

振り返る暇すら与えられず、高さ十メートルはあろうかという津波に私は呑み込まれた。
微細な泡の向こうに術者の顔が見える。
魅惑的な白い肌、燃え盛る炎より力強い赤い髪、何か覚悟を決めたらしい瞳が私を射抜く。
……ベリンダ？
あの子、あんな精悍な瞳してたっけ？
溺れる私の意識はそのまま闇に吸い込まれた。

六十六話　あの日

私はげた箱の前で上履きに履き替えた。脱いだ靴を蹴り飛ばした誰かの顔は覚えていない。
教室に入るなり刺さる視線。

「来たし、うざ」

という日課の挨拶。
机の上にある、汚い字で罵詈雑言が寄せ書きされた紙切れに一度目を通し、丸めて屑籠に投げ入れる。放物線を描いて上手く入った。
幸先は良さそう。
椅子に座ろうと背もたれを掴んだ時、指先に鋭い痛みが走った。人差し指に小さな血の球が浮かぶ。綺麗な半球状の鮮やかな赤い血。
私を遠巻きに眺めるクラスメイトが下品な忍び笑いを浮かべている。
椅子の背もたれを確認してみる。
死角になる部分に無数の画鋲が張り付けられていた。

「ぷっ。固まってるし」

後ろで頭の軽い男子が噴き出す。
この嫌がらせは始めてやられた。独創性はあまり感じない。次からは気を付けるとしようか。
手早く画鋲を回収して屑籠に棄てる。物が物なので丁寧に紙で包んでおいた。
私は気の利く良い娘である。画鋲を頭の可哀想な奴らに差し込んであげようかとも思ったけど、辞めておいた。

ネジの代わりに画鋲を刺しても効果は望めないだろうから。
古人曰わく『バカは死ななきゃ直らない』そうだから、いざとなれば殺せばいい。きっと感謝されるだろう。

「ノート新しくなってるし」
「破く？　落書きにする？　燃やすのもよくない？」

よくないよ。お馬鹿ちゃん達。
三人寄れば文殊の知恵だけど、水に水足しても水なのね。

「返してほしい？」

席に戻った私にノートを掲げて汚い笑みを浮かべるクラスメイト。
その仲間は一歩後ろにいる。
ノートを投げつける時に振り被った手が当たらない位置ね。

「ほら『返して』って言えよ」

さて、何を返してもらおうか。
安らぎ？
信頼？
時間？
思い出？
友達？
最後のは最初から持ってなかったから今の状況があるのよね。私としたことがうっかりしていた。
人間大のゴミをもらってどうする。

「笑ってるし、キモいな」

嘲笑ってますよ。本当に気持ち悪い方々ですね。死体の方が口を利かないだけマシよ。
死体に変えてあげようか？
こいつらが死ねば次の被害者もでない。とても良い案だと思う。
私が罰せられさえしなければ、ね。

「何とか言えよ」

肩を小突かれる。
バランスを崩して他人の机に手を突くと持ち主が嫌そうな顔をした。

「人の物汚すなし」

それ何語よ。語尾がおかしいのか言語野がおかしいのかどっちなの？
性格と頭、顔が悪いのに言葉もおかしいとは可哀想に。

「次体育だし、早く着替えよ」

私にノートを投げつけてお馬鹿ちゃん達は解散した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

体育の授業が早めに終わり、更衣室に戻った私はため息をついた。

「こんな事だと思った」

予想通りに制服が盗まれていた。
体育着に着替えろと教師が常より五月蝿く言うからその通りにしたのにこれだもの。
仕事が早すぎないだろうか。
ない物は仕方がない。ジャージで教室に戻るとしよう。
更衣室を後にして教室に戻る。
中ではまだ男子が着替えているのが話し声で分かった。
手持ち無沙汰に廊下から窓の外を眺める。
さほど広くもない道路を一組の夫婦が歩いていく。男性の背中には一歳ほどの子供が背負われていた。
男性が幸せそうな顔で唇に手を当てる仕草を女性に見せる。
背負われている子供が寝ているのだろう。
穏やかな微笑を女性が返していた。
私のいない風景は何時も優しげで暖かい。
欠伸を噛み殺して空を見上げる。
青い空が能天気に太陽の光を届けていた。

「いた、いた！」

濁った声がして廊下に視線を戻す。
クラスメイトの女子が数人、こちらに向かってくる。
既に制服を着ているけど髪などを見れば急いでいた事くらい分かる。
怪訝に思う私を囲んだ女子は逃げられないように距離を縮めてくる。

「男子、ドア開けて」

手が余っている女子が声をかけると教室のドアが開かれる。
男子は着替えているとばかり思っていたけど、勘違いだったよう

だ。男子は全員、体育着のまま。
こいつら私に何をする気よ。
小首を傾げる私の腕を取った女子に反発してその手を振り払う。
何か分からないけど嫌な予感がする。
一連の流れからみてもかなり計画的な嫌がらせなのは間違いない。

「暴れんなし」
「男子も手伝って」

汗臭い男子が加勢して、私は教室に押し込まれた。
取り押さえようとしてくるクラスメイトを振り払い教室の窓に駆け寄る。四階だから逃げるのは無理だと気付いても後の祭り。

「……何の用？」

教室の扉を閉めた主犯格の女子に訊く。
しかし、それに答えたのは別の女子だった。

「脱げ」

告げられた一言に体が硬直し、鳥肌が立つ。

「ぬーげ、ぬーげ」

手拍子を始める女子に男子が唱和し始める。
体格の良い男子がジリジリと近づいてくる。
教室の扉が開いて数学担任が入ってきた。教室内の状況に眉を顰めはしたけど、止める様子はない。

「ぬーげ！　ぬーげ！」

絶対に嫌。
この一件には体育教師も絡んでいるはずだ。エスカレートするのは目に見えてる。
……もう、いい加減にしてよ。
私は近くの机を思い切り蹴りあげて男子の動きを止め、椅子を持ち上げた。
机を避けて姿勢が不安定な男子にその椅子を振り抜き、床に転がった彼に追い討ちをかける。
手加減抜きで叩き付けた椅子が人の頭に当たる硬い感触。
一拍の間を空けて女子が悲鳴を上げた。
気にしてられない。早く、こいつら全部倒さないと。私が危ない。
近くにいた痩せた男子に椅子を投げつけ、別の椅子で教室の扉を目指す。
主犯格の女子が怯えて扉を開けようとした。
後ろから椅子で殴りつけて床に倒す。

「やめてよ。何でこんな事すんの!?」

倒れた女子が妙な言葉を口走った。
私は首を捻る。こいつは自分達が何をしてきたかも理解できないのね。

「殺さないと、あなた達は反省しないでしょう?」

青ざめた顔で尚も言葉を発しようとした女子に蹴りを入れて黙らせる。
自分でも感心するくらい冷静だった。
私を制止する声も確かに聞こえていた。しかし、誰の声か判別出来ない。自己保身に必死な教師や罵声と暴力の結果に怯える同級生、

いずれかが声の主だと思うけど、あるいは私に残された良心の欠片が断末魔を上げたのかもしれない。

「どうでもいいや」

呟いて私は振り上げていた椅子を力の限り叩きつけた。
しかし、横から椅子が投げつけられ、私の椅子が弾かれる。
犯人を見てみると見覚えのある男子だった。
何時だったか、私に告白した男子生徒。

「止めろ。頼むから」

こいつ彼の彼女だったのか。
そういえば、彼を巻き込まないようにと告白を断ったのよね。
私は足下に倒れている女子から数歩離れる。
男子は私を警戒しながら女子を抱き起こした。
……私のいない世界は何でこうなのかな。
私がいなかったらもっと綺麗な世界になるのだろうか。
そんな美しい世界に住めないのは残念ね。

「……壊しちゃえ」

呟いて、私はきびすを返す。廊下の窓なら下は路面、つまりはコンクリートのはず。
頭から落ちれば死ねそうね。
学校で自殺すれば色々と調べられるだろう。その過程でいじめが明るみに出るのは想像に難くない。
私が自殺しなければ、殴られた奴らですら口を割らない。教室での暴行事件はもみ消される。そして元の生活に逆戻り。
私が死ねば同級生は世間から罰を与えられるだろう。

ジャージを着ていて良かったと、場違いに安堵して路面を見下ろす。

私は窓を開き、飛び降りた。

「ー神様いい加減にしてよ」

ベリンダが起こした津波で意識を失いかけたのか。

気絶中まで出しゃばるなよ。

円形魔法陣を展開し土の魔力を込める。

発動した瞬間、まばゆい光と共に私を沈めていた水が吹き飛んだ。

胸の内にある暗い物もこんな簡単に吹き飛べばいいのに……。

六十七話　結末

私を包んでいた水が吹き飛ぶと騎士達が武器を構えた。
ベリンダが私に一撃入れたからだろう、士気がいくらか回復して冷静さを取り戻している。
ベリンダが躊躇なく水魔法を解除した。
発動させ続けていれば水酸化ナトリウムの雨が降ったのに、残念ね。
ベリンダにならって私もナトリウムを生み出していた土魔法を解く。

「ベリンダ、久しぶりね」

声を掛けながら周囲を窺う。気絶していた時間はあまり長くないらしい。
これならリンド・クライツェンを撃ち抜いた矢の正体はバレてなさそう。
少し頭がクラクラするのは出血の問題だ。思考も上手く纏まらない。
そろそろ、限界か。
私が懐に手を入れたのを見て、ベリンダが目を細める。

「リンドをやった技か」
「半分だけ、正解ね」

この矢はあんな直接的な使い方を想定していないの。
これからやるのが本来の使い方だから。

「風狸、おいで」

術者の私が気絶しようと、風狸は自動で動く。
最悪、私が死んだとしても。
だから、私が死んだ後も戦ってもらう。
私は懐から取り出した小さな矢を空中にばらまいた。

「進化、かまいたち」

その胴体に矢を取り込んだ風狸が次々と姿を消していく。
騎士の何人かが空を探すけど見つかりはしない。
矢には私の血で結界の魔法陣を描いてある。
だから、リンドは避けられなかったし、蛇姫はいち早く察する事が出来た。
この戦場でかまいたちを避けられる人間は私とベリンダだけだ。

「卑怯な手を使うな。あんたらしいと言えば、らしいけど」

ベリンダも矢の仕掛けに気づいたのか、そう言って肩を竦める。
魔力の流れでかまいたちの位置を把握しているのだろう。掌握範囲が狭い他の魔法使いには出来ない芸当だ。
私は風の魔力で近くに落ちていた剣を引き寄せ、握る。
私の予想ではかまいたちに進化させた程度でベリンダの前では無力だ。

「あんたには悪いが、全部落とすよ」

言葉通り、ベリンダが十個の火球でかまいたちを狙い撃つ。
一瞬にしてかまいたちは灰となり、散った。
灰の白に混じって私の頬に落ちてきた冷たい物に空を仰ぐ。

「雪、か……。」

白い冷たい。

神様があの白い空間に手招きしてるのかな。

気は進まないけど、お招きに預かりますか。

体力も底を突きかけているし、頭も重い。それにここは酷く寒い。

「ベリンダ、二つ訊きたいことがあるの」

「なんだ？」

私が立ってるだけで精一杯だとベリンダも分かっているのだろう。

気負った様子もなく促してきた。

「『あんたとは違う』って何が違うの？」

支えにした剣がぐにゃりと曲がった気がした。慌てて体勢を立て直すも地面に膝がつく。

何時の間にか、胸の痛みを残して体の痛みが消えていた。

大分弱っている。力なく、私は苦笑した。

「あたしはあんたみたいに強さをはき違えたりしない」

「言うね。強さの定義が違うだけなのに、さ」

息を強く吐いて立ち上がる。

こんな形で死んだら過去の自分に顔向け出来ない。

「もう一つの質問は何だ？」

「賭をしない？」

直接は訊かない。訊いても納得できない。

私の痛みはいつ始まったのか、知るための質問だから。
ベリンダの広場で感じた痛みは、嫉妬ではなかったか。
ベリンダは私ではなく広場を選んだから。
オイゲンと白い池で感じた痛みは、怒りではなかったか。
オイゲンはただ裁かれるのを選んだから。
カーリン達の輪廻に感じた痛みは、疎外感ではなかったか。
彼女達は互いを思い合い完結していたから。
もしそうなら、私がこの世界でやった事に意味がなくなる。
だから、意味を確認するためのーー

「賭？」
「そう、賭よ。私の魔力を奪ってみて」

言いながら、私は剣を構える。曲がってはいないようだ。

「ベリンダが全力でやれば私から魔力を奪えるでしょ？」
「その代わり、あたしは無防備になるな」
「信頼出来る仲間がいても怖いかな？」
「……なるほど。その賭やろう。こちらの手間も省ける」

手間？
あぁ、ベリンダも分かってるのね。
この賭の意味。

「それじゃあ、始めましょうか」

全力で風の魔力を集め、私は突風をまとって飛び出した。
ベリンダが私の魔力を奪い無力化を計る。距離が縮まるにつれて
私から魔力が失われていく。
魔力が全て取られた時、ベリンダは剣の間合いに入っていた。

「もらいっ！」

力の限りに振り下ろした剣は脇から飛び出した何者かに弾かれた。
既視感を覚える状況、予想通りの展開。

「やっぱり、ハンネスも居たのね」
「切る相手が此処にいるんでな」

私は弾かれた剣を再び振り下ろそうとした。しかし、剣は天を突いたまま動かない。
不思議に思って見上げれば、蛇姫が鱗の手で剣を掴んでいた。

「魔王よ、観念するのじゃ」

賭は私の負けらしい。
少なくとも、生きた意味は確認できた。ここで死んでも悔いはない。
私は剣を手放す。
ここからは延長戦。
この胸の痛みと今までの自分に報いるための戦いだ。

「最後までーー」

私は一人で。
腰からナイフを抜く。
ハンネスがベリンダを庇って前に出る。
暗闇に狭まっていく視界にそれを納めて私は笑む。
本当に私が居ない世界はあんなのばかりだ。
それでも、あの世界にベリンダを放り込んだのは私だから、冥土

の土産としては丁度良い。
スパイス代わりに皮肉も効いてる。
小さく笑いながら、私は自らの胸にナイフを突き立てた。

六十八話　エピローグ

「ただいま」

白く甘ったるい空間で目が覚めて、私は言った。

「浅はかな魔王様が帰ってきたよ」

お出迎えも無しとはけしからん。

神は何も言葉を返してこない。無言で私に先を促している。

もちろん、乗ってやる義理もないので私は黙りを決め込んでやる。

「……やれやれ、戻ってくるのが随分と早いな」

言葉とともにゆったりとしたローブに身を包んだ男が現れた。

出たな、全知無能。

「お小言を頂戴しに参りましたよ、どぶ腐れ外道神」

腕を組んで言い返す。

売り言葉に買い言葉。ちなみに私のはタイムセール中なので数で押す。

「浅慮と言われた理由は分かったか？」

「誰かに助けを求めれば良かった、そう言いたいんでしょ」

だから私はベリンダと最初に知り合ったのだ。

彼女は広場から連れだしてくれる相手と理由を欲していた。

私が友人となり魔王と誤解されて追われていることを説明すれば、

あるいは仲間になっていたかもしれない。
誤解だと言え、私に見せた夢は神の忠告だった。声を上げろと教えていた。

「けれど、私は広場を壊してベリンダを騎士団に入れた」

だから、神はオイゲンと私を引き合わせた。
オイゲンは逆恨みで殺されようとしていたから。

「私が一人で悪意を背負うとどうなるか、オイゲンで示すつもりだったんでしょう?」

神が頷いた。
それを確認して私は口を開く。

「まさか、オイゲンに向けられた悪意まで背負うとは思わなかった?」
「あぁ。よもや、あの場面ですら悪役に徹するとは、な」

だから神は、悪役を続けていた村長と私を引き合わせた。
悪役を続けた先にあるのは恨まれ続ける孤独な死だと、村長の最期を見届けさせて私に教えるつもりだった。

「残念だったね。私が生き返らせちゃったよ」
「……あやつは二人に謝ったぞ」

良い知らせね。
きっとあの爺さん、どんな顔していいか分からずに近くの森をさまよった事だろう。
私は笑いをかみ殺す。

「告白された夢はカーリンとクルトを示していたのかな？」

もしあの告白を受けていたら、私は味方を手に入れていたかもしれない。

丁度、カーリンにとってのクルトのような味方。

「けど、私はあの時ですら悪役を貫いた」

そして、神でさえ収拾をつけられなくなった。

それが、牛頭を含む魔物の裏切り。

「違うな」

初めて神が否定の言葉を口にした。

「あれがなければ、貴様は痛みから目を逸らし続けただろう」

つまり、お前の仕業だったわけだ。

「予想していたのだろう？」

「まぁね。でないと言わないでしょ」

戦場で『お前が手を出したらこの様だ』なんて台詞。

神が私を見つめる。

種明かしは終わり。後は私の考えを述べるだけ、か。

「私は満足して死んだよ」

胸を張って答える。

神が一瞬だけ目を見開いた。

「まだ、分からぬか？」

「逆に訊くけど、私が何で満足したか分かるの？」

「強がりであろう」

分からないのね。あんたは死なないから無理もない。

私はため息を一つ吐く。

「私は自分を貫いて、綺麗に死んだのよ」

神が私の心の底を探るように見てくる。

本心しか喋ってないのに、話し甲斐のない奴ね。

「あなたは死ぬ事の意味を理解できていない。だから過程を重視してる」

私は違う。結末である死に満足するために生きている。

価値観が違うと言えばそれまで。

「生きてる間も満足すればよかろう」

「それがベストね。だから、これからそうしてくるよ」

悪戯っ子な笑みを浮かべる私に神は額を押さえた。

「貴様は、素直さの欠片もないな」

徐々に、私の体が消えていく。

「まだ、第一の生が終わってないと何時から気付いていた？」

神が呆れを含んだ声で言う。

「最初からかなぁ。人の痛みを思い出しても活用する場面がなきゃ意味が無いでしょ？」

神が深々とため息を吐いた。

そして、気を取り直すように咳払いをする。

「最期の夢の意味は分かるな？」

自殺した日の夢ね。

「壊すな、手に入れろ！　って感じかなぁ」

「諦めるなという意味だ。人の痛みは分かるな？」

「自分を傷付けるなって意味よね」

自分に嘘ついて、孤独を孤高に置き換えて生きてきたから。

「向き合う覚悟は出来てるよ。戻して」

いじめのあるあの世界で、私は生きてみるよ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

案外、人の体は丈夫に出来ているらしい。

そう言ったら、医者に「もう飛び降りるなよ」と釘をさされた。

病室に見舞いは来ない。私を気遣う看護士との会話は増えるばかりだ。

教室で大暴れした件に関しては学校長を呼びつけて、痛み分けにするよう脅しておいた。
死者が出ていないから出来る芸当。私に殴られた連中も明るみに出るとまずい事実の前に被害届を出せずにいたらしい。
これから卒業まで色々と大変だろうけど、私は楽観視している。
人間と魔物を相手取って、一人で戦争するよりは簡単だろうから。

「さて、何から始めようかな」

病室の窓から空を見上げながら私は呟いた。

「友達つくるかなぁ」

六十八話　エピローグ（後書き）

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

評価や感想を下さる方々のおかげで書き上げることが出来ました。

この場を借りてお礼申し上げます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3273w/

嘘つき魔王

2011年11月28日04時15分発行